

【表紙】

【提出書類】 有価証券報告書

【根拠条文】 金融商品取引法第24条第1項

【提出先】 関東財務局長

【提出日】 2019年6月24日

【事業年度】 第204期(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

【会社名】 株式会社 百五銀行

【英訳名】 The Hyakugo Bank, Ltd.

【代表者の役職氏名】 取締役頭取 伊藤 歳 恭

【本店の所在の場所】 三重県津市岩田21番27号

【電話番号】 059(227)2151(代表)

【事務連絡者氏名】 経営企画部長 浦田 康 寛

【最寄りの連絡場所】 東京都中央区日本橋一丁目2番6号
株式会社 百五銀行東京事務所

【電話番号】 03(3275)0361

【事務連絡者氏名】 東京事務所長 高 向 均

【縦覧に供する場所】 株式会社名古屋証券取引所
(名古屋市中区栄三丁目8番20号)
株式会社東京証券取引所
(東京都中央区日本橋兜町2番1号)
株式会社百五銀行東京営業部
(東京都中央区日本橋一丁目2番6号)
株式会社百五銀行名古屋支店
(名古屋市中村区名駅四丁目26番13号)

(注) 東京営業部は金融商品取引法の規定による備付場所ではありませんが、投資者の便宜のため縦覧に供する場所としております。

第一部 【企業情報】

第1 【企業の概況】

1 【主要な経営指標等の推移】

(1) 当連結会計年度の前4連結会計年度及び当連結会計年度に係る次に掲げる主要な経営指標等の推移

		2014年度	2015年度	2016年度	2017年度	2018年度
		(自2014年 4月1日 至2015年 3月31日)	(自2015年 4月1日 至2016年 3月31日)	(自2016年 4月1日 至2017年 3月31日)	(自2017年 4月1日 至2018年 3月31日)	(自2018年 4月1日 至2019年 3月31日)
連結経常収益	百万円	80,860	83,211	83,390	90,612	85,847
連結経常利益	百万円	16,854	18,606	13,288	16,775	15,482
親会社株主に帰属する 当期純利益	百万円	10,648	13,634	9,040	11,690	10,843
連結包括利益	百万円	58,768	19,382	10,728	20,940	603
連結純資産額	百万円	357,052	335,653	342,761	357,391	355,859
連結総資産額	百万円	5,334,540	5,334,703	5,537,292	5,741,767	6,265,275
1株当たり純資産額	円	1,375.30	1,288.87	1,332.82	1,407.93	1,401.81
1株当たり当期純利益	円	41.97	53.73	35.63	46.07	42.73
潜在株式調整後 1株当たり当期純利益	円	41.92	53.67	35.58	46.00	42.66
自己資本比率	%	6.54	6.13	6.10	6.22	5.67
連結自己資本利益率	%	3.31	4.03	2.71	3.36	3.04
連結株価収益率	倍	13.27	7.85	12.46	10.91	8.23
営業活動による キャッシュ・フロー	百万円	84,843	5,259	87,032	12,895	262,437
投資活動による キャッシュ・フロー	百万円	39,953	115,045	57,251	274,220	33,436
財務活動による キャッシュ・フロー	百万円	2,040	2,046	18,763	6,337	2,158
現金及び現金同等物 の期末残高	百万円	209,342	317,068	328,084	608,857	902,578
従業員数 [外、平均臨時従業員数]	人	2,947 [1,312]	2,973 [1,309]	2,973 [1,256]	2,973 [1,258]	2,975 [1,263]

(注) 1 当行及び連結子会社の消費税及び地方消費税の会計処理は、税抜方式によっております。

2 自己資本比率は、(期末純資産の部合計 - 期末新株予約権 - 期末非支配株主持分)を期末資産の部合計で除して算出しております。

3 従来「その他の経常収益」に計上してございました保険の受取配当金の一部については、2018年度より「役員取引等費用」及び「営業経費」に計上しており、2017年度の計数の組替えを行っております。

(2) 当行の当事業年度の前4事業年度及び当事業年度に係る主要な経営指標等の推移

回次		第200期	第201期	第202期	第203期	第204期
決算年月		2015年3月	2016年3月	2017年3月	2018年3月	2019年3月
経常収益	百万円	69,360	71,756	70,668	78,319	73,225
経常利益	百万円	15,002	16,954	11,772	15,531	15,023
当期純利益	百万円	10,025	13,172	8,462	10,956	10,766
資本金	百万円	20,000	20,000	20,000	20,000	20,000
発行済株式総数	千株	254,119	254,119	254,119	254,119	254,119
純資産額	百万円	333,210	324,077	330,115	346,267	346,349
総資産額	百万円	5,300,797	5,317,683	5,517,840	5,723,446	6,249,680
預金残高	百万円	4,414,467	4,452,949	4,551,980	4,722,896	4,882,986
貸出金残高	百万円	2,818,004	2,887,184	2,940,712	3,102,047	3,441,753
有価証券残高	百万円	2,143,824	2,001,362	2,049,345	1,788,672	1,741,466
1株当たり純資産額	円	1,313.03	1,276.84	1,300.58	1,364.09	1,364.33
1株当たり配当額 (内1株当たり中間配当額)	円 (円)	8.00 (4.00)	8.00 (4.00)	8.00 (4.00)	8.00 (4.00)	9.00 (4.50)
1株当たり当期純利益	円	39.51	51.91	33.35	43.18	42.43
潜在株式調整後 1株当たり当期純利益	円	39.47	51.86	33.30	43.11	42.36
自己資本比率	%	6.28	6.09	5.98	6.04	5.53
自己資本利益率	%	3.23	4.00	2.58	3.24	3.11
株価収益率	倍	14.09	8.12	13.31	11.64	8.29
配当性向	%	20.24	15.41	23.98	18.52	21.21
従業員数 [外、平均臨時従業員数]	人	2,409 [1,197]	2,427 [1,192]	2,409 [1,153]	2,399 [1,155]	2,377 [1,162]
株主総利回り (比較指標：TOPIX)	%	133.25 (130.68)	103.30 (116.54)	110.37 (133.67)	126.17 (154.88)	92.68 (147.07)
最高株価	円	608	647	526	583	522
最低株価	円	379	360	330	424	352

- (注) 1 消費税及び地方消費税の会計処理は、税抜方式によっております。
2 第204期中間配当についての取締役会決議は2018年11月9日に行いました。
3 第204期の1株当たり配当額のうち50銭(1株当たり中間配当額のうち50銭)は創立140周年記念配当であります。
4 自己資本比率は、(期末純資産の部合計 - 期末新株予約権)を期末資産の部合計で除して算出しております。
5 最高株価及び最低株価は、東京証券取引所市場第1部におけるものであります。
6 従来「その他の経常収益」に計上しておりました保険の受取配当金の一部については、第204期より「その他の役務費用」及び「営業経費」に計上しており、第203期の計数の組替えを行っております。

2 【沿革】

1878年12月	第百五国立銀行設立(資本金8万円)
1897年7月	第百五国立銀行の営業を継承、普通銀行に改組し、株式会社百五銀行として発足(資本金24万円、本店津市)、その後、1905年10月亀山銀行、1916年12月桑名銀行、1920年6月尾鷲銀行、紀北商業銀行、1920年12月八十三銀行、1921年10月伊賀上野銀行、1922年3月吉田銀行、1925年4月河芸銀行、1929年12月一志銀行、1943年3月勢南銀行、1943年9月三重共同貯蓄銀行をそれぞれ買収あるいは合併
1952年1月	外国為替業務取扱開始
1968年9月	本店新築移転
1973年4月	当行株式、東京証券取引所、名古屋証券取引所市場第2部に上場(1974年2月市場第1部に指定替)
1975年11月	総合オンラインシステム完成
1979年5月	第2次総合オンラインシステム稼働
1979年7月	百五ビジネスサービス株式会社設立(現・連結子会社)
1983年10月	百五ダイヤモンドクレジット株式会社設立〔1989年4月に株式会社百五ディーシーカード、2018年10月に株式会社百五カードに社名変更〕(現・連結子会社)
1984年10月	百五オリエント・リース株式会社設立〔1989年4月に百五リース株式会社に社名変更〕(現・連結子会社)
1985年6月	債券ディーリング業務開始
1985年7月	百五管理サービス株式会社設立(現・連結子会社)
1985年7月	株式会社百五経済研究所設立〔2016年7月に株式会社百五総合研究所に社名変更〕(現・連結子会社)
1987年6月	担保附社債信託法に基づく受託業務開始
1988年10月	ニューヨーク駐在員事務所を開設(1991年10月 ニューヨーク支店に昇格)
1988年10月	百五不動産調査株式会社設立(現・連結子会社)
1990年3月	百五コンピュータソフト株式会社設立(現・連結子会社)
1991年11月	シンガポール駐在員事務所を開設
1993年5月	新総合オンラインシステム稼働
1998年12月	証券投資信託の窓口販売業務開始
1999年3月	ニューヨーク支店を廃止(ニューヨーク駐在員事務所を開設)
2000年3月	三重県信用組合の事業譲受け
2001年4月	保険商品の窓口販売業務開始
2001年6月	百五オフィスサービス株式会社設立(現・連結子会社)
2003年11月	上海駐在員事務所を開設
2003年12月	ニューヨーク駐在員事務所を閉鎖
2004年6月	百五スタッフサービス株式会社設立(現・連結子会社)
2005年1月	金融商品仲介業務開始
2007年5月	次世代オープン勘定系システム『Bank Vision』稼働
2009年8月	百五証券株式会社設立(現・連結子会社)
2012年11月	バンコク駐在員事務所を開設
2015年9月	岩田本店棟を新築
2016年1月	丸之内本部棟を新築

3 【事業の内容】

当行及び当行の関係会社は、当行、連結子会社10社で構成され、銀行業務を中心に、リース業務などの金融サービスに係る事業を行っており、その金融サービスに係る事業内容を基礎とした業務区分別のセグメントから構成されております。

当行及び当行の関係会社の事業に係わる位置づけは次のとおりであります。なお、事業の区分は「第5 経理の状況 1(1)連結財務諸表 注記事項」に掲げるセグメントの区分と同一であります。

報告セグメント

〔銀行業〕

当行の本支店109ヵ店等においては、預金業務、貸出業務、内国為替業務、外国為替業務等を行っております。また、投資信託・保険等の窓口販売業務、金融商品仲介業務のほか、M & A・シンジケートローン等にも積極的に取り組み、お客さまの多様化するニーズにお応えしております。

また、百五ビジネスサービス株式会社においては、現金等の精査・整理業務等を、百五管理サービス株式会社においては、文書帳簿等保管管理業務等を、百五不動産調査株式会社においては、担保不動産の調査・評価業務等を、百五オフィスサービス株式会社においては、当行の手形・債券等の集中保管・管理業務等を、百五スタッフサービス株式会社においては、職業紹介業務・労務管理業務等をそれぞれ行っております。

〔リース業〕

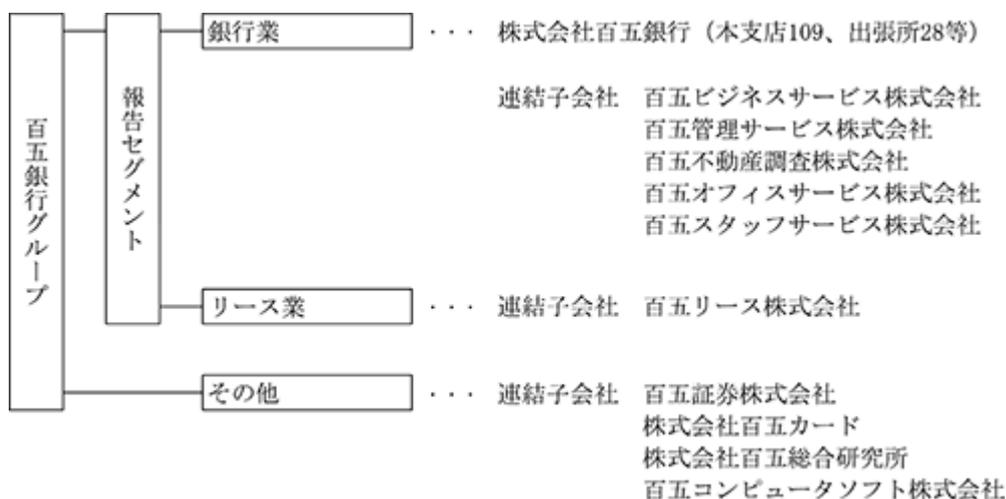
百五リース株式会社においては、リース業務等を行っております。

報告セグメントに含まれない事業セグメント

〔その他〕

百五証券株式会社においては、金融商品取引業務を、株式会社百五カードにおいては、クレジットカード業務・信用保証業務等を、株式会社百五総合研究所においては、地域産業調査・コンサルティングに関する業務等を、百五コンピュータソフト株式会社においては、コンピュータによる情報処理の業務等をそれぞれ行っております。

以上述べた事項を事業系統図によって示すと次のとおりであります。



4 【関係会社の状況】

名称	住所	資本金 (百万円)	主要な 事業の 内容	議決権の 所有割合 (%)	当行との関係内容				
					役員の 兼任等 (人)	資金 援助	営業上 の取引	設備の 賃貸借	業務 提携
(連結子会社) 百五ビジネス サービス株式 会社	三重県 津市	40	銀行業	100 () []	4 (2)		事務受託関係 預金取引関係	当行より 建物の一 部賃借	
百五管理サー ビス株式会社	三重県 津市	30	銀行業	100 () []	4 (2)		事務受託関係 預金取引関係	当行より 建物の一 部賃借	
百五不動産調 査株式会社	三重県 津市	20	銀行業	100 () []	4 (1)		事務受託関係 預金取引関係	当行より 建物の一 部賃借	
百五オフィス サービス株式 会社	三重県 津市	20	銀行業	100 () []	4 (2)		事務受託関係 預金取引関係	当行より 建物の一 部賃借	
百五スタッフ サービス株式 会社	三重県 津市	20	銀行業	100 () []	4 (2)		事務受託関係 預金取引関係	当行より 建物の一 部賃借	
百五証券株式 会社	三重県 津市	3,000	その他	100 () []	4 (3)		金融商品取引関係 金銭貸借関係 預金取引関係	当行より 建物の一 部賃借	
株式会社百五 カード	三重県 津市	50	その他	100 () []	4 (2)		保証業務関係 事務受託関係 金銭貸借関係 預金取引関係	当行より 建物の一 部賃借	
百五リース株 式会社	三重県 津市	50	リース業	100 (35) []	4 (3)		リース取引関係 金銭貸借関係 預金取引関係	当行より 建物の一 部賃借	
株式会社百五 総合研究所	三重県 津市	30	その他	100 (60) []	4 (2)		事務受託関係 預金取引関係	当行より 建物の一 部賃借	
百五コンピュ ーターソフト株 式会社	三重県 津市	30	その他	100 (95) []	4 (2)		事務受託関係 預金取引関係	当行より 建物の一 部賃借	

(注) 1 「主要な事業の内容」欄には、セグメント情報に記載された名称を記載しております。

2 上記関係会社のうち、特定子会社に該当するのは百五証券株式会社であります。

3 上記関係会社のうち、有価証券届出書又は有価証券報告書を提出している会社はありません。

4 「議決権の所有割合」欄の()内は子会社による間接所有の割合(内書き)、[]内は、「自己と出資、人事、資金、技術、取引等において緊密な関係があることにより自己の意思と同一の内容の議決権を行使すると認められる者」又は「自己の意思と同一の内容の議決権を行使することに同意している者」による所有割合(外書き)であります。

5 「当行との関係内容」の「役員の兼任等」欄の()内は、当行の役員(内書き)であります。

6 百五リース株式会社については、連結財務諸表の経常収益に占める同社の経常収益(連結会社相互間の内部経常収益を除く。)の割合が100分の10を超えておりますが、「セグメント情報」に記載されているリース業の経常収益の全額が同社の経常収益(セグメント間の内部経常収益又は振替高を含む。)であるため、主要な損益情報等の記載を省略しております。

7 株式会社百五カードは、2018年10月1日付で株式会社百五ディーシーカードから商号変更を行っております。

5 【従業員の状況】

(1) 連結会社における従業員数

2019年3月31日現在

セグメントの名称	銀行業	リース業	その他	合計
従業員数(人)	2,700 [1,240]	39 [5]	236 [18]	2,975 [1,263]

(注) 1 従業員数は、就業人員数であり、海外の現地採用者を含み、嘱託及び臨時従業員1,231人を含んでおりません。

2 臨時従業員数は、[]内に年間の平均人員を外書きで記載しております。

(2) 当行の従業員数

2019年3月31日現在

従業員数(人)	平均年齢(歳)	平均勤続年数(年)	平均年間給与(千円)
2,377 [1,162]	40.3	15.2	6,852

(注) 1 従業員数は、就業人員数であり、海外の現地採用者を含み、嘱託及び臨時従業員1,134人を含んでおりません。

2 当行の従業員はすべて銀行業のセグメントに属しております。

3 臨時従業員数は、[]内に年間の平均人員を外書きで記載しております。

4 平均年間給与は、賞与及び基準外賃金を含んでおります。

5 当行の従業員組合は、百五銀行従業員組合と称し、組合員数は1,901人であります。労使間においては特記すべき事項はありません。

第2 【事業の状況】

1 【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】

(1) 会社の経営の基本方針

当行は「信用を大切に社会をささえます。」「公明正大で責任ある経営をします。」「良識ある社会人として誠実に行動します。」の3つの企業理念に基づき、健全な金融活動を通じて信頼し合える社会づくりに努めるとともに、お客さま本位の経営を推進しております。

(2) 目標とする経営指標

2016年4月から3年間にわたって進めてまいりました中期経営計画『「Next COMPASS 140」～今こそ、磐石。次の未来のステージへ～』では、以下の項目を目標に掲げ、経営体質のさらなる強化に向けて、預金や貸出金、預り資産の増強などに積極的に取り組んでまいりました。

この間、市場の不透明感が続いた影響もあり、投資信託が大幅な未達成となりましたほか、預金も未達成となりました。一方、貸出金が住宅ローンを中心に順調に増加したことなどから、収益面では目標を達成いたしました。

(中期経営計画「Next COMPASS 140」における目標と2018年度の実績)

項目	2018年度目標	2018年度実績
総預金平残(譲渡性預金含む)	5兆1,900億円以上	4兆9,929億円
総貸出金平残	3兆1,500億円以上	3兆2,462億円
投資信託未残(百五証券含む)	3,000億円以上	1,355億円
当期純利益	65億円以上	107億円
ROE(株主資本ベース)	2.7%以上	4.32%
自己資本比率(パーゼル 完全実施ベース)	8.5%以上	9.30%

自己資本比率は、2017年9月末より、信用リスク・アセット額の計測手法を「標準的手法」から「基礎的內部格付手法」に変更しております。なお、2018年度目標の計数は、中期経営計画の策定時において「標準的手法」により算出したものであります。

(3) 中長期的な会社の経営戦略

本年4月から取り組んでおります中期経営計画『KAI-KAKU150 1st STAGE「未来へのとびら」』では、3つの改革「収益構造改革」「組織・人材改革」「IT・デジタル改革」を掲げ、目標の達成に向けてさまざまな取組みを展開してまいります。

(中期経営計画『KAI-KAKU150 1st STAGE「未来へのとびら」』における目標)

項目	2021年度目標
当期純利益	100億円以上
ROE(株主資本ベース)	3.7%以上
OHR(コア業務粗利益ベース)	79%未満
自己資本比率	9.5%以上
総預金平残(譲渡性預金含む)	5兆2,300億円以上
総貸出金平残	3兆7,000億円以上
預貸率(平残ベース)	70%以上

(4) 経営環境及び会社の対処すべき課題

中期経営計画『KAI-KAKU150 1st STAGE「未来へのとびら」』では、人口減少の本格化や競争の激化、マイナス金利政策による利ざやの縮小、デジタルイノベーションの進展などの経営環境を踏まえたうえで、3つの改革「収益構造改革」「組織・人材改革」「IT・デジタル改革」に取り組み、長期ビジョン『お客さまと地域の未来を切り拓く「デジタル&コンサルティングバンク」』の実現に向けた土台づくりを進めてまいります。

「収益構造改革」では、多様化・深刻化するお客さまの課題・ニーズに対して、十分な金融仲介機能を発揮し、最適なコンサルティングおよびソリューションの提供を行うことで、貸出金収益および役務収益の増強をはかってまいります。

「組織・人材改革」では、従来から取り組んできた働き方改革を深化させるとともに、ダイバーシティ推進により、あらゆる人材が力を発揮し、働きがいを実感できる職場づくりを進めてまいります。

「IT・デジタル改革」では、進化するデジタル技術を取り入れ、システムの全体最適化と中長期目線でのデジタル戦略を推進し、お客さまの利便性向上および銀行業務の抜本的な改善・効率化に取り組んでまいります。

また、当行は、「百五の森」の植樹や運営管理といった環境保全活動のほか、金融教育やスポーツ・文化振興支援などの活動を充実させ、地域社会の持続的発展に貢献いたします。

さらに、経営環境が変化するなかで、コーポレート・ガバナンスを強化・充実させていくとともに、組織全体としてマネー・ローダリングおよびテロ資金供与対策を高度化させることで、経営管理体制の強化に取り組んでまいります。

このように、当行は、ESG（環境・社会・ガバナンス）やSDGs（国連で採択された持続可能な開発目標）に関する考え方を積極的に経営に取り込み、本業を通じて社会的課題の解決をはかることで、持続可能な社会の実現と中長期的な企業価値の向上をめざしてまいります。

また、グループ各社においても積極的に業務革新を行い、百五グループ全体としてより質の高い多角的な金融サービスの提供に努めることによって、総合力の強化をはかってまいります。

2 【事業等のリスク】

有価証券報告書に記載した事業の状況、経理の状況等に関する事項のうち、投資者の判断に重要な影響を及ぼす可能性のある事項には、以下のようなものがあります。

なお、以下の記載における将来に関する事項は、当連結会計年度の末日現在において当行グループ（当行及び連結子会社）が判断したものであります。

(1) 財務面に関するリスク

不良債権及び貸倒引当金に係るリスク

(ア)不良債権

国内外の景気や地域経済の動向、貸出先の経営状況及び信用力の低下、あるいは不動産価格の下落等によって、不良債権額及び与信関係費用が増加し、業績に悪影響を及ぼす可能性があります。また、不良債権オフバランス化の進捗に伴い売却損や償却が増加し、業績に悪影響を及ぼす可能性があります。

(イ)貸倒引当金

貸倒引当金については、貸出先の状況、担保価値及び過去の貸倒実績率等に基づいて見積ったうえで計上しております。しかしながら、実際の貸倒れが見積りを上回り、計上している貸倒引当金が不十分となる可能性があります。また、経済環境の変化、貸出先の経営状況の変化、担保価値の低下あるいは貸倒引当金の算定方法の変更等により、貸倒引当金の積増しが必要になる可能性があります。

保有資産等の価格変動等に係るリスク

(ア)株価下落のリスク

株価が下落した場合には、保有株式等の評価益の減少、あるいは減損または評価損が発生し、業績に悪影響を及ぼす可能性があります。

(イ)金利変動のリスク

市場金利が上昇した場合には、保有債券等の評価益の減少、あるいは減損または評価損が発生し、業績に悪影響を及ぼす可能性があります。

また、貸出金や預金などの金融資産・負債の間で金利更改期間に差異があるため、金利変動により金融資産・負債の実質価値または資金利鞘に変動が生じ、業績に悪影響を及ぼす可能性があります。

(ウ)信用力悪化のリスク

債券及び株式に係る信用リスクが顕在化した場合には、保有有価証券の評価益の減少、あるいは減損または評価損が発生し、業績に悪影響を及ぼす可能性があります。

また、外国証券等については、当該国の信用不安等によりカントリーリスクが顕在化した場合、業績に悪影響を及ぼす可能性があります。

自己資本比率に係るリスク

当行は海外に駐在員事務所を有しておりますが、海外営業拠点には該当しないため、連結自己資本比率及び単体自己資本比率を「銀行法第14条の2の規定に基づき、銀行がその保有する資産等に照らし自己資本の充実の状況が適当であるかどうかを判断するための基準」（2006年金融庁告示第19号）に定められている国内基準（4%）以上に維持する必要があります。

当行の自己資本比率が要求される水準を下回った場合には、金融庁長官から、業務の全部または一部の停止等

を含む様々な命令を受けることとなります。

当行の自己資本比率を低下させる主な要因として以下のものがあります。

- (ア)貸出先の信用力の悪化に伴うリスク・アセットの増加
- (イ)貸出金及び有価証券等の増加に伴うリスク・アセットの増加
- (ウ)貸出先の信用力の悪化に伴う与信関係費用及び有価証券等の減損額の増加
- (エ)繰延税金資産に関する算入制限または繰延税金資産の回収可能性の変動等
- (オ)パーゼル（国内基準）の経過措置による、段階的なリスク・アセットの増加及び自己資本額の減少
- (カ)その他、自己資本比率の基準及び算定方法の変更

収益性低下のリスク

規制緩和の進展及び資金需要の低迷等による競争激化、市場金利の更なる低下、あるいは高収益資産の減少等により収益性が低下し、業績に悪影響を及ぼす可能性があります。

格付低下のリスク

格付機関が当行の格付を引下げた場合には、資金取引条件の悪化あるいは預金金利の引上げ等により資金調達費用が増加し、業績に悪影響を及ぼす可能性があります。

為替リスク

当行の資産および負債の一部は外貨建てとなっておりますが、これら外貨建資産と負債の額が通貨毎に同額で相殺されない場合、または適切にヘッジされていない場合には、為替相場の不利な変動によって、業績に悪影響を及ぼす可能性があります。

デリバティブ取引に係るリスク

当行はヘッジ目的のほか、一定の限度額の範囲で短期的な売買による収益獲得を目的としたデリバティブ取引を利用しています。金利・為替相場・株価等の市場要因が不利な方向に変動した場合、あるいは契約先の倒産等によりデリバティブ取引が履行されなかった場合には、業績に悪影響を及ぼす可能性があります。

流動性リスク

予期せぬ資金の流出などにより資金繰りに必要な資金確保が困難になった場合、あるいは市場の混乱などにより債券など金融商品の売買において取引が困難になった場合には、著しく不利な条件で資金取引あるいは売買を余儀なくされる等、業績に悪影響を及ぼす可能性があります。

退職給付債務に係るリスク

年金資産の時価の下落、あるいは年金資産の運用利回りの低下等により、業績に悪影響を及ぼす可能性があります。また、年金制度の変更により過去勤務費用が発生する可能性があるほか、金利環境の変動その他の要因が退職給付債務及び年間積立額に影響を及ぼす可能性があります。

(2) 業務面に関するリスク

経営戦略等が奏功しないリスク

当行は、様々な経営戦略、事業戦略を実施しておりますが、各種要因によりこれらの戦略が奏功せず、当初想定していた結果をもたらさない可能性があります。

業務範囲拡大に伴うリスク

規制緩和に伴う銀行の業務範囲拡大を通じて、収益向上のため新たな分野に進出する場合には、従来保有していなかったリスクに晒される可能性があります。また、業務範囲拡大が予想通り進展しなかった場合、あるいは競争の激化等市場環境が変化した場合には、新規事業の収益が低迷し業績に悪影響を及ぼす可能性があります。

倫理・法務リスク

法令、規則、ルール、社会規範等の遵守の不徹底あるいは法律等の制定や改正への不適切な対応により問題が発生した場合、業績に悪影響を及ぼす可能性があります。

金融犯罪等に係るリスク

当行では、キャッシュカードの偽造・盗難や振り込み詐欺等の金融犯罪による被害を防止するため、セキュリティ強化に向けた対策を講じております。また、マネー・ロンダリング及びテロ資金供与防止を経営の重要な課題と位置付け、管理態勢の強化に取り組んでおります。しかしながら、高度化する金融犯罪等の発生により、不公正・不適切な取引を未然に防止することができなかった場合、不測の損失の発生や信用失墜等により、業績及び財務状況に悪影響を及ぼす可能性があります。

事務リスク

各種銀行取引に伴う事務に関する不適切な処理、事故及び不正等により事務リスクが顕在化した場合、業績に悪影響を及ぼす可能性があります。

システムリスク

銀行業務の多様化・高度化や取引量の増加に伴いコンピュータシステムは欠くことのできない存在となっております。当行においても様々な金融サービスを提供する上においてコンピュータシステムは重要な役割を果たしております。コンピュータシステムの停止や誤作動、システムの不備、コンピュータの不正使用やサイバー攻撃等によるシステムリスクが顕在化した場合、業績に悪影響を及ぼす可能性があります。

情報資産リスク

顧客情報や経営情報等の情報資産の漏洩、紛失、不適切な使用・取扱等により問題が発生した場合には、対応に要する直接的な費用の他、信用の低下等により業績に悪影響を及ぼす可能性があります。

人的リスク

人事処遇や勤務管理などの人事労務管理あるいは職場の安全衛生管理に関連して、重大な訴訟などの問題が発生した場合、業績に悪影響を及ぼす可能性があります。

外部委託に伴うリスク

当行の業務委託先において、委託業務の遂行に支障をきたした場合や、顧客情報の漏洩及び紛失等があった場合、業績に悪影響を及ぼす可能性があります。

リスク管理態勢の有効性に係るリスク

当行は、リスク管理態勢を整備し、各種のリスク管理方針やリスク管理規定等に基づきリスク管理を行っております。しかしながら、将来発生するリスクを正確に予測できないこと等により、リスク管理手法が有効に機能せず、業績に悪影響を及ぼす可能性があります。

内部統制の構築等に係るリスク

金融商品取引法に基づき、当行は、財務報告に係る内部統制の有効性を評価し、その結果を内部統制報告書において開示しております。当行は、適正な内部統制の構築、維持、運営に努めておりますが、想定外の開示すべき重要な不備が発生して期末日までに是正が間に合わない場合、あるいは監査法人により財務報告に係る内部統制が十分に機能していないと評価されるような事態が発生した場合には、当行の財務報告に対する信頼を損なう可能性があるほか、業績に悪影響を及ぼす可能性があります。

(3) 外部環境等に関するリスク

営業基盤である地域経済が低迷するリスク

当行の主たる営業基盤は三重県及び愛知県にあり、地域に貢献すると同時に地域のお客さまとの共存共栄を実現することが、当行の発展につながるものと考えております。したがって、三重県及び愛知県経済が低迷した場合には、貸出先の業況悪化に伴い不良債権額及び与信関係費用が増加し、業績に悪影響を及ぼす可能性があります。

規制変更のリスク

当行は業務を行うにあたって、様々な法律、規則、政策、実務慣行、会計制度及び税制等の適用を受けております。これらの法令等及びその解釈は将来変更される可能性があり、その内容によっては、業績に悪影響を及ぼす可能性があります。

風評リスク

市場または顧客の間で風説が流布されるなど、風評リスクが顕在化した場合には、資金繰りに支障をきたす等、業績に悪影響を及ぼす可能性があります。

災害等の発生に係るリスク

当行の主要な営業地域である三重県及び愛知県は、南海トラフ地震等の被害を受ける可能性の高い地域が含まれております。このような地震や台風等の災害について想定していない被害を受けた場合、当行の被災による損害の発生や、不良債権額及び与信関係費用の増加により、業績に悪影響を及ぼす可能性があります。また、新型コロナウイルス等の感染症の流行等により、地域の経済が停滞、あるいは業務運営に支障が生じた場合には、業績に悪影響を及ぼす可能性があります。

3 【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

(1) 経営成績等の状況の概要

当連結会計年度における当行グループ（当行及び連結子会社）の財政状態、経営成績及びキャッシュ・フロー（以下「経営成績等」という。）の状況の概要は次のとおりであります。

・業績

当連結会計年度のわが国経済は、個人消費の持ち直しや設備投資の増加を背景に、緩やかな改善が続きました。このような状況下、当行の主要な営業地域である三重・愛知両県下の経済につきましても、基調としては緩やかに拡大しました。

先行きにつきましては、地域創生への取組みによる地域経済活性化や生産性の向上などを背景に、緩やかな景気回復が期待されますが、海外経済の不確実性や通商問題などにより景気が下押しされるリスクが高まっており、金融市場や実体経済への影響に留意する必要があります。

このような経済情勢のなかで、当行の連結ベースでの業績は次のようになりました。

預金等（譲渡性預金含む）は個人預金や法人預金が堅調に推移したことなどから、当連結会計年度末残高は前連結会計年度末に比べ1,551億円増加し、5兆527億円となりました。

貸出金は法人向け貸出や住宅ローンなどの個人向け貸出が増加したことなどから、当連結会計年度末残高は前連結会計年度末に比べ3,361億円増加し、3兆4,313億円となりました。

また、有価証券の当連結会計年度末残高は前連結会計年度末に比べ473億円減少し、1兆7,314億円となりました。

損益状況につきましては、経常収益は国債等債券売却益の減少によりその他業務収益が減少したことや、株式等売却益の減少によりその他経常収益が減少したことなどから、前連結会計年度に比べ47億64百万円減少し、858億47百万円となりました。

一方、経常費用は国債等債券売却損の減少によりその他業務費用が減少したことなどから、前連結会計年度に比べ34億72百万円減少し、703億64百万円となりました。

この結果、経常利益は前連結会計年度に比べ12億92百万円減少し、154億82百万円となりました。

また、親会社株主に帰属する当期純利益は前連結会計年度に比べ8億46百万円減少し、108億43百万円となりました。

なお、包括利益は前連結会計年度に比べ203億37百万円減少し、6億3百万円となりました。

報告セグメントごとの損益状況は、銀行業セグメントにおいて経常収益は前連結会計年度に比べ49億92百万円減少して730億40百万円、セグメント利益は前連結会計年度に比べ5億40百万円減少して149億60百万円となりました。リース業セグメントにおいて経常収益は前連結会計年度に比べ6億33百万円増加して102億24百万円、セグメント利益は前連結会計年度に比べ11百万円減少して4億6百万円となりました。また、報告セグメントに含まれていない事業セグメントにおいて経常収益は前連結会計年度に比べ73百万円増加して50億74百万円、セグメント利益は前連結会計年度に比べ74百万円減少して7億96百万円となりました。

・キャッシュ・フロー

当連結会計年度のキャッシュ・フローの状況は、営業活動によるキャッシュ・フローが、預金の増加などにより2,624億37百万円のプラス（前連結会計年度比2,495億41百万円増加）、投資活動によるキャッシュ・フローが、有価証券の売却による収入などにより334億36百万円のプラス（前連結会計年度比2,407億83百万円減少）、財務活動によるキャッシュ・フローが、配当金の支払などにより21億58百万円のマイナス（前連結会計年度比41億78百万円増加）となりました。

この結果、現金及び現金同等物の期末残高は前連結会計年度に比べ2,937億21百万円増加し、9,025億78百万円となりました。

国内・国際業務部門別収支

当連結会計年度の資金運用収支は、国内業務部門で前連結会計年度比1億18百万円減少して420億44百万円、国際業務部門で前連結会計年度比9億65百万円増加して66億51百万円、合計で前連結会計年度比8億47百万円増加して486億96百万円となりました。役務取引等収支は、国内業務部門で前連結会計年度比5億87百万円増加して118億59百万円、国際業務部門で前連結会計年度比1億18百万円増加して1億83百万円、合計で前連結会計年度比7億6百万円増加して120億43百万円となりました。その他業務収支は、国内業務部門で前連結会計年度比12億48百万円増加して11億82百万円、国際業務部門で前連結会計年度比1億75百万円増加して30億67百万円、合計で前連結会計年度比14億24百万円増加して18億84百万円となりました。

種類	期別	国内業務部門	国際業務部門	相殺消去額()	合計
		金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)
資金運用収支	前連結会計年度	42,162	5,686		47,849
	当連結会計年度	42,044	6,651		48,696
うち資金運用収益	前連結会計年度	44,601	8,433	106	52,928
	当連結会計年度	44,014	9,430	63	53,381
うち資金調達費用	前連結会計年度	2,438	2,747	106	5,079
	当連結会計年度	1,969	2,779	63	4,685
役務取引等収支	前連結会計年度	11,271	64		11,336
	当連結会計年度	11,859	183		12,043
うち役務取引等収益	前連結会計年度	14,876	165		15,041
	当連結会計年度	15,919	261		16,180
うち役務取引等費用	前連結会計年度	3,604	100		3,705
	当連結会計年度	4,059	78		4,137
その他業務収支	前連結会計年度	65	3,243		3,309
	当連結会計年度	1,182	3,067		1,884
うちその他業務収益	前連結会計年度	9,796	5,646		15,443
	当連結会計年度	10,876	1,471	1	12,347
うちその他業務費用	前連結会計年度	9,862	8,890		18,752
	当連結会計年度	9,693	4,539	1	14,232

(注) 1 国内業務部門は当行の国内店及び連結子会社の円建取引、国際業務部門は当行の国内店及び連結子会社の外貨建取引であります。ただし、円建対非居住者取引、特別国際金融取引勘定分等は国際業務部門に含めております。

2 資金調達費用は金銭の信託運用見合費用(前連結会計年度0百万円、当連結会計年度0百万円)を控除して表示しております。

3 相殺消去額は、国内業務部門と国際業務部門の間の資金貸借の利息等であります。

4 前連結会計年度において「その他の経常収益」に計上しておりました保険の受取配当金の一部については、当連結会計年度より「役務取引等費用」及び「営業経費」に計上しており、前連結会計年度の計数の組替えを行っております。

国内・国際業務部門別資金運用 / 調達の状況

当連結会計年度の資金運用勘定は、貸出金を中心に平均残高（相殺消去後）は前連結会計年度比1,103億円増加して5兆1,957億円、利回りは前連結会計年度比0.02ポイント低下して1.02%となりました。このうち国内業務部門においては、平均残高は前連結会計年度比1,966億円増加して5兆1,013億円、利回りは前連結会計年度比0.04ポイント低下して0.86%となりました。国際業務部門においては、平均残高は前連結会計年度比925億円減少して3,474億円、利回りは前連結会計年度比0.80ポイント上昇して2.71%となりました。

一方、資金調達勘定はコールマネーを中心に平均残高（相殺消去後）は前連結会計年度比5,030億円増加して5兆6,108億円、利回りは前連結会計年度比0.01ポイント低下して0.08%となりました。このうち国内業務部門においては、平均残高は前連結会計年度比5,896億円増加して5兆5,153億円、利回りは前連結会計年度比0.01ポイント低下して0.03%となりました。国際業務部門においては、平均残高は前連結会計年度比928億円減少して3,486億円、利回りは前連結会計年度比0.17ポイント上昇して0.79%となりました。

(ア) 国内業務部門

種類	期別	平均残高	利息	利回り
		金額(百万円)	金額(百万円)	(%)
資金運用勘定	前連結会計年度	4,904,732	44,601	0.90
	当連結会計年度	5,101,391	44,014	0.86
うち貸出金	前連結会計年度	2,824,191	28,338	1.00
	当連結会計年度	3,060,473	28,226	0.92
うち商品有価証券	前連結会計年度	242	2	0.97
	当連結会計年度	55	0	0.73
うち有価証券	前連結会計年度	1,564,767	15,876	1.01
	当連結会計年度	1,546,283	15,454	0.99
うちコールローン 及び買入手形	前連結会計年度	24,800	2	0.00
	当連結会計年度	14,113	2	0.01
うち買現先勘定	前連結会計年度			
	当連結会計年度			
うち債券貸借取引 支払保証金	前連結会計年度			
	当連結会計年度			
うち預け金	前連結会計年度	212,108	211	0.09
	当連結会計年度	210,038	209	0.09
資金調達勘定	前連結会計年度	4,925,701	2,438	0.04
	当連結会計年度	5,515,316	1,969	0.03
うち預金	前連結会計年度	4,592,387	993	0.02
	当連結会計年度	4,749,367	749	0.01
うち譲渡性預金	前連結会計年度	186,353	30	0.01
	当連結会計年度	204,674	30	0.01
うちコールマネー 及び売渡手形	前連結会計年度	53,123	20	0.03
	当連結会計年度	238,123	91	0.03
うち売現先勘定	前連結会計年度			
	当連結会計年度			
うち債券貸借取引 受入担保金	前連結会計年度	13,107	1	0.00
	当連結会計年度	62,274	6	0.00
うちコマースナル・ ペーパー	前連結会計年度			
	当連結会計年度			
うち借入金	前連結会計年度	82,061	37	0.04
	当連結会計年度	262,274	31	0.01

(注) 1 国内業務部門は当行の国内店及び連結子会社の円建取引であります。ただし、円建対非居住者取引、特別国際金融取引勘定等分は国際業務部門に含めております。

2 平均残高は、原則として日々の残高の平均に基づいて算出しておりますが、連結子会社については、半年毎の残高に基づく平均残高を利用してあります。

3 資金運用勘定は無利息預け金の平均残高(前連結会計年度150,022百万円、当連結会計年度544,007百万円)を、資金調達勘定は金銭の信託運用見合額の平均残高(前連結会計年度2,000百万円、当連結会計年度1,999百万円)及び利息(前連結会計年度0百万円、当連結会計年度0百万円)をそれぞれ控除して表示しております。

(イ) 国際業務部門

種類	期別	平均残高	利息	利回り
		金額(百万円)	金額(百万円)	(%)
資金運用勘定	前連結会計年度	440,049	8,433	1.91
	当連結会計年度	347,464	9,430	2.71
うち貸出金	前連結会計年度	155,139	3,616	2.33
	当連結会計年度	177,125	5,870	3.31
うち商品有価証券	前連結会計年度			
	当連結会計年度			
うち有価証券	前連結会計年度	231,342	3,942	1.70
	当連結会計年度	134,138	2,664	1.98
うちコールローン 及び買入手形	前連結会計年度	49,759	859	1.72
	当連結会計年度	33,610	872	2.59
うち買現先勘定	前連結会計年度			
	当連結会計年度			
うち債券貸借取引 支払保証金	前連結会計年度			
	当連結会計年度			
うち預け金	前連結会計年度	267	0	0.19
	当連結会計年度	233	0	0.20
資金調達勘定	前連結会計年度	441,535	2,747	0.62
	当連結会計年度	348,637	2,779	0.79
うち預金	前連結会計年度	22,892	142	0.62
	当連結会計年度	26,507	249	0.93
うち譲渡性預金	前連結会計年度			
	当連結会計年度			
うちコールマネー 及び売渡手形	前連結会計年度	95	1	1.42
	当連結会計年度	20	0	2.10
うち売現先勘定	前連結会計年度			
	当連結会計年度			
うち債券貸借取引 受入担保金	前連結会計年度	147,276	1,365	0.92
	当連結会計年度	57,186	1,147	2.00
うちコマース・ ペーパー	前連結会計年度			
	当連結会計年度			
うち借入金	前連結会計年度	11,828	178	1.50
	当連結会計年度	11,729	275	2.34

(注) 1 国際業務部門は当行の国内店及び連結子会社の外貨建取引であります。ただし、円建対非居住者取引、特別国際金融取引勘定等分は国際業務部門に含めております。

2 平均残高は、原則として日々の残高の平均に基づいて算出しておりますが、連結子会社については、半年毎の残高に基づく平均残高を利用しております。

3 国際業務部門の外貨建取引の平均残高は、月次カレント方式(前月末TT仲値を当該月のノンエクスチェンジ取引に適用する方式)により算出しております。

4 資金運用勘定は無利息預け金の平均残高(前連結会計年度69百万円、当連結会計年度75百万円)を控除して表示しております。

(ウ) 合計

種類	期別	平均残高(百万円)			利息(百万円)			利回り (%)
		小計	相殺 消去額 ()	合計	小計	相殺 消去額 ()	合計	
資金運用勘定	前連結会計年度	5,344,781	259,389	5,085,392	53,035	106	52,928	1.04
	当連結会計年度	5,448,855	253,084	5,195,771	53,444	63	53,381	1.02
うち貸出金	前連結会計年度	2,979,331		2,979,331	31,954		31,954	1.07
	当連結会計年度	3,237,598		3,237,598	34,097		34,097	1.05
うち商品有価証券	前連結会計年度	242		242	2		2	0.97
	当連結会計年度	55		55	0		0	0.73
うち有価証券	前連結会計年度	1,796,110		1,796,110	19,819		19,819	1.10
	当連結会計年度	1,680,422		1,680,422	18,119		18,119	1.07
うちコールローン 及び買入手形	前連結会計年度	74,559		74,559	861		861	1.15
	当連結会計年度	47,724		47,724	874		874	1.83
うち買現先勘定	前連結会計年度							
	当連結会計年度							
うち債券貸借取引 支払保証金	前連結会計年度							
	当連結会計年度							
うち預け金	前連結会計年度	212,376		212,376	212		212	0.09
	当連結会計年度	210,271		210,271	209		209	0.09
資金調達勘定	前連結会計年度	5,367,236	259,389	5,107,847	5,186	106	5,079	0.09
	当連結会計年度	5,863,954	253,084	5,610,870	4,748	63	4,685	0.08
うち預金	前連結会計年度	4,615,280		4,615,280	1,136		1,136	0.02
	当連結会計年度	4,775,875		4,775,875	998		998	0.02
うち譲渡性預金	前連結会計年度	186,353		186,353	30		30	0.01
	当連結会計年度	204,674		204,674	30		30	0.01
うちコールマネー 及び売渡手形	前連結会計年度	53,219		53,219	19		19	0.03
	当連結会計年度	238,143		238,143	90		90	0.03
うち売現先勘定	前連結会計年度							
	当連結会計年度							
うち債券貸借取引 受入担保金	前連結会計年度	160,383		160,383	1,366		1,366	0.85
	当連結会計年度	119,460		119,460	1,153		1,153	0.96
うち コマーシャル・ ペーパー	前連結会計年度							
	当連結会計年度							
うち借入金	前連結会計年度	93,889		93,889	215		215	0.22
	当連結会計年度	274,004		274,004	306		306	0.11

(注) 1 相殺消去額は、国内業務部門と国際業務部門の間の資金貸借の平均残高及び利息であります。

2 資金運用勘定は無利息預け金の平均残高(前連結会計年度150,091百万円、当連結会計年度544,083百万円)を、資金調達勘定は金銭の信託運用見合額の平均残高(前連結会計年度2,000百万円、当連結会計年度1,999百万円)及び利息(前連結会計年度0百万円、当連結会計年度0百万円)をそれぞれ控除して表示しております。

国内・国際業務部門別役務取引の状況

当連結会計年度の役務取引等収益は、前連結会計年度比11億38百万円増加して161億80百万円となりました。このうち国内業務部門においては、前連結会計年度比10億43百万円増加して159億19百万円、国際業務部門においては、前連結会計年度比95百万円増加して2億61百万円となりました。

一方、役務取引等費用につきましては、国内業務部門で前連結会計年度比4億55百万円増加して40億59百万円、国際業務部門で前連結会計年度比22百万円減少して78百万円、合計で前連結会計年度比4億32百万円増加して41億37百万円となりました。

種類	期別	国内業務部門	国際業務部門	合計
		金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)
役務取引等収益	前連結会計年度	14,876	165	15,041
	当連結会計年度	15,919	261	16,180
うち預金・貸出業務	前連結会計年度	4,067		4,067
	当連結会計年度	5,111		5,111
うち為替業務	前連結会計年度	3,209	157	3,366
	当連結会計年度	3,210	250	3,461
うち証券関連業務	前連結会計年度	2,038		2,038
	当連結会計年度	1,718		1,718
うち代理業務	前連結会計年度	260		260
	当連結会計年度	263		263
うち保護預り・貸金庫業務	前連結会計年度	147		147
	当連結会計年度	144		144
うち保証業務	前連結会計年度	355	8	363
	当連結会計年度	340	10	350
役務取引等費用	前連結会計年度	3,604	100	3,705
	当連結会計年度	4,059	78	4,137
うち為替業務	前連結会計年度	559	72	631
	当連結会計年度	562	50	613

(注) 1 国内業務部門は当行の国内店及び連結子会社の円建取引、国際業務部門は当行の国内店の外貨建取引であります。ただし、円建対非居住者取引、特別国際金融取引勘定分等は国際業務部門に含めております。

2 前連結会計年度において「その他の経常収益」に計上しておりました保険の受取配当金の一部については、当連結会計年度より「役務取引等費用」及び「営業経費」に計上しており、前連結会計年度の計数の組替えを行っております。

国内・国際業務部門別預金残高の状況
預金の種類別残高(末残)

種類	期別	国内業務部門	国際業務部門	合計
		金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)
預金合計	前連結会計年度	4,691,431	24,665	4,716,096
	当連結会計年度	4,849,141	27,448	4,876,589
うち流動性預金	前連結会計年度	2,608,044		2,608,044
	当連結会計年度	2,752,552		2,752,552
うち定期性預金	前連結会計年度	2,056,654		2,056,654
	当連結会計年度	2,065,066		2,065,066
うちその他	前連結会計年度	26,731	24,665	51,397
	当連結会計年度	31,522	27,448	58,971
譲渡性預金	前連結会計年度	181,500		181,500
	当連結会計年度	176,185		176,185
総合計	前連結会計年度	4,872,931	24,665	4,897,596
	当連結会計年度	5,025,326	27,448	5,052,774

- (注) 1 国内業務部門は当行の国内店及び連結子会社の円建取引、国際業務部門は当行の国内店の外貨建取引であります。ただし、円建対非居住者取引、特別国際金融取引勘定分等は国際業務部門に含めております。
- 2 流動性預金 = 当座預金 + 普通預金 + 貯蓄預金 + 通知預金
- 3 定期性預金 = 定期預金

貸出金残高の状況

(ア) 業種別貸出状況(未残・構成比)

業種別	前連結会計年度		当連結会計年度	
	金額(百万円)	構成比(%)	金額(百万円)	構成比(%)
国内(除く特別国際金融取引勘定分)	3,095,211	100.00	3,431,337	100.00
製造業	334,900	10.82	362,702	10.57
農業, 林業	6,569	0.21	7,270	0.21
漁業	3,448	0.11	3,485	0.10
鉱業, 採石業, 砂利採取業	11,055	0.36	13,504	0.39
建設業	103,472	3.34	105,742	3.08
電気・ガス・熱供給・水道業	76,121	2.46	90,026	2.62
情報通信業	10,612	0.34	12,374	0.36
運輸業, 郵便業	117,092	3.78	123,174	3.59
卸売業, 小売業	250,875	8.11	267,809	7.81
金融業, 保険業	256,023	8.27	344,023	10.03
不動産業, 物品賃貸業	430,515	13.91	451,090	13.15
学術研究, 専門・技術サービス業	13,768	0.45	13,680	0.40
宿泊業	13,414	0.43	13,747	0.40
飲食業	16,046	0.52	17,780	0.52
生活関連サービス業, 娯楽業	24,278	0.78	24,547	0.72
教育, 学習支援業	7,444	0.24	7,640	0.22
医療・福祉	119,620	3.87	121,611	3.54
その他のサービス	40,713	1.32	39,908	1.16
国・地方公共団体	244,045	7.88	222,758	6.49
その他	1,015,191	32.80	1,188,457	34.64
特別国際金融取引勘定分				
政府等				
金融機関				
その他				
合計	3,095,211		3,431,337	

(注) 「国内」とは当行の国内店及び連結子会社であります。

(イ) 外国政府等向け債権残高(国別)

「銀行等金融機関の資産の自己査定並びに貸倒償却及び貸倒引当金の監査に関する実務指針」(日本公認会計士協会銀行等監査特別委員会報告第4号2012年7月4日)に規定する特定海外債権引当勘定を計上している国の外国政府等に対する債権残高はありません。

国内・国際業務部門別有価証券の状況
有価証券残高(末残)

種類	期別	国内業務部門	国際業務部門	合計
		金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)
国債	前連結会計年度	594,830		594,830
	当連結会計年度	541,697		541,697
地方債	前連結会計年度	390,194		390,194
	当連結会計年度	365,318		365,318
短期社債	前連結会計年度			
	当連結会計年度			
社債	前連結会計年度	400,603		400,603
	当連結会計年度	336,264		336,264
株式	前連結会計年度	183,314		183,314
	当連結会計年度	172,597		172,597
その他の証券	前連結会計年度	123,210	86,583	209,794
	当連結会計年度	136,270	179,270	315,541
合計	前連結会計年度	1,692,154	86,583	1,778,737
	当連結会計年度	1,552,148	179,270	1,731,418

(注) 1 国内業務部門は当行の国内店及び連結子会社の円建取引、国際業務部門は当行の国内店の外貨建取引であります。ただし、円建対非居住者取引、特別国際金融取引勘定分等は国際業務部門に含めております。

2 「その他の証券」には、外国債券及び外国株式を含んでおります。

(自己資本比率の状況)

(参考)

自己資本比率は、銀行法第14条の2の規定に基づき、銀行がその保有する資産等に照らし自己資本の充実の状況が適当であるかどうかを判断するための基準(2006年金融庁告示第19号)に定められた算式に基づき、連結ベースと単体ベースの双方について算出しております。

なお、当行は、国内基準を適用のうえ、信用リスク・アセットの算出においては基礎的内部格付手法を、オペレーショナル・リスク相当額に係る額の計算については粗利益配分手法を採用しております。

連結自己資本比率(国内基準)

(単位:億円、%)

	2019年3月31日
1 連結自己資本比率(2 ÷ 3)	10.09
2 連結における自己資本の額	2,394
3 リスク・アセットの額	23,711
4 連結総所要自己資本額	948

単体自己資本比率(国内基準)

(単位:億円、%)

	2019年3月31日
1 自己資本比率(2 ÷ 3)	9.74
2 単体における自己資本の額	2,285
3 リスク・アセットの額	23,458
4 単体総所要自己資本額	938

(資産の査定)

(参考)

資産の査定は、「金融機能の再生のための緊急措置に関する法律」(1998年法律第132号)第6条に基づき、当行の貸借対照表の社債(当該社債を有する金融機関がその元本の償還及び利息の支払の全部又は一部について保証しているものであって、当該社債の発行が金融商品取引法(1948年法律第25号)第2条第3項に規定する有価証券の私募によるものに限る。)、貸出金、外国為替、その他資産中の未収利息及び仮払金、支払承諾見返の各勘定に計上されるもの並びに貸借対照表に注記することとされている有価証券の貸付けを行っている場合のその有価証券(使用貸借又は賃貸借契約によるものに限る。)について債務者の財政状態及び経営成績等を基礎として次のとおり区分するものであります。

1 破産更生債権及びこれらに準ずる債権

破産更生債権及びこれらに準ずる債権とは、破産手続開始、更生手続開始、再生手続開始の申立て等の事由により経営破綻に陥っている債務者に対する債権及びこれらに準ずる債権をいう。

2 危険債権

危険債権とは、債務者が経営破綻の状態には至っていないが、財政状態及び経営成績が悪化し、契約に従った債権の元本の回収及び利息の受取りができない可能性の高い債権をいう。

3 要管理債権

要管理債権とは、3カ月以上延滞債権及び貸出条件緩和債権のうち、上記1及び2に掲げる債権以外のものに区分される債権をいう。

4 正常債権

正常債権とは、債務者の財政状態及び経営成績に特に問題がないものとして、上記1から3までに掲げる債権以外のものに区分される債権をいう。

資産の査定額

債権の区分	2018年3月31日	2019年3月31日
	金額(百万円)	金額(百万円)
破産更生債権及びこれらに準ずる債権	6,414	7,396
危険債権	39,316	37,970
要管理債権	6,723	6,882
正常債権	3,085,910	3,428,950

(注) 債権のうち外国為替、未収利息及び仮払金については、資産の自己査定基準に基づき、債務者区分を行っているものを対象としております。

(生産、受注及び販売の状況)

「生産、受注及び販売の状況」は、銀行業における業務の特殊性のため、該当する情報がないので記載しておりません。

(2) 経営者の視点による経営成績等の状況に関する分析・検討内容

経営者の視点による当行グループ（当行及び連結子会社）の経営成績等の状況に関する分析・検討内容は次のとおりであります。

なお、以下の記載における将来に関する事項は、当連結会計年度の末日現在において判断したものであります。

中期経営計画の目標と2018年度実績等については、「第2 事業の状況 1 経営方針、経営環境及び対処すべき課題等」に記載しております。

当連結会計年度は、資金運用収支やその他業務収支の増加などから連結業務純益は増加したものの、株式等売却益の減少などにより臨時損益が減少したことから、親会社株主に帰属する当期純利益は108億43百万円となりました。

	前連結会計年度 (百万円)	当連結会計年度 (百万円)	前連結会計年度比 (百万円)
資金運用収支	47,849	48,696	847
資金運用収益	52,928	53,381	452
資金調達費用（金銭の信託運用見合費用控除後）	5,079	4,685	394
役務取引等収支	11,336	12,043	706
役務取引等収益	15,041	16,180	1,138
役務取引等費用	3,705	4,137	432
その他業務収支	3,309	1,884	1,424
その他業務収益	15,443	12,347	3,096
その他業務費用	18,752	14,232	4,520
連結業務粗利益 (= + +)	55,876	58,854	2,977
営業経費（臨時費用控除後）	43,708	44,135	426
連結業務純益（一般貸倒引当金繰入前） (= -)	12,167	14,718	2,550
その他経常費用（一般貸倒引当金繰入額）		629	629
連結業務純益 (= - -)	12,167	15,347	3,180
その他経常収益	7,198	3,937	3,260
うち貸倒引当金戻入益	1,300		1,300
うち償却債権取立益	0	0	0
うち株式等売却益	4,977	3,273	1,704
資金調達費用（金銭の信託運用見合費用）	0	0	0
営業経費（臨時費用）	1,304	240	1,063
その他経常費用（一般貸倒引当金繰入額控除後）	1,285	3,561	2,276
うち不良債権処理額	174	1,450	1,276
うち株式等売却損	655	1,224	568
うち株式等償却	3	383	379
臨時損益 (= - - -)	4,607	134	4,472
経常利益	16,775	15,482	1,292
特別損益	155	177	22
税金等調整前当期純利益	16,619	15,304	1,314
法人税、住民税及び事業税	4,023	3,953	69
法人税等調整額	905	507	398
法人税等合計	4,929	4,461	467
当期純利益	11,690	10,843	846
親会社株主に帰属する当期純利益	11,690	10,843	846

(注) 前連結会計年度において「その他経常収益」に計上しておりました保険の受取配当金の一部については、当連結会計年度より「役務取引等費用」及び「営業経費（臨時費用控除後）」に計上しており、前連結会計年度の計数の組替えを行っております。

当連結会計年度における主な項目の具体的な分析は、以下のとおりであります。

経営成績の分析

主な収支

・資金運用収支

資金運用収益は、貸出金利息が増加したことなどにより、前連結会計年度比4億52百万円増加しました。また資金調達費用（金銭の信託運用見合費用控除後）は、債券貸借取引支払利息が減少したことなどから、前連結会計年度比3億94百万円減少しました。この結果、資金運用収支は前連結会計年度比8億47百万円増加し486億96百万円となりました。

・役務取引等収支

住宅ローン取扱手数料や保険窓販手数料が増加したことなどにより、役務取引等収支は前連結会計年度比7億6百万円増加し120億43百万円となりました。

・その他業務収支

国債等債券損益の増加などにより、その他業務収支は前連結会計年度比14億24百万円増加し18億84百万円となりました。

以上の結果、連結業務粗利益は、前連結会計年度比29億77百万円増加し588億54百万円となりました。

・営業経費（臨時費用控除後）

物件費が増加したことなどから、営業経費（臨時費用控除後）は前連結会計年度比4億26百万円増加し441億35百万円となりました。

以上の結果、連結業務純益（一般貸倒引当金繰入前）は、前連結会計年度比25億50百万円増加し147億18百万円となりました。

・与信関係費用（一般貸倒引当金繰入額 + 不良債権処理額 - 貸倒引当金戻入益 - 償却債権取立益）

与信関係費用は、前連結会計年度に一般貸倒引当金と個別貸倒引当金がいずれも取崩となり、貸倒引当金戻入益を計上した反動などから、連結会計年度比19億47百万円増加し8億20百万円となりました。

・株式等関係損益

株式等関係損益は、株式等売却益が減少したことなどにより、前連結会計年度比26億52百万円減少し16億65百万円となりました。

以上の結果、経常利益は、前連結会計年度比12億92百万円減少し154億82百万円となりました。

また、親会社株主に帰属する当期純利益は、前連結会計年度比8億46百万円減少し108億43百万円となりました。

財政状態の分析

(ア) 貸出金

貸出金は、法人向け貸出や住宅ローンなどの個人向け貸出が増加したことなどから、前連結会計年度末比3,361億円増加し3兆4,313億円となりました。

	前連結会計年度末 (億円)	当連結会計年度末 (億円)	前連結会計年度末比 (億円)
貸出金残高(未残)	30,952	34,313	3,361
うち個人向け貸出金	10,151	11,884	1,732
うち住宅ローン	9,527	11,256	1,728

〔ご参考〕

リスク管理債権の状況

リスク管理債権は、前連結会計年度末比2億円減少し526億円となりました。

貸出金等残高に対する比率は、前連結会計年度末比0.17ポイント低下し1.52%となりました。

債権区分別では、破綻先債権額が13億円増加、延滞債権額が17億円減少、3カ月以上延滞債権額が1億円増加、貸出条件緩和債権額が微増しております。

部分直接償却は実施しておりません。

		前連結会計年度末 (億円)	当連結会計年度末 (億円)	前連結会計年度末比 (億円)
リスク管理債権	破綻先債権額	8	21	13
	延滞債権額	454	436	17
	3カ月以上延滞債権額	0	1	1
	貸出条件緩和債権額	67	67	0
	合計	529	526	2

		前連結会計年度末 (%)	当連結会計年度末 (%)	前連結会計年度末比 (%)
貸出金等残高比	破綻先債権額	0.02	0.06	0.04
	延滞債権額	1.45	1.26	0.19
	3カ月以上延滞債権額	0.00	0.00	
	貸出条件緩和債権額	0.21	0.19	0.02
	合計	1.69	1.52	0.17

金融再生法ベースの区分による債権の状況

前連結会計年度末に比べ、破産更生債権及びこれらに準ずる債権が9億円増加、危険債権が13億円減少、要管理債権が1億円増加しております。

	前連結会計年度末 (億円)	当連結会計年度末 (億円)	前連結会計年度末比 (億円)
破産更生債権及びこれらに準ずる債権	69	79	9
危険債権	397	384	13
要管理債権	67	68	1
小計	535	532	2
合計に占める割合(%)	1.69	1.52	0.17
正常債権	31,067	34,485	3,418
合計	31,602	35,018	3,415

(イ) 有価証券

有価証券は、社債の減少等により、前連結会計年度末比473億円減少し、1兆7,314億円となりました。

	前連結会計年度末 (億円)	当連結会計年度末 (億円)	前連結会計年度末比 (億円)
有価証券	17,787	17,314	473
国債	5,948	5,416	531
地方債	3,901	3,653	248
社債	4,006	3,362	643
株式	1,833	1,725	107
その他の証券	2,097	3,155	1,057

(注) 「その他の証券」には、外国債券及び外国株式を含んでおります。

(ウ) 預金

預金は、個人預金や法人預金が堅調に推移したことなどから、前連結会計年度末比1,604億円増加し4兆8,765億円となりました。

	前連結会計年度末 (億円)	当連結会計年度末 (億円)	前連結会計年度末比 (億円)
預金	47,160	48,765	1,604
うち個人	36,477	37,417	939
うち法人	8,907	9,341	434

(注) 「法人」には「公金」及び「金融機関」は含まれておりません。

(工) 純資産の部

利益剰余金は、親会社株主に帰属する当期純利益108億円等により、前連結会計年度末比86億円増加し2,323億円となりました。

その他有価証券評価差額金は、前連結会計年度末比81億円減少し940億円となりました。

	前連結会計年度末 (億円)	当連結会計年度末 (億円)	前連結会計年度末比 (億円)
純資産の部合計	3,573	3,558	15
うち利益剰余金	2,236	2,323	86
うちその他有価証券評価差額金	1,021	940	81

経営成績に重要な影響を与える主な要因の分析

(ア) 与信関係費用

国内外の景気の低迷、特に主要な営業の地盤である地域経済の低迷は、貸出先の体力を低下させ債権分類区分の低下につながることから、貸倒引当金や貸出金償却等を増加させる要因となります。また、景気動向は土地等の不動産価格にも影響し、担保価値の変動要因となります。これらにより影響を受ける与信関係費用の増加は、経営成績に重要な影響を与える要因となります。

・当連結会計年度の与信関係費用

与信関係費用は、前連結会計年度比19億47百万円増加し8億20百万円となりました。

一般貸倒引当金繰入額については、正常先や要管理先の貸倒実績率の低下、資本的劣後ローンに対する引当金の減少などにより6億29百万円の取崩となりました。

個別貸倒引当金繰入額については、前連結会計年度は大口先の償還などにより取崩となっていた反動から、9億92百万円増加しました。

また、不良債権のオフバランス化を進めた結果、債権等売却損291百万円を計上しました。

	前連結会計年度 (百万円)	当連結会計年度 (百万円)	前連結会計年度比 (百万円)
その他経常費用のうち 一般貸倒引当金繰入額		629	629
その他経常費用のうち 不良債権処理額	174	1,450	1,276
貸出金償却	3	13	9
個別貸倒引当金繰入額		992	992
債権等売却損	4	291	287
その他	166	152	13
その他経常収益のうち 貸倒引当金戻入益	1,300		1,300
その他経常収益のうち 償却債権取立益	0	0	0
与信関係費用 (= + - -)	1,126	820	1,947
連結業務純益(一般貸倒引当金繰入前)	12,167	14,718	2,550
差引 (= -)	13,294	13,897	603

(注) 前連結会計年度において「その他の経常収益」に計上しておりました保険の受取配当金の一部については、当連結会計年度より「役務取引等費用」及び「営業経費」に計上しており、前連結会計年度の計数の組替えを行っております。

(イ) 株式等関係損益

株価が大幅に下落した場合は、株式等償却を増加させるため、経営成績に重要な影響を与える要因となります。

・当連結会計年度の株式等関係損益

株式等関係損益は、16億65百万円となりました。

	前連結会計年度 (百万円)	当連結会計年度 (百万円)	前連結会計年度比 (百万円)
株式等関係損益	4,318	1,665	2,652
その他経常収益のうち株式等売却益	4,977	3,273	1,704
その他経常費用のうち株式等売却損	655	1,224	568
その他経常費用のうち株式等償却	3	383	379

連結自己資本比率（国内基準）

当連結会計年度末の連結における自己資本の額は、前連結会計年度末比45億円増加し2,394億円となりました。

リスク・アセットの額は、前連結会計年度末比1,555億円増加し2兆3,711億円となりました。

これにより、連結自己資本比率（国内基準）は前連結会計年度末比0.51ポイント低下し、10.09%となりました。

	前連結会計年度末 (億円)	当連結会計年度末 (億円)	前連結会計年度末比 (億円)
1 連結自己資本比率（2 ÷ 3）（%）	10.60	10.09	0.51
2 連結における自己資本の額	2,348	2,394	45
3 リスク・アセットの額	22,155	23,711	1,555
4 連結総所要自己資本額	886	948	62

資本の財源及び資金の流動性についての分析

キャッシュ・フローの状況は、営業活動によるキャッシュ・フローが、預金の増加などにより2,624億円のプラス（前連結会計年度比2,495億円増加）、投資活動によるキャッシュ・フローが、有価証券の売却による収入などにより334億円のプラス（前連結会計年度比2,407億円減少）、財務活動によるキャッシュ・フローが、配当金の支払などにより21億円のマイナス（前連結会計年度比41億円増加）となりました。

この結果、現金及び現金同等物の期末残高は前連結会計年度に比べ2,937億円増加し、9,025億円となりました。

なお、2019年度については、いなべ支店の新築や事務機械などの設備投資の予定がありますが、いずれも自己資金により実施する予定であります。

	前連結会計年度 (億円)	当連結会計年度 (億円)	前連結会計年度比 (億円)
営業活動によるキャッシュ・フロー	128	2,624	2,495
投資活動によるキャッシュ・フロー	2,742	334	2,407
財務活動によるキャッシュ・フロー	63	21	41
現金及び現金同等物の期末残高	6,088	9,025	2,937

4 【経営上の重要な契約等】

該当事項はありません。

5 【研究開発活動】

該当事項はありません。

第3 【設備の状況】

1 【設備投資等の概要】

当行及び連結子会社の設備投資については、お客さまの利便性向上と、より一層の金融サービスの提供を目指し、店舗及び店舗外現金自動設備の整備と充実に努めております。

また、事務効率化と高度化するお客さまのニーズにお応えするため、事務機械や電子計算機関連の設備投資も積極的に行っております。

セグメントごとの設備投資については、次のとおりであります。

報告セグメント

〔銀行業〕

当連結会計年度において、一宮支店、守山支店を新築移転いたしました。

また、店舗外現金自動設備7か所を新設し、6か所を廃止いたしました。

この結果、当連結会計年度の設備投資額は、2,665百万円となりました。

〔リース業〕

設備投資額は757百万円となりました。

報告セグメントに含まれない事業セグメント

〔その他〕

設備投資額は126百万円となりました。

なお、営業上重要な影響を及ぼす固定資産の売却又は災害等による滅失はありません。

2 【主要な設備の状況】

当連結会計年度末における主要な設備の状況は次のとおりであります。

(2019年3月31日現在)

	会社名	店舗名 その他	所在地	セグメントの 名称	設備の 内容	土地		建物	動産	リース 資産	合計	従業員数 (人)
						面積 (㎡)	帳簿価額(百万円)					
当行		本店他 112か店	三重県	銀行業	店舗	118,138 (27,269)	10,648	11,105	1,475		23,229	1,362
		東京 営業部	東京都	銀行業	店舗			7	2		9	13
		名古屋 支店他 20か店	愛知県	銀行業	店舗	14,632 (3,139)	4,193	1,380	267		5,841	334
		大阪 営業部	大阪府	銀行業	店舗			7	7		14	14
		新宮支 店	和歌山 県	銀行業	店舗	751	147	21	8		178	10
		丸之内 本部棟 他1か 所	三重県 津市	銀行業	事務所	18,132 (661)	1,878	7,379	580		9,838	644
		宮之前 寮他11 か所	三重県 津市他	銀行業	寮・社 宅	17,228	2,075	900	8		2,984	
		その他 施設	三重県 津市他	銀行業		29,357 (3,612)	962	656	398		2,016	

	会社名	店舗名 その他	所在地	セグメントの 名称	設備の 内容	土地		建物	動産	リース 資産	合計	従業員数 (人)
						面積 (㎡)	帳簿価額(百万円)					
連結 子会社	百五ビジネス サービス 株式会社		三重県 津市	銀行業	その他				86		86	169
	百五管理サービス 株式会社		三重県 津市	銀行業	その他				4		4	32
	百五不動産調査 株式会社		三重県 津市	銀行業	その他				9		9	28
	百五オフィス サービス 株式会社		三重県 津市	銀行業	その他				1		1	79
	百五スタッフ サービス 株式会社		三重県 津市	銀行業	その他				4		4	15
	百五リース 株式会社		三重県 津市	リース 業	その他	276	109	98	1,777		1,986	39
	百五証券 株式会社		三重県 津市	その他	その他			12	24		36	94
	株式会社 百五カード		三重県 津市	その他	その他	288	110	102	15		227	53
	株式会社 百五総合研究所		三重県 津市	その他	その他			0	7		7	31
	百五コンピュータ ソフト 株式会社		三重県 津市	その他	その他			1	42		43	58

- (注) 1 当行の主要な設備の内容は、店舗、事務所であるため、銀行業に一括計上しております。
2 土地の面積欄の()内は、借地の面積(内書き)であり、その年間賃借料は建物も含め884百万円であります。
3 動産は、事務機械2,111百万円、その他2,608百万円であります。
4 当行の店舗外現金自動設備205か所、海外駐在員事務所3か所は上記に含めて記載しております。

3 【設備の新設、除却等の計画】

当行及び連結子会社の設備投資については、お客さまの利便性向上と、より一層の金融サービスの提供を目指し、計画を策定しております。

また、事務効率化と高度化するお客さまのニーズにお応えするため、事務機械等の設備投資も計画しております。当連結会計年度末において計画中である重要な設備の新設、除却等は次のとおりであります。

(1) 新設、改修

会社名	店舗名 その他	所在地	区分	セグメント の名称	設備の 内容	投資予定金額 (百万円)		資金調達 方法	着手年月	完了予定 年月
						総額	既支払額			
当行	いなべ支店	三重県 いなべ市	新築	銀行業	店舗	326	235	自己資金	2018年9月	2019年5月
	本店 他	三重県 津市 他		銀行業	事務機械	2,205		自己資金		

- (注) 1 上記設備計画の記載金額には、消費税及び地方消費税を含んでおりません。
2 事務機械の主なものは2020年3月までに設置予定であります。

(2) 売却

重要な設備の売却の計画はありません。

第4 【提出会社の状況】

1 【株式等の状況】

(1) 【株式の総数等】

【株式の総数】

種類	発行可能株式総数(株)
普通株式	396,000,000
計	396,000,000

【発行済株式】

種類	事業年度末現在 発行数(株) (2019年3月31日)	提出日現在 発行数(株) (2019年6月24日)	上場金融商品取引所名 又は登録認可金融商品 取引業協会名	内容
普通株式	254,119,000	254,119,000	名古屋証券取引所 (市場第1部) 東京証券取引所 (市場第1部)	単元株式数は100株であります。
計	254,119,000	254,119,000		

(2) 【新株予約権等の状況】

【ストックオプション制度の内容】

当行は、株式報酬型ストックオプション制度を採用しております。その制度内容は、以下のとおりであります。

決議年月日	2011年6月24日	2012年6月22日	2013年6月21日	2014年6月20日
付与対象者の区分及び人数(名)	当行取締役：13	当行取締役：13	当行取締役(社外取締役を除く)：13	当行取締役(社外取締役を除く)：13
新株予約権の数(個)	492 (注)1	515 (注)1	516 (注)1	567 (注)1
新株予約権の目的となる株式の種類、内容及び数(株)	当行普通株式 49,200 (注)2	当行普通株式 51,500 (注)2	当行普通株式 51,600 (注)2	当行普通株式 56,700 (注)2
新株予約権の行使時の払込金額	1株当たり1円	1株当たり1円	1株当たり1円	1株当たり1円
新株予約権の行使期間	2011年7月26日～ 2041年7月25日	2012年7月27日～ 2042年7月26日	2013年7月25日～ 2043年7月24日	2014年8月1日～ 2044年7月31日
新株予約権の行使により株式を発行する場合の株式の発行価格及び資本組入額(円)	発行価格 303 資本組入額 152	発行価格 301 資本組入額 151	発行価格 405 資本組入額 203	発行価格 397 資本組入額 199
新株予約権の行使の条件	(注)3			
新株予約権の譲渡に関する事項	譲渡による新株予約権の取得については、当行の取締役会の承認を要するものとする。			
組織再編成行為に伴う新株予約権の交付に関する事項	(注)4			

決議年月日	2015年6月19日	2016年6月22日	2017年6月23日	2018年6月21日
付与対象者の区分及び人数(名)	当行取締役(社外取締役を除く):12	当行取締役(社外取締役を除く):12	当行取締役(社外取締役を除く):12	当行取締役(社外取締役を除く):6
新株予約権の数(個)	459 (注)1	681 (注)1	628 (注)1	438 (注)1
新株予約権の目的となる株式の種類、内容及び数(株)	当行普通株式 45,900 (注)2	当行普通株式 68,100 (注)2	当行普通株式 62,800 (注)2	当行普通株式 43,800 (注)2
新株予約権の行使時の払込金額	1株当たり1円	1株当たり1円	1株当たり1円	1株当たり1円
新株予約権の行使期間	2015年7月31日～ 2045年7月30日	2016年7月28日～ 2046年7月27日	2017年7月28日～ 2047年7月27日	2018年7月31日～ 2048年7月30日
新株予約権の行使により株式を発行する場合の株式の発行価格及び資本組入額(円)	発行価格 579 資本組入額 290	発行価格 378 資本組入額 189	発行価格 434 資本組入額 217	発行価格 481 資本組入額 241
新株予約権の行使の条件	(注)3			
新株予約権の譲渡に関する事項	譲渡による新株予約権の取得については、当行の取締役会の承認を要するものとする。			
組織再編成行為に伴う新株予約権の交付に関する事項	(注)4			

当事業年度の末日(2019年3月31日)における内容を記載しております。提出日の前月末現在(2019年5月31日)において、記載すべき内容が当事業年度の末日における内容から変更がないため、提出日の前月末現在に係る記載を省略しております。

(注)1 新株予約権1個につき目的となる株式数 100株

2 新株予約権の目的となる株式の数

新株予約権の割当日後に、当行が普通株式の株式分割(株式無償割当てを含む。以下同じ。)または株式併合を行う場合は、新株予約権のうち、当該株式分割または株式併合の時点で行使されていない新株予約権について、次の算式により新株予約権1個当たりの目的となる株式数(以下「付与株式数」という。)の調整を行い、調整により生じる1株未満の端数は、これを切り捨てる。

調整後付与株式数 = 調整前付与株式数 × 分割または併合の比率

また、割当日後に当行が合併または会社分割を行う場合、その他これらの場合に準じ付与株式数の調整を必要とする場合には、合理的な範囲で、付与株式数は適切に調整されるものとする。

3 新株予約権の行使の条件

(1) 新株予約権の割り当てを受けた者(以下「新株予約権者」という。)は、当行の取締役および執行役員のいずれの地位をも喪失した日の翌日から10日を経過する日までに限り、新株予約権を一括して行使することができる。

(2) 新株予約権者が死亡した場合、新株予約権が、新株予約権者の法定相続人のうちの1名(以下「相続承継人」という。)のみに帰属した場合に限り、相続承継人は次の各号の条件のもと、当行と新株予約権者が個別に締結する新株予約権割当契約書に従って新株予約権を行使することができる。ただし、刑法犯のうち、重大な犯罪を行ったと認められる者は相続承継人となることができない。

相続承継人が死亡した場合、その相続人は新株予約権を相続することはできない。

相続承継人は、相続開始後10か月以内かつ権利行使期間の最終日までに当行所定の相続手続を完了しなければならない。

相続承継人は、上記「新株予約権の行使期間」所定の行使期間内で、かつ、当行所定の相続手続完了時から2か月以内に限り、一括して新株予約権を行使することができる。

4 組織再編成行為に伴う新株予約権の交付に関する事項

当行が、合併（当行が合併により消滅する場合に限る。）、吸収分割、新設分割、株式交換または株式移転（以上を総称して以下「組織再編行為」という。）をする場合において、組織再編行為の効力発生日において残存する新株予約権（以下「残存新株予約権」という。）については、会社法第236条第1項第8号イからホまでに掲げる株式会社（以下「再編対象会社」という。）の新株予約権を以下の条件に基づき、新株予約権者に交付することとする。この場合においては、残存新株予約権は消滅し、再編対象会社の新株予約権を新たに交付するものとする。

ただし、以下の条件に沿って再編対象会社の新株予約権を交付する旨を、合併契約、吸収分割契約、新設分割計画、株式交換契約または株式移転計画において定めた場合に限るものとする。

(1) 交付する再編対象会社の新株予約権の数

新株予約権者が保有する残存新株予約権の数と同一の数を交付するものとする。

(2) 新株予約権の目的となる再編対象会社の株式の種類及び数

新株予約権の目的となる株式の種類は再編対象会社普通株式とし、新株予約権の行使により交付する再編対象会社普通株式の数は、組織再編行為の条件等を勘案のうえ、上記（注2）に準じて決定する。

(3) 新株予約権の行使に際して出資される財産の価額

交付される新株予約権の行使に際して出資される財産の価額は、以下に定める再編後行使価額に当該各新株予約権の目的となる株式数を乗じて得られる金額とする。再編後行使価額は、交付される新株予約権を行使することにより交付を受けることができる再編対象会社の株式1株当たりの金額を1円とする。

(4) 新株予約権を行使することができる期間

上記「新株予約権の行使期間」に定める新株予約権を行使することができる期間の開始日と組織再編行為の効力発生日のうちいずれか遅い日から、上記「新株予約権の行使期間」に定める新株予約権の行使期間の満了日までとする。

(5) 新株予約権の行使により株式を発行する場合における増加する資本金及び資本準備金に関する事項

上記「新株予約権の行使により株式を発行する場合の株式の発行価格及び資本組入額」に準じて決定する。

(6) 新株予約権の譲渡制限

譲渡による新株予約権の取得については、再編対象会社の取締役会の承認を要するものとする。

2019年6月21日開催の取締役会において決議されたもの

決議年月日	2019年6月21日
付与対象者の区分及び人数（名）	当行取締役（社外取締役を除く）：6
新株予約権の数（個）	617
新株予約権の目的となる株式の種類、内容及び数（株）	当行普通株式 61,700 [募集事項] (4) に記載しております。
新株予約権の行使時の払込金額	新株予約権の行使により交付される株式1株当たりの金額を1円とし、これに付与株式数を乗じた金額とします。
新株予約権の行使期間	[募集事項] (8) に記載しております。
新株予約権の行使の条件	[募集事項] (11) に記載しております。
新株予約権の譲渡に関する事項	[募集事項] (10) に記載しております。
組織再編成行為に伴う新株予約権の交付に関する事項	[募集事項] (13) に記載しております。

決議された新株予約権の募集事項については次のとおりであります。

[募集事項]

(1) 新株予約権の名称

株式会社百五銀行 第9回株式報酬型新株予約権

(2) 新株予約権の割り当ての対象者及びその人数

当行の取締役（社外取締役を除く） 6名

(3) 新株予約権の総数

617個

上記総数は、割当予定数であり、引受けの申込みがなされなかった場合等、割り当てる新株予約権の総数が減少したときは、割り当てる新株予約権の総数をもって発行する新株予約権の総数とする。

(4) 新株予約権の目的となる株式の種類及び数

新株予約権の目的となる株式の種類は当行普通株式とし、新株予約権1個当たりの目的となる株式数(以下「付与株式数」という。)は100株とする。

なお、新株予約権の割当日後に、当行が普通株式の株式分割(株式無償割当てを含む。以下同じ。)または株式併合を行う場合は、新株予約権のうち、当該株式分割または株式併合の時点で行使されていない新株予約権について、次の算式により付与株式数の調整を行い、調整により生じる1株未満の端数は、これを切り捨てる。

$$\text{調整後付与株式数} = \text{調整前付与株式数} \times \text{分割または併合の比率}$$

また、割当日後に当行が合併または会社分割を行う場合、その他これらの場合に準じ付与株式数の調整を必要とする場合には、合理的な範囲で、付与株式数は適切に調整されるものとする。

(5) 新株予約権の払込金額

新株予約権の払込金額は、新株予約権の割当日においてブラック・ショールズ・モデルにより算定される公正な評価額とする。

なお、新株予約権の割り当てを受けた者(以下「新株予約権者」という。)は、当該払込金額の払込みに代えて当行に対する報酬債権と相殺するものとする。

(6) 新株予約権の割当日

2019年7月30日

(7) 新株予約権の行使に際して出資される財産の価額

各新株予約権の行使に際して出資される財産の価額は、新株予約権の行使により交付を受けることができる株式1株当たりの金額を1円とし、これに付与株式数の総数を乗じた額とする。

(8) 新株予約権を行使することができる期間

2019年7月31日から2049年7月30日までとする。

ただし、権利行使期間の最終日が当行の休業日にあたる場合は、その前営業日を最終日とする。

(9) 新株予約権の行使により株式を発行する場合における増加する資本金及び資本準備金に関する事項

(ア) 新株予約権の行使により株式を発行する場合において増加する資本金の額は、会社計算規則第17条第1項の規定に従い算出される資本金等増加限度額の2分の1の金額とし、計算の結果1円未満の端数が生じたときは、その端数を切り上げるものとする。

(イ) 新株予約権の行使により株式を発行する場合において増加する資本準備金の額は、上記(ア)記載の資本金等増加限度額から上記(ア)に定める増加する資本金の額を減じた額とする。

(10) 新株予約権の譲渡制限

譲渡による新株予約権の取得については、当行の取締役会の承認を要するものとする。

(11) 新株予約権の行使の条件

(ア) 新株予約権者は、当行の取締役および執行役員いずれの地位をも喪失した日の翌日から10日を経過する日までに限り、新株予約権を一括して行使することができる。

(イ) 新株予約権者が死亡した場合、新株予約権が、新株予約権者の法定相続人のうちの1名(以下「相続承継人」という。)のみに帰属した場合に限り、相続承継人は次の各号の条件のもと、当行と新株予約権者が個別に締結する新株予約権割当契約書に従って新株予約権を行使することができる。ただし、刑法犯のうち、重大な犯罪を行ったと認められる者は相続承継人となることができない。

a 相続承継人が死亡した場合、その相続人は新株予約権を相続することはできない。

b 相続承継人は、相続開始後10か月以内かつ権利行使期間の最終日までに当行所定の相続手続を完了しなければならない。

c 相続承継人は、上記(8)所定の行使期間内で、かつ、当行所定の相続手続完了時から2か月以内に限り、一括して新株予約権を行使することができる。

(12) 新株予約権の取得に関する事項

(ア) 新株予約権者が権利行使をする前に、上記(11)の定めまたは新株予約権割当契約書の定めにより新株予約権を行使できなくなった場合、当行は当行の取締役会が別途定める日をもって、当該新株予約権を無償で取得することができる。

(イ) 当行が消滅会社となる合併契約、当行が分割会社となる吸収分割契約もしくは新設分割計画または当行が完全子会社となる株式交換契約もしくは株式移転計画の承認の議案が当行の株主総会(株主総会が不要な場合は当行の取締役会)において承認された場合は、当行は当行の取締役会が別途定める日をもって、同日時点で権利行使されていない新株予約権を無償で取得することができる。

(13) 組織再編を実施する際の新株予約権の取扱い

当行が、合併（当行が合併により消滅する場合に限る。）、吸収分割、新設分割、株式交換または株式移転（以上を総称して以下「組織再編行為」という。）をする場合において、組織再編行為の効力発生日において残存する新株予約権（以下「残存新株予約権」という。）については、会社法第236条第1項第8号イからホまでに掲げる株式会社（以下「再編対象会社」という。）の新株予約権を以下の条件に基づき、新株予約権者に交付することとする。この場合においては、残存新株予約権は消滅し、再編対象会社の新株予約権を新たに交付するものとする。

ただし、以下の条件に沿って再編対象会社の新株予約権を交付する旨を、合併契約、吸収分割契約、新設分割計画、株式交換契約または株式移転計画において定めた場合に限るものとする。

(ア) 交付する再編対象会社の新株予約権の数

新株予約権者が保有する残存新株予約権の数と同一の数を交付するものとする。

(イ) 新株予約権の目的となる再編対象会社の株式の種類及び数

新株予約権の目的となる株式の種類は再編対象会社普通株式とし、新株予約権の行使により交付する再編対象会社普通株式の数は、組織再編行為の条件等を勘案のうえ、上記(4)に準じて決定する。

(ウ) 新株予約権の行使に際して出資される財産の価額

交付される新株予約権の行使に際して出資される財産の価額は、以下に定める再編後行使価額に当該各新株予約権の目的となる株式数を乗じて得られる金額とする。再編後行使価額は、交付される新株予約権を行使することにより交付を受けることができる再編対象会社の株式1株当たりの金額を1円とする。

(エ) 新株予約権を行使することができる期間

上記(8)に定める新株予約権を行使することができる期間の開始日と組織再編行為の効力発生日のうちいずれか遅い日から、上記(8)に定める新株予約権の行使期間の満了日までとする。

(オ) 新株予約権の行使により株式を発行する場合における増加する資本金及び資本準備金に関する事項

上記(9)に準じて決定する。

(カ) 新株予約権の譲渡制限

譲渡による新株予約権の取得については、再編対象会社の取締役会の承認を要するものとする。

(キ) 新株予約権の取得に関する事項

上記(12)に準じて決定する。

(14) 1株に満たない端数の処理

新株予約権者が新株予約権を行使した場合に新株予約権者に交付する株式の数に1株に満たない端数があるときは、これを切り捨てるものとする。

(15) 新株予約権証券の不発行

当行は新株予約権に係る新株予約権証券を発行しない。

(16) 新株予約権の行使に際して出資される財産の払込取扱場所

三重県津市岩田21番27号
株式会社 百五銀行 本店営業部

【ライツプランの内容】

該当事項はありません。

【その他の新株予約権等の状況】

該当事項はありません。

(3) 【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項はありません。

(4) 【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式 総数増減数 (千株)	発行済株式 総数残高 (千株)	資本金増減額 (百万円)	資本金残高 (百万円)	資本準備金 増減額 (百万円)	資本準備金 残高 (百万円)
2012年4月1日～ 2013年3月31日	1,106	254,119		20,000		7,557

(注) 発行済株式総数の減少は自己株式消却による当該期間の合計数であります。

(5) 【所有者別状況】

2019年3月31日現在

区分	株式の状況(1単元の株式数100株)								単元未満株式の状況(株)
	政府及び地方公共団体	金融機関	金融商品取引業者	その他の法人	外国法人等		個人その他	計	
					個人以外	個人			
株主数(人)		54	23	700	164	2	11,910	12,853	
所有株式数(単元)		888,466	15,365	522,436	370,912	25	742,578	2,539,782	140,800
所有株式数の割合(%)		34.98	0.61	20.57	14.60	0.00	29.24	100.00	

(注) 自己株式387,677株は「個人その他」に3,876単元、「単元未満株式の状況」に77株含まれております。

(6) 【大株主の状況】

2019年3月31日現在

氏名又は名称	住所	所有株式数(千株)	発行済株式(自己株式を除く。)の総数に対する所有株式数の割合(%)
明治安田生命保険相互会社	東京都千代田区丸の内二丁目1番1号	10,093	3.97
日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社(信託口)	東京都中央区晴海一丁目8番11号	9,001	3.54
日本生命保険相互会社	東京都千代田区丸の内一丁目6番6号	8,396	3.30
日本マスタートラスト信託銀行株式会社(信託口)	東京都港区浜松町二丁目11番3号	8,133	3.20
日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社(信託口9)	東京都中央区晴海一丁目8番11号	7,774	3.06
損害保険ジャパン日本興亜株式会社	東京都新宿区西新宿一丁目26番1号	5,748	2.26
百五銀行従業員持株会	三重県津市丸之内31番21号	5,483	2.16
株式会社三菱UFJ銀行	東京都千代田区丸の内二丁目7番1号	4,222	1.66
日本マスタートラスト信託銀行株式会社(トヨタ自動車口)	東京都港区浜松町二丁目11番3号	3,986	1.57
清水建設株式会社	東京都中央区京橋二丁目16番1号	3,930	1.54
計		66,770	26.31

(注) 日本マスタートラスト信託銀行株式会社(トヨタ自動車口)の持株数3,986千株は、トヨタ自動車株式会社が同信託銀行へ退職給付信託設定した信託財産です。信託契約上当該株式の議決権はトヨタ自動車株式会社が留保しております。

(7) 【議決権の状況】

【発行済株式】

2019年3月31日現在

区分	株式数(株)	議決権の数(個)	内容
無議決権株式			
議決権制限株式(自己株式等)			
議決権制限株式(その他)			
完全議決権株式(自己株式等)	(自己保有株式) 普通株式 387,600		
完全議決権株式(その他)	普通株式 253,590,600	2,535,906	
単元未満株式	普通株式 140,800		1単元(100株)未満の株式
発行済株式総数	254,119,000		
総株主の議決権		2,535,906	

【自己株式等】

2019年3月31日現在

所有者の氏名 又は名称	所有者の住所	自己名義 所有株式数 (株)	他人名義 所有株式数 (株)	所有株式数 の合計 (株)	発行済株式 総数に対する 所有株式数 の割合(%)
(自己保有株式) 株式会社百五銀行	三重県津市岩田21番27号	387,600		387,600	0.15
計		387,600		387,600	0.15

2 【自己株式の取得等の状況】

【株式の種類等】 会社法第155条第7号による普通株式の取得

(1) 【株主総会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(2) 【取締役会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(3) 【株主総会決議又は取締役会決議に基づかないものの内容】

区分	株式数(株)	価額の総額(円)
当事業年度における取得自己株式	1,109	483,696
当期間における取得自己株式	83	30,203

(注) 当期間における取得自己株式には、2019年6月1日から有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取りによる株式数は含めておりません。

(4) 【取得自己株式の処理状況及び保有状況】

区分	当事業年度		当期間	
	株式数 (株)	処分価額の総額 (円)	株式数 (株)	処分価額の総額 (円)
引き受ける者の募集を行った 取得自己株式				
消却の処分を行った取得自己株式				
合併、株式交換、会社分割に係る 移転を行った取得自己株式				
その他(株式報酬型ストック・オプ ションの行使)				
その他(単元未満株式買増請求によ る売却)	40	15,130		
保有自己株式数	387,677		387,760	

(注) 当期間における保有自己株式数には、2019年6月1日から有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取り及び買増しによる株式数は含めておりません。

3 【配当政策】

当行は、銀行としての公共性に鑑み、健全経営の維持強化を図るため内部留保の充実に意を払うとともに、株主の皆様に対し安定的な利益還元を実施することを基本としております。

当行は、中間配当と期末配当の年2回の剰余金の配当を行うことを基本としており、これらの剰余金の配当の決定機関は、中間配当については取締役会、期末配当については株主総会であります。

この考え方にに基づき、当期の配当金は、創立140周年記念配当金50銭を含めた中間配当金4円50銭とあわせ、1株当たり年間9円といたしました。

内部留保資金につきましては、業種・業態をこえた競争が激化するなか、引き続き営業基盤の拡充や経営体質の強化を図るため、より効率的な投資を行い、株主の皆様のご支援に報いるよう努めてまいりたいと考えております。

当行は、「取締役会の決議によって中間配当を行うことができるものとし、その基準日は毎年9月30日とする。」旨を定款に定めております。

なお、当事業年度に係る剰余金の配当は以下のとおりであります。

決議年月日	配当金の総額(百万円)	1株当たり配当額(円)
2018年11月9日 取締役会決議	1,141	4.50
2019年6月21日 定時株主総会決議	1,141	4.50

(注) 2018年11月9日取締役会決議の1株当たり配当額のうち50銭は創立140周年記念配当であります。

4 【コーポレート・ガバナンスの状況等】

(1) 【コーポレート・ガバナンスの概要】

コーポレート・ガバナンスに関する基本的な考え方

金融界を取り巻く経営環境の変化に対応し、健全な銀行業務を通じて社会に貢献していく姿勢を明確にするため、以下のとおり「企業理念」を制定し、地域社会やお客さま、従業員、株主の皆さまの信頼を得るとともに、当行の持続的成長と中長期的な企業価値の一層の向上をめざしております。

その実現に向け、透明・公正かつ迅速・果敢な意思決定を行えるコーポレート・ガバナンス体制の仕組みとして、監査役会設置会社を採用し、監査役会による監査機能を有効に発揮させるとともに、独立性の高い社外取締役を複数名選任して取締役会の監督機能を十分に発揮させることに努めております。そのほか、コンプライアンス委員会など各種委員会やコーポレートガバナンス会議の設置、IR活動の充実などについても取り組んでおります。

また、取り巻く経営環境が変化する中で、コーポレート・ガバナンスを強化・充実させていくため、今後も必要に応じて体制の見直しを図ってまいります。

〔企業理念〕

< 百五銀行の使命 >

「信用を大切に社会をささえます。」

百五銀行は、信用が社会の基本だと考えます。

健全な金融活動を通じて、活力と潤いに満ち、互いに信頼し合える社会づくりにつとめます。

< 百五銀行の経営 >

「公明正大で責任ある経営をします。」

百五銀行は、倫理を重んじ、自主独立の精神で公明正大な経営を行います。

堅実で力強い発展をめざし、責任ある経営で社会の信頼に応えます。

< 私たちの行動 >

「良識ある社会人として誠実に行動します。」

私たちは、良き社会人として、知見を深め、良心にしたがって行動します。

感謝の心で誠意をつくし、明るく元気に、新しいことに挑戦します。

企業統治の体制の概要及び当該体制を採用する理由

(ア) 取締役会は、取締役9名（うち社外取締役3名）で構成され、原則月1回開催しております。取締役会では、法令または定款に定める事項並びに経営の基本方針その他特に重要な事項について評議決定するとともに、業務の執行状況について報告を受け、取締役の職務の執行を監督しております。また、執行役員制度を採用し、取締役会の活性化、意思決定の迅速化および業務執行機能の充実を図っております。なお、取締役および監査役の候補者等に関する事項、取締役の報酬等に関する事項、その他経営に関する重要な事項の検討にあたり、取締役会の助言機関として、取締役6名（うち社外取締役3名）をもって構成するコーポレートガバナンス会議を設置しております。

また、当行は監査役会設置会社を採用しており、監査役5名（うち社外監査役3名）は取締役会など重要な会議に出席し、取締役から経営上の重要事項に関する説明を聴取し意見を述べるとともに、取締役の職務の執行について適法性および妥当性の観点から監査を行っております。

そのほか、株式会社東京証券取引所および株式会社名古屋証券取引所の定めに基づく独立役員として、社外取締役3名と社外監査役3名を選任しており、経営に対する中立的・客観的な監督機能・監視機能が、十分に発揮できる体制が構築できていると考えております。

(イ) 取締役会の下に、常勤取締役をもって構成する経営会議を設置し、原則週1回開催しております。経営会議では、取締役会で決定した基本方針に基づき、業務の執行に関する重要事項を審議し、執行の決定を行っております。

(ウ) 取締役会の下に、常勤取締役と業務監査部長をもって構成する業務監査会を設置し、原則月1回開催しております。業務監査会では、業務執行の適正性および内部監査の有効性を監視し、経営管理の強化・充実に努めております。業務監査会直轄の業務監査部は、専門性のある人材を配置し内部監査方針、内部監査規定等および年次の基本監査計画に基づき内部監査を実施し、必要に応じて改善を勧告しております。

< 設置する機関の名称および主要な構成員の氏名 >

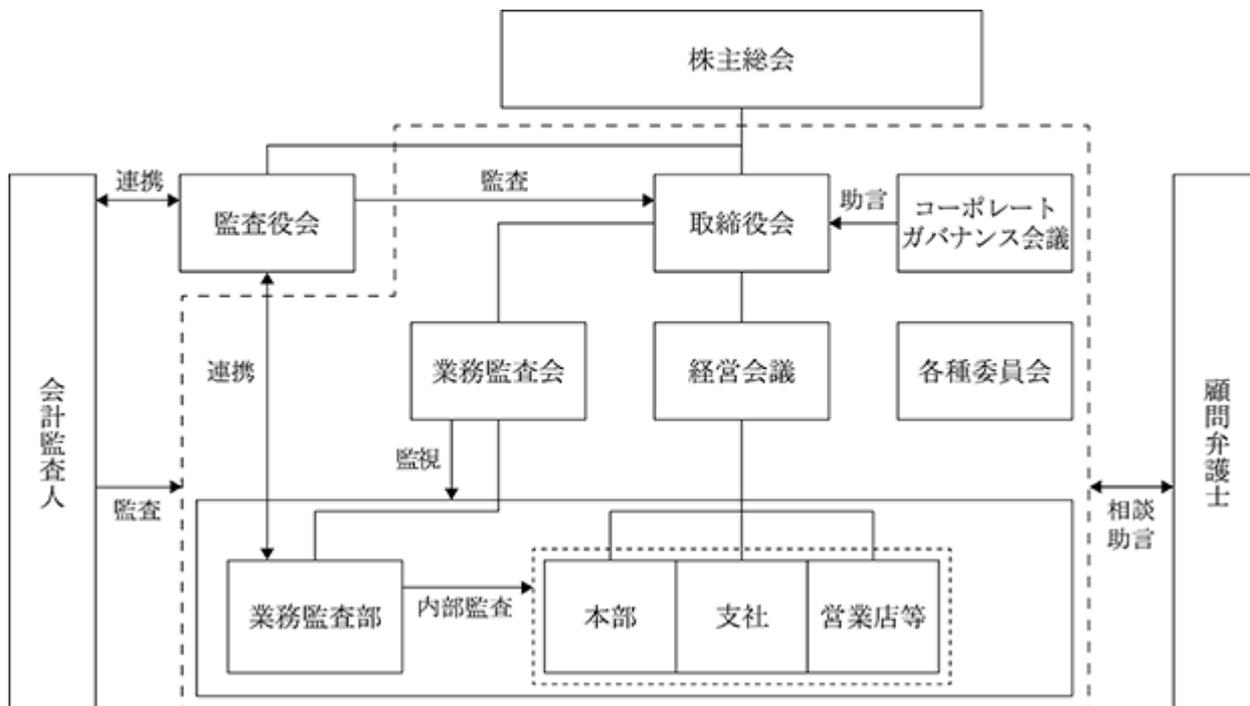
名称	議長	主要な構成員の氏名
取締役会	取締役会長	取締役会長 上田豪 取締役頭取 伊藤歳恭 取締役専務執行役員 杉浦雅和 取締役専務執行役員 田中秀人 取締役常務執行役員 長合教実 取締役常務執行役員 柳谷剛 取締役 小林長久(社外取締役) 取締役 川喜田久(社外取締役) 取締役 若狭一郎(社外取締役)

名称	議長	主要な構成員の氏名
監査役会	監査役会の決議によって 監査役の中から定める	監査役 笠井貞男 監査役 中津清晴 監査役 西田孝(社外監査役) 監査役 鶴岡信治(社外監査役) 監査役 川端郁子(社外監査役)
経営会議	取締役頭取	取締役会長 上田豪 取締役頭取 伊藤歳恭 取締役専務執行役員 杉浦雅和 取締役専務執行役員 田中秀人 取締役常務執行役員 長合教実 取締役常務執行役員 柳谷剛
コーポレートガバナンス会議	社外取締役の中から 互選により決定する	取締役会長 上田豪 取締役頭取 伊藤歳恭 取締役専務執行役員 杉浦雅和 取締役 小林長久(社外取締役) 取締役 川喜田久(社外取締役) 取締役 若狭一郎(社外取締役)
業務監査会	取締役頭取	取締役会長 上田豪 取締役頭取 伊藤歳恭 取締役専務執行役員 杉浦雅和 取締役専務執行役員 田中秀人 取締役常務執行役員 長合教実 取締役常務執行役員 柳谷剛

(工) その他、以下の委員会を設置し、経営管理の強化・充実に努めております。

- ・法令等遵守態勢の確立を図るためのコンプライアンス委員会
- ・顧客の保護、利便の向上に向けた改善・対応策を検討する顧客保護等管理委員会
- ・中小企業者等の金融円滑化を適切に遂行するための金融円滑化委員会
- ・経営の健全性と収益性の両面からポートフォリオ運営を審議するALMリスク管理委員会
- ・経営の健全性と適切性の確保に向けたオペレーショナル・リスクの極小化策を審議するオペレーショナル・リスク管理委員会
- ・情報システム等の方針や投資の最適化を図るためのIT戦略委員会
- ・経営職等の人事評価の納得性・公平性・透明性を高めるための業績・報酬委員会
- ・持続可能な社会の実現に貢献するためのSDGs推進委員会

<コーポレート・ガバナンス体制：模式図>



企業統治に関するその他の事項

(ア)内部統制システムの整備の状況

当行は以下のとおり「内部統制システムの基本方針」を取締役会の決議により定め、業務の適正を確保する体制を整備するとともに、継続的な体制の見直しを行うことにより、管理態勢の強化及び実効性の向上に努めております。

a 法令等遵守体制

- (a) コンプライアンス態勢の基礎として、「百五銀行企業理念」及び「コンプライアンスの基本方針」を定める。
コンプライアンス委員会を設置しコンプライアンスを推進するとともに、コンプライアンスの統括部署としてコンプライアンス統括部を設置しコンプライアンス態勢の整備及び向上を図る。
- (b) お客さまの保護及び利便の向上に向けた管理態勢を整備するため、「顧客保護等管理方針」等を定める。
顧客保護等管理委員会を設置し、顧客保護等の管理状況の把握・評価・分析や改善策等の検討を実施することにより、管理態勢の向上を図る。
- (c) 会社情報の適時・適切な開示を実施する体制を整備するため「IRに関する基本方針」及び「会社情報の適時開示に関する規則」を定め、法令に基づく開示を適時・適切に行うとともに、法令に基づく開示以外の情報提供についても充実を図る。
- (d) 内部監査部門として執行部門から独立した業務監査部を設置し、監査結果について業務監査会に報告の上、適切な業務運営を確保する。
- (e) 法令違反その他のコンプライアンスに関する事実についての報告・相談体制を整備するとともに、コンプライアンス統括部のほか常勤監査役、人事部、弁護士を通報窓口とする内部通報システム（コンプライアンス・ホットライン）を整備し、「コンプライアンス・ホットライン運用規則」に基づきその運用を行う。
- (f) 反社会的勢力に対しては、「反社会的勢力対応規定」等において組織としての対応方針を明確にし、専門部署をコンプライアンス統括部お客さま相談課とするとともに、警察等の外部専門機関との連携の強化を図り、反社会的勢力との関係を遮断する。

b 情報保存管理体制

取締役の職務の執行に係る情報については、法令等の定めによるほか、「取締役会規定」等に基づき適切かつ確実に保存・管理するとともに、取締役及び監査役が必要に応じて閲覧できる状態とする。また、「セキュリティポリシー」・「情報資産に関する安全対策規定」等に基づき、セキュリティ面から情報資産の重要度・リスクの程度に応じた取扱方法や管理方法を策定し、情報資産を適切に管理・保護する。

c リスク管理体制

- (a) 適正なリスク管理態勢を構築するため、統合的なリスク管理の方針・規定及びリスク分類毎の管理方針・管理規定を定める。
- (b) リスクの分類は以下のとおりとし、それぞれに主管部署を定め、その把握と管理を適切に行う体制を整備する。
 - 信用リスク
 - 市場リスク
 - 流動性リスク
 - オペレーショナル・リスク
- (c) ALMリスク管理委員会及びオペレーショナル・リスク管理委員会を設置し、リスクの状況及びその管理状況を把握・評価・分析するとともに、リスク管理に関する方針や諸施策を検討・審議の上、適切な対策を講じる。
- (d) 災害等の危機事象の発生に対しては、「危機管理規定」等において組織としての対応方針を明確にし、危機事象発生に伴う損失等を最小限に留めるとともに、危機への迅速かつ的確な対処により業務の継続あるいは早期復旧のために必要な体制を整備する。

d 職務執行の効率性確保のための体制

- (a) 取締役の職務の執行が効率的に行われることを確保するため、取締役会において法令または定款に定める事項並びに経営の基本方針その他特に重要な事項を評議決定するほか、経営会議で業務の執行に関する重要事項を審議し、執行の決定を行う。
- (b) 取締役会または経営会議の決定に基づく業務執行については、「組織規定」・「職制規則」・「業務決裁権限規則」等において執行手続の詳細を定める。

e グループ管理体制

- (a) 当行と連結対象子会社（以下「グループ会社」という）における業務の適正かつ効率的な運営・管理を確保するため、「百五グループ連携規定」を定め、グループ会社の運営・管理にかかる体制を構築するとともに、当行とグループ会社双方に不利益を与えないようアームズ・レングス・ルールを遵守する。
- (b) 当行とグループ会社における経営の健全かつ適切な遂行のため、「リスク管理規定」を定め、一体となってリスクを管理・運営するとともに、「コンプライアンス規定」を定め、当行とグループ会社のコンプライアンス態勢の確立を図る。
- (c) グループ会社の管理については、各社より当行に対して適時・適切に協議・報告を行い、定例的にグループ会社戦略会議を開催することにより連携を強化し、必要に応じて監査を行う。
- (d) 当行とグループ会社は、会計基準その他関連する諸法令を遵守し、財務報告の適正性を確保するための内部管理体制を整備する。

f 監査役の職務を補助する使用人に関する事項等

監査役の職務を補助すべき使用人として、当行の使用人から専任の監査役補助者を任命し、監査役の指揮監督下におく。また、監査役補助者の人事異動及び評価については監査役会の同意を得ることとし、取締役からの独立性と監査役からの指示の実効性を確保する。

g 監査役への報告及び監査の実効性確保のための体制

- (a) 取締役、執行役員及び使用人は以下に定める事項について監査役（会）に報告する。
 - 会社に著しい損害を及ぼすおそれのある事項
 - 経営状況についての重要な事項
 - 内部監査状況及びリスク管理に関する重要な事項
 - 重大な法令違反等
 - 内部通報システム(コンプライアンス・ホットライン)の運用状況及び通報の内容
 - 会計方針、会計基準に関する重要な事項
 - その他監査役が報告を求める事項
- (b) グループ会社に係る前項～の事項について、グループ会社の取締役、監査役及び使用人またはこれらの者から報告を受けた者は、当行の監査役（会）に報告する。
- (c) 当行とグループ会社は、前2項の報告をした者に対し、当該報告をしたことを理由として不利な取扱いを行わない。
- (d) 監査役は取締役会のほか、経営会議、業務監査会その他の重要な会議に出席し、必要と認めるときは意見を述べる。
また、監査役は代表取締役と定期的会合をもち監査上の重要課題等について意見を交換し相互認識と信頼関係を深めるよう努めるほか、内部監査部門や会計監査人とも定期的に情報や意見の交換を行い、連携の強化を図る。
- (e) 監査役がその職務の執行について必要な費用等を請求したときは、当該費用等を支払う。

(イ) リスク管理体制の整備の状況

当行では、銀行業務を遂行するうえで直面するさまざまなリスクを、取締役会が制定するリスク管理に関する方針、主要諸規定のほか、半期毎の運営方針に基づき、統合的に把握・管理する体制としております。

具体的には、各種リスクを信用リスク、市場リスク、オペレーショナル・リスク等として区分し、各リスクに主管部署を定めて業務運営のなかで管理するとともに、リスク統括部署を設置してこれらを統合的に管理しております。また、ALMリスク管理委員会及びオペレーショナル・リスク管理委員会を設置し、リスクの状況及びその管理状況を把握・評価・分析するとともに、リスク管理に関する方針や諸施策を検討・審議の上、適切な対策を講じております。ALMリスク管理委員会及びオペレーショナル・リスク管理委員会における報告・審議の内容は、経営会議及び取締役会に報告しております。

また、各種リスクの計量化など、リスク管理の高度化を進めており、計量化したリスクの総量を自己資本の一定範囲内にコントロールする統合リスク管理を実施しております。

コンプライアンス統括部は、コンプライアンスの統括部署として毎年度策定するコンプライアンス活動計画に基づき、法令等遵守態勢の強化に取り組んでおります。業務監査部は、各業務部署から独立した立場で業務監査を行い、各部門の内部管理の適切性・有効性を検証しております。

(ウ) 責任限定契約の内容

当行は社外取締役、社外監査役との間で、会社法第427条第1項の規定に基づき、会社法第423条第1項の損害賠償責任を限定する契約を締結しております。当該契約に基づく損害賠償責任限度額は、当該社外取締役または社外監査役が責任の原因となった職務の遂行について善意かつ重大な過失が無いときに限り、会社法第425条第1項に規定する最低責任限度額を限度としております。

(工)取締役の定数

当行の取締役は、15名以内とする旨定款に定めております。

(オ)取締役の選任の要件

当行は、取締役の選任決議について、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の過半数をもって行う旨、および累積投票によらないものとする旨定款に定めております。

(カ)株主総会決議事項を取締役会で決議することができる事項

自己の株式の取得に関し、機動的な資本政策の遂行を可能とするため、会社法第165条第2項の規定により、取締役会の決議によって市場取引等により自己の株式を取得することができる旨定款に定めております。また、株主への安定的な利益還元を行うため、取締役会の決議によって、毎年9月30日を基準日として中間配当をすることができる旨定款に定めております。

(キ)株主総会の特別決議要件

当行は、株主総会の円滑な運営を行うことを目的として、会社法第309条第2項に定める株主総会の特別決議要件について、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の3分の2以上をもって行う旨定款に定めております。

(2) 【役員の状況】

役員一覧

男性13名 女性1名 (役員のうち女性の比率7.14%)

役職名	氏名	生年月日	略歴		任期	所有株式数 (千株)
代表取締役 取締役会長	上田 豪	1951年6月13日生	1974年4月 2002年4月 2003年6月 2007年4月 2007年6月 2009年6月 2015年4月	百五銀行入行 事務統括グループマネージャー 取締役事務統括グループマネージャー 取締役事務統括部長兼システム統括部長 常務取締役事務本部長 取締役頭取 取締役会長(現職)	2019年 6月から 2年	150
代表取締役 取締役頭取	伊藤 歳恭	1953年7月29日生	1976年4月 2004年6月 2005年6月 2006年6月 2007年6月 2009年6月 2013年6月 2014年6月 2015年4月	百五銀行入行 資金運用グループマネージャー 取締役津支社長 取締役名古屋支社長 常務取締役 取締役副頭取秘書室長 取締役副頭取 取締役副頭取秘書室長 取締役頭取(現職)	2019年 6月から 2年	208
代表取締役 取締役 専務執行役員 資金運用本部長 兼 秘書室長	杉浦 雅和	1957年1月31日生	1980年4月 2007年6月 2009年6月 2010年4月 2012年6月 2013年6月 2014年6月 2015年6月 2016年4月 2017年6月 2018年6月 2019年6月	百五銀行入行 経営企画部長 取締役経営企画部長 取締役南勢支社長 取締役資金証券部長 常務取締役愛知支社長 常務取締役 常務取締役事務本部長兼秘書室長 常務取締役営業本部長 専務取締役営業本部長 取締役専務執行役員営業本部長 取締役専務執行役員資金運用本部長兼秘書室長(現職)	2019年 6月から 2年	85
取締役 専務執行役員 営業本部長	田中 秀人	1955年7月23日生	1978年4月 1980年9月 2008年6月 2009年6月 2011年6月 2012年6月 2015年6月 2016年4月 2018年6月 2019年6月	株式会社三菱銀行(現株式会社三菱UFJ銀行)入行 百五銀行入行 個人サービス部長 取締役審査部長 取締役資金証券部長 取締役人事部長 常務取締役資金運用本部長 常務取締役事務本部長 取締役常務執行役員事務本部長 取締役専務執行役員営業本部長(現職)	2019年 6月から 2年	69
取締役 常務執行役員	長合 教実	1959年9月23日生	1982年4月 2011年6月 2013年6月 2015年6月 2017年6月 2018年6月 2019年6月	百五銀行入行 四日市支店長 取締役資金証券部長 取締役北勢支社長 取締役愛知支社長 執行役員愛知支社長 取締役常務執行役員(現職)	2019年 6月から 2年	35
取締役 常務執行役員 事務本部長	柳谷 剛	1959年9月25日生	1983年4月 2014年6月 2015年6月 2018年6月 2019年6月	百五銀行入行 中勢支社長 取締役南勢支社長 執行役員融資統括部長 取締役常務執行役員事務本部長(現職)	2019年 6月から 2年	15
取締役	小林 長久	1943年11月8日生	1966年3月 1995年6月 1999年6月 2001年6月 2003年6月 2011年6月 2013年6月	四日市倉庫株式会社(現日本トランスシティ株式会社)入社 日本トランスシティ株式会社取締役 日本トランスシティ株式会社常務取締役 日本トランスシティ株式会社代表取締役 専務取締役 日本トランスシティ株式会社代表取締役 社長 日本トランスシティ株式会社代表取締役 会長(現職) 当行取締役(現職)	2019年 6月から 2年	38

役職名	氏名	生年月日	略歴		任期	所有株式数 (千株)
取締役	川喜田 久	1946年 8月30日生	1969年 4月 1978年 7月 1980年 6月 1981年 6月 1984年 6月 2007年 6月 2014年 6月 2015年 6月 2015年 6月	トヨタ自動車販売株式会社(現トヨタ自動車株式会社)入社 三重トヨペット株式会社入社 三重トヨペット株式会社取締役 三重トヨペット株式会社代表取締役常務 三重トヨペット株式会社代表取締役社長(現職) 当行監査役 株式会社ちとせ代表取締役社長 株式会社ちとせ取締役(現職) 当行取締役(現職)	2019年 6月から 2年	61
取締役	若狭 一郎	1955年 1月 1日生	1977年 4月 2005年 7月 2006年 7月 2008年 4月 2012年 4月 2014年 4月 2014年 7月 2017年 7月 2018年 6月 2019年 4月	明治生命保険相互会社(現明治安田生命保険相互会社)入社 明治安田生命保険相互会社取締役 明治安田生命保険相互会社執行役 明治安田生命保険相互会社常務執行役 明治安田生命保険相互会社専務執行役 明治安田生命保険相互会社執行役副社長 一般社団法人生命保険協会副会長 明治安田ビルマネジメント株式会社代表取締役会長 当行取締役(現職) 株式会社明治安田総合研究所代表取締役会長(現職)	2019年 6月から 2年	
常勤監査役	笠井 貞男	1955年 2月 8日生	1977年 4月 2010年 6月 2012年 6月	百五銀行入行 人事部長 常勤監査役(現職)	2016年 6月から 4年	55
常勤監査役	中津 清晴	1957年 9月 8日生	1981年 4月 2012年 6月 2016年 6月	百五銀行入行 新本館建設統括部長 常勤監査役(現職)	2016年 6月から 4年	43
監査役	西田 孝	1953年 9月28日生	1976年 4月 2002年 9月 2003年 6月 2004年 6月 2007年 6月 2007年 6月 2007年 6月 2018年 6月 2019年 6月	株式会社三菱銀行(現株式会社三菱UFJ銀行)入行 三菱証券株式会社(現三菱UFJモルガン・スタンレー証券株式会社)執行役員 三菱証券株式会社常務執行役員 株式会社東京三菱銀行(現株式会社三菱UFJ銀行)執行役員 株式会社三菱ケミカルホールディングス社外監査役 三菱化学株式会社(現三菱ケミカル株式会社)社外監査役 三菱ウェルファーマ株式会社(現田辺三菱製薬株式会社)社外監査役 当行監査役(現職) 北野建設株式会社社外監査役(現職)	2018年 6月から 4年	0
監査役	鶴岡 信治	1954年11月10日生	2000年 4月 2005年 4月 2007年 4月 2009年 4月 2015年 4月 2019年 4月 2019年 4月 2019年 6月	三重大学(現国立大学法人三重大学)工学部教授 国立大学法人三重大学共通教育センター実践教育部門長 国立大学法人三重大学学長補佐 国立大学法人三重大学大学院地域イノベーション学研究所研究科長 国立大学法人三重大学理事・副学長 国立大学法人三重大学副学長(現職) 国立大学法人三重大学大学院工学研究科教授(現職) 当行監査役(現職)	2019年 6月から 4年	
監査役	川端 郁子	1971年 7月 7日生	1998年 4月 2010年 8月 2010年 8月 2019年 6月	検事任官 三重弁護士会弁護士登録 川端法律事務所代表弁護士(現職) 当行監査役(現職)	2019年 6月から 4年	
計						763

(注) 1 取締役小林長久、取締役川喜田久及び取締役若狭一郎は、会社法第2条第15号に定める社外取締役であります。
2 監査役西田孝、監査役鶴岡信治及び監査役川端郁子は、会社法第2条第16号に定める社外監査役であります。

- 3 当行は、取締役会の活性化・意思決定の迅速化および業務執行機能の充実を通じて、コーポレート・ガバナンスの一層の強化を図るため、執行役員制度を導入しております。2019年6月24日現在の執行役員(取締役を兼務する執行役員を除く)は次のとおりであります。

役名	職名	氏名
執行役員	北勢支社長	釜森 伸明
執行役員	愛知支社長	竹中 章
執行役員	中勢支社長	山崎 計
執行役員	営業統括部長	福澤 紳一
執行役員	南勢支社長	海住 禎人
執行役員	融資統括部長	宮下 昌幸

社外役員の状況

当行は、現在、社外取締役を3名、社外監査役を3名選任しております。社外取締役及び社外監査役は取締役会の意思決定の妥当性、適正性を確保するための助言・提言を行うなど、経営に対する中立的・客観的な監督機能・監視機能が十分に発揮できる体制が構築できていると考えており、現在の体制を採用しております。

社外取締役小林長久氏は、日本トランスシティ株式会社代表取締役会長を兼務し、経営全般の経験が豊富であります。同氏は38千株の当行株式を保有しておりますが、当行の発行済株式総数に占める割合は僅少であります。同氏が代表取締役会長を務める日本トランスシティ株式会社とは、預金や貸出等の経常的な取引がありますが、取引の規模や性質に照らして、株主・投資者の判断に影響を及ぼすおそれはないと判断いたします。また、同氏は当行取締役常務執行役員の長合教実が社外取締役を務めている四日市港埠頭株式会社の代表取締役社長であります。同社とは、預金等の経常的な取引がありますが、取引の規模や性質に照らして、株主・投資者の判断に影響を及ぼすおそれはないと判断いたします。

社外取締役川喜田久氏は、三重トヨベツ株式会社代表取締役社長を兼務し、経営全般の経験が豊富であります。同氏は61千株の当行株式を保有しておりますが、当行の発行済株式総数に占める割合は僅少であります。同氏が代表取締役社長を務める三重トヨベツ株式会社とは、預金や貸出等の経常的な取引がありますが、取引の規模や性質に照らして、株主・投資者の判断に影響を及ぼすおそれはないと判断いたします。また、同氏は当行取締役専務執行役員の杉浦雅和が社外監査役を務めている株式会社ちとせの取締役であります。同社とは、預金や貸出等の経常的な取引がありますが、取引の規模や性質に照らして、株主・投資者の判断に影響を及ぼすおそれはないと判断いたします。

社外取締役若狭一郎氏は、株式会社明治安田総合研究所代表取締役会長を兼務し、過去に明治安田生命保険相互会社の執行役員副社長を務め、経営全般の経験が豊富であります。同氏の出身の明治安田生命保険相互会社とは、預金等の経常的な取引及び代理店契約がありますが、取引の規模や性質に照らして、株主・投資者の判断に影響を及ぼすおそれはないと判断いたします。

社外監査役西田孝氏は、過去に三菱証券株式会社(現三菱UFJモルガン・スタンレー証券株式会社)の常務執行役員、株式会社東京三菱銀行(現株式会社三菱UFJ銀行)の執行役員を務めたほか、その他企業にて社外監査役を務めるなど経営全般の経験が豊富であります。同氏は5百株の当行株式を保有しておりますが、当行の発行済株式総数に占める割合は僅少であります。同氏の出身の三菱UFJモルガン・スタンレー証券株式会社とは、預金等の経常的な取引及び金融商品仲介業務での提携がありますが、取引の規模や性質に照らして、株主・投資者の判断に影響を及ぼすおそれはないと判断いたします。

社外監査役鶴岡信治氏は、会社経営に直接関与した経験はありませんが、大学教授としての幅広い知識に加え、国立大学法人三重大学の理事・副学長として、組織運営に関する豊富な経験と幅広い見識を有しております。同氏が副学長を務める国立大学法人三重大学とは、預金や貸出等の経常的な取引がありますが、取引の規模や性質に照らして、株主・投資者の判断に影響を及ぼすおそれはないと判断いたします。

社外監査役川端郁子氏は、会社経営に直接関与した経験はありませんが、検事および弁護士として活躍し、法律の専門家としての豊富な経験と幅広い見識を有しております。同氏が代表弁護士を務める川端法律事務所とは預金等の経常的な取引がありますが、取引の規模や性質に照らして、株主・投資者の判断に影響を及ぼすおそれはないと判断いたします。

当行は、証券取引所規則等によって確保が義務付けられる「独立役員」の該当性に関し、具体的に数値基準等を盛り込んだ判断基準(以下「独立性判断基準」という。)を独自に定めており、その内容は以下のとおりであります。当行の社外取締役及び社外監査役は全員、独立性判断基準を満たしており、株式会社東京証券取引所及び株式会社名古屋証券取引所に対して、一般株主と利益相反が生じるおそれのない独立役員として届け出ております。

<独立性判断基準>

当行における独立役員(候補者を含む)は、以下のいずれの要件にも該当しない者とする。

- (ア) 当行を主要な取引先とする者(注1)、またはその者が法人等である場合にはその業務執行者(注2)。
- (イ) 当行の主要な取引先(注3)、またはその者が法人等である場合にはその業務執行者。
- (ウ) 当行から役員報酬以外に、年間1,000万円を超える金銭その他の財産を得ている弁護士、公認会計士、税理士またはコンサルタント等。
- (エ) 当行の主要な株主(注4)またはその者が法人等である場合にはその業務執行者。
- (オ) 当行から年間1,000万円を超える寄付等を受ける者、またはその者が法人等である場合にはその業務執行者。
- (カ) 上記(ア)から(オ)までのいずれかに該当する者の近親者(注5)。

(注)1 当行を主要な取引先とする者とは、融資取引において当行の貸出姿勢がその者の事業継続に深刻な影響を及ぼすと考えられる者とする。

- 2 業務執行者とは、会社法施行規則第2条第3項第6号に定める者とする。
- 3 当行の主要な取引先とは、当行からの借入金残高が当行の貸出金残高の2%以上を占めている先とする。
- 4 当行の主要な株主とは、議決権所有割合が10%以上の株主とする。
- 5 近親者とは、二親等内の親族とする。

社外取締役又は社外監査役による監督又は監査と内部監査、監査役監査及び会計監査との相互連携並びに内部統制部門との関係

社外取締役は、経済人としての豊富な経験に基づき、取締役会の意思決定の妥当性、適正性を確保するための助言、提言を行い、経営の重要事項の決定及び業務執行を監督する役割を担っております。

社外監査役は、監査役会において、業務監査部から内部監査結果について、リスク統括部から内部統制の評価について報告を受け、内部監査、内部統制の有効性等について意見表明を行っております。また、会計監査人とは情報や意見交換の実施、並びに監査結果の報告を受けるなど、連携の強化を図っております。

(3) 【監査の状況】

監査役監査の状況

監査役会は、監査役5名(うち社外監査役3名)で構成され、原則月1回開催しております。監査役会では、法令等に定められた事項を決議・協議するとともに、各監査役の監査結果等について報告を受け、取締役の職務の執行全般を監査しております。監査役監査は、監査役監査基準、年次の監査方針・計画に則り実施し、監査結果について年1回代表取締役宛て報告しております。また、監査役及び監査役会をサポートするための監査役室に専属スタッフ1名を配属しております。

監査役と業務監査部とは、毎月の定例会議を開催し、業務監査部による監査の実施状況などについて意見交換を行い連携を図るとともに、監査役は必要に応じて業務監査部による被監査部署への監査結果伝達・提言実施の場にも立会い、監査役監査の実効性を高めております。また、監査役は、業務監査会において業務監査部から内部監査の結果等について報告を受け、内部監査の有効性等についての意見表明を行っております。さらに、監査役、業務監査部及び会計監査人は、定期的に情報や意見交換の実施並びに監査結果の報告を受けるほか、適宜会計監査人による監査に立ち会うなど、連携の強化を図っております。

また、監査役は、代表取締役との会合の他、社外取締役との会合、代表取締役及び社外取締役との会合、会計監査人、社外取締役及び業務監査部との会合を持ちました。

内部監査の状況

取締役会の下に、常勤取締役と業務監査部長をもって構成する業務監査会を設置し、原則月1回開催しております。業務監査会では、業務執行の適正性及び内部監査の有効性を監視し、経営管理の強化・充実に努めております。業務監査会直轄の業務監査部(2019年3月31日現在28名)は、専門性のある人材を配置し内部監査方針、内部監査規定等および年次の基本監査計画に基づき内部監査を実施し、必要に応じて改善を勧告しております。

また、「監査役監査の状況」に記載のとおり、監査役監査及び会計監査と連携を図っております。

会計監査の状況

(ア)監査法人の名称

有限責任 あずさ監査法人

(イ)業務を執行した公認会計士

鈴木 賢次

山川 勝

山田 昌紀

(ウ)監査業務に係る補助者の構成

当行の会計監査業務に係る補助者は、公認会計士8名、その他18名であります。

(エ)監査法人の選定方針と理由

当行では、会計監査人が会社法第340条第1項各号に定める項目に該当すると認められる場合は、監査役全員の同意に基づき、監査役会が会計監査人を解任いたします。その他、会計監査人が継続してその職務を適切に遂行することが困難と認められる場合には、監査役会の決議に基づき、取締役会は会計監査人の解任又は不再任議案を株主総会に付議する方針であります。

当行は、以下の理由から有限責任あずさ監査法人を当行の会計監査人に選定（再任）しております。

- a 十分な業界知識及び専門知識を有しており、また、監査上の問題点等に対する対応及び当行経理部門とのコミュニケーションも図られており、その監査品質に問題はない。
- b その監査方法や監査体制は当行の会計監査人として有効である。
- c 会社法第340条第1項に定める解任事由に該当するような問題は認められない。

(オ)監査役及び監査役会による監査法人の評価

監査役会は、会計監査人を適切に選定し評価するための基準を策定し、独立性及び専門性を確認しております。

監査報酬の内容等

「企業内容等の開示に関する内閣府令の一部を改正する内閣府令」（2019年1月31日内閣府令第3号）による改正後の「企業内容等の開示に関する内閣府令」第二号様式記載上の注意(56) d (f) から の規定に経過措置を適用しております。

(ア)監査公認会計士等に対する報酬

区分	前連結会計年度		当連結会計年度	
	監査証明業務に基づく報酬(百万円)	非監査業務に基づく報酬(百万円)	監査証明業務に基づく報酬(百万円)	非監査業務に基づく報酬(百万円)
提出会社	54	4	53	
連結子会社				
計	54	4	53	

(注) 前連結会計年度に当行が監査公認会計士等に対して報酬を支払っている非監査業務の内容は、会計・税務等に係るアドバイザー業務であります。

(イ)その他重要な報酬の内容

該当事項はありません。

(ウ)監査報酬の決定方針

該当事項はありません。

(エ)監査役会が会計監査人の報酬等に同意した理由

監査役会は、会計監査人による当事業年度監査計画の内容、監査時間及び報酬見積り等の妥当性を検討した結果、会計監査人の報酬等について会社法第399条第1項の同意を行っております。

(4) 【役員の報酬等】

役員の報酬等の額又はその算定方法の決定に関する方針

2011年6月24日開催の第196回定時株主総会における決議に基づき、取締役の報酬については、(ア)役割や責任に応じて月次で支給する「確定金額報酬」、(イ)単年度の業績等に応じて支給する「業績連動型報酬」、(ウ)中長期の企業価値向上と株価上昇への意欲や士気を高めるための「株式報酬型ストック・オプション」の構成としております。

また、監査役の報酬については、中立性および独立性を高めるため、月次で支給する「確定金額報酬」のみとしております。

支給時期、配分等については、次の「2011年6月24日開催の第196回定時株主総会における決議内容」に記載の金額の範囲内で、取締役についてはコーポレートガバナンス会議の助言のもと取締役会の決議により、監査役については監査役の協議により決定いたします。

2011年6月24日開催の第196回定時株主総会における決議内容

(ア) 確定金額報酬は、取締役の報酬額(確定金額報酬額)については年額300百万円以内、監査役の報酬額(確定金額報酬額)については年額65百万円以内としております。

(イ) 業績連動型報酬は、確定金額報酬とは別枠で、当該事業年度にかかる当期純利益の0.9%を総支給額といたします。その上限額を100百万円とし、当期純利益が2,000百万円未満の場合、支給額は0円とします。

(ウ) 株式報酬型ストック・オプションは、確定金額報酬および業績連動型報酬とは別枠で、新株予約権を年額30百万円以内の範囲で割り当ていたします。

上記(ア)の定めに係る役員の員数は取締役13名および監査役5名、(イ)および(ウ)の定めに係る役員の員数は取締役13名であります。

当事業年度の役員の報酬等の額については、上記「2011年6月24日開催の第196回定時株主総会における決議内容」に記載の金額の範囲内で、取締役についてはコーポレートガバナンス会議の助言のもと取締役会の決議により、監査役については監査役の協議により決定しております。

業績連動型報酬に係る指標は、業績との連動性を明確かつ明瞭にするため当期純利益としております。

なお、当事業年度における当期純利益は、目標10,600百万円に対し実績10,766百万円であります。

役員区分ごとの報酬等の総額、報酬等の種類別の総額及び対象となる役員の員数

当事業年度(自2018年4月1日 至2019年3月31日)

役員区分	員数 (名)	報酬等の総額 (百万円)	報酬等の種類別の総額(百万円)		
			確定金額報酬	業績連動型報酬	株式報酬型 ストック・オプション
取締役 (社外取締役を除く)	12	363	246	96	21
監査役 (社外監査役を除く)	2	45	45		
社外役員	7	31	31		

(注) 1 重要な使用人兼務役員の使用人としての報酬等は24百万円、員数は6人であり、その内容は給与及び賞与であります。

2 員数には、当事業年度中に退任した取締役6名及び監査役1名を含んでおります。

役員ごとの連結報酬等の総額等

連結報酬等の総額が1億円以上である者が存在しないため、記載しておりません。

(5) 【株式の保有状況】

投資株式の区分の基準及び考え方

当行は、保有目的が純投資目的である投資株式と純投資目的以外の目的である投資株式の区分に分けて管理をしています。保有目的が純投資目的以外の投資株式については、当行の事業特性上、「取引先との関係の維持・強化」や「当行および取引先の中長期的な企業価値の向上」などに資する場合において限定的に保有し、株式保有リスクの抑制や資本の効率性等の観点から、取引先企業と十分な対話を経たうえで、縮減を進めることを基本方針としております。

保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式

(ア) 保有方針及び保有の合理性を検証する方法並びに個別銘柄の保有の適否に関する取締役会等における検証の内容

個別の純投資目的以外の投資株式については、リターンとリスクなどを踏まえた中長期的な経済合理性および資本コスト等を考慮した基準に基づく確認を行うとともに、取締役会において取引関係の構築状況なども踏まえた経済合理性を定期的に検証し、保有意義が認められない銘柄については、保有の見直しについて検討を行っております。

(イ) 銘柄数及び貸借対照表計上額

	銘柄数 (銘柄)	貸借対照表計上額の 合計額(百万円)
非上場株式	81	2,201
非上場株式以外の株式	147	163,505

(当事業年度において株式数が増加した銘柄)

	銘柄数 (銘柄)	株式数の増加に係る取得 価額の合計額(百万円)	株式数の増加の理由
非上場株式	1	40	同社との協力関係の維持・強化等
非上場株式以外の株式			

(当事業年度において株式数が減少した銘柄)

	銘柄数 (銘柄)	株式数の減少に係る売却 価額の合計額(百万円)
非上場株式	1	3
非上場株式以外の株式	4	326

(ウ) 特定投資株式及びみなし保有株式の銘柄ごとの株式数、貸借対照表計上額等に関する情報

特定投資株式

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、定量的な保有効果 及び株式数が増加した理由(注) 1	当行の株式の保有 の有無 (注) 2
	株式数(株)	株式数(株)		
トヨタ自動車株式会社	7,145,200	7,145,200	地域経済との関連性が深く、地域の成長・活性化に重要な役割を持つ同社との協力関係の維持・強化等による当行の中長期的な企業価値向上	有
	46,350	48,765		
東海旅客鉄道株式会社	400,000	400,000	地域経済との関連性が深く、地域の成長・活性化に重要な役割を持つ同社との協力関係の維持・強化等による当行の中長期的な企業価値向上	有
	10,284	8,052		
三菱地所株式会社	4,491,000	4,491,000	保有に関する経済合理性を有し、業界内の有力企業である同社との協力関係の維持・向上を通じた、当行の中長期的な企業価値向上	有
	9,006	8,077		
	当事業年度	前事業年度		
	株式数(株)	株式数(株)		

銘柄	貸借対照表計上額 (百万円)	貸借対照表計上額 (百万円)	保有目的、定量的な保有効果 及び株式数が増加した理由(注) 1	当行の株 式の保有 の有無 (注) 2
ダイキン工業株 式会社	550,000	550,000	保有に関する経済合理性を有し、業界内の有 力企業である同社との協力関係の維持・向上 を通じた、当行の中長期的な企業価値向上 地域経済との関連性が深く、地域の成長・活 性化に重要な役割を持つ同社との協力関係の 維持・強化等による当行の中長期的な企業価 値向上	有
	7,133	6,454		有
イオン株式会社	2,135,100	2,135,100		有
信越化学工業株 式会社	4,945	4,055	保有に関する経済合理性を有し、業界内の有 力企業である同社との協力関係の維持・向上 を通じた、当行の中長期的な企業価値向上 地域経済との関連性が深く、地域の成長・活 性化に重要な役割を持つ同社との協力関係の 維持・強化等による当行の中長期的な企業価 値向上	有
	518,500	518,500		有
株式会社デン ソー	4,811	5,706	保有に関する経済合理性を有し、業界内の有 力企業である同社との協力関係の維持・向上 を通じた、当行の中長期的な企業価値向上 地域経済との関連性が深く、地域の成長・活 性化に重要な役割を持つ同社との協力関係の 維持・強化等による当行の中長期的な企業価 値向上	無
	832,100	832,100		無
株式会社日清製 粉グループ本社	3,592	4,842	保有に関する経済合理性を有し、業界内の有 力企業である同社との協力関係の維持・向上 を通じた、当行の中長期的な企業価値向上 地域経済との関連性が深く、地域の成長・活 性化に重要な役割を持つ同社との協力関係の 維持・強化等による当行の中長期的な企業価 値向上	無
	1,360,040	1,360,040		無
中部電力株式会 社	3,454	2,868	保有に関する経済合理性を有し、業界内の有 力企業である同社との協力関係の維持・向上 を通じた、当行の中長期的な企業価値向上 地域経済との関連性が深く、地域の成長・活 性化に重要な役割を持つ同社との協力関係の 維持・強化等による当行の中長期的な企業価 値向上	無
	1,872,300	1,872,300		無
東邦瓦斯株式会 社	3,236	2,814	地域経済との関連性が深く、地域の成長・活 性化に重要な役割を持つ同社との協力関係の 維持・強化等による当行の中長期的な企業価 値向上	有
	623,200	623,200		有
株式会社三菱UF Jフィナン シャル・グルー プ	3,097	2,037	業務提携等を通じた協力関係の維持・強化等 による当行の中期的な企業価値向上	有
	5,561,600	5,561,600		有
ジャパนมテリ アル株式会社	3,058	3,876	地域経済の成長・活性化に重要な役割を担う 地場優良企業との協力関係の維持・強化等 による当行の中長期的な企業価値向上 当行の本店棟・店舗設計および施工の一部を 担うなど、保有に関する経済合理性を有し、 業界内の有力企業である同社との協力関係の 維持・向上を通じた、当行の中長期的な企業 価値向上	有
	2,160,000	2,160,000		有
清水建設株式会 社	2,928	2,980	保有に関する経済合理性を有し、業界内の有 力企業である同社との協力関係の維持・向上 を通じた、当行の中長期的な企業価値向上 地域経済との関連性が深く、地域の成長・活 性化に重要な役割を持つ同社との協力関係の 維持・強化等による当行の中長期的な企業価 値向上	有
	3,015,000	3,015,000		有
近鉄グループ ホールディング ス株式会社	2,900	2,867	保有に関する経済合理性を有し、業界内の有 力企業である同社との協力関係の維持・向上 を通じた、当行の中長期的な企業価値向上 地域経済との関連性が深く、地域の成長・活 性化に重要な役割を持つ同社との協力関係の 維持・強化等による当行の中長期的な企業価 値向上	有
	556,600	556,600		有
三菱電機株式会 社	2,872	2,307	保有に関する経済合理性を有し、業界内の有 力企業である同社との協力関係の維持・向上 を通じた、当行の中長期的な企業価値向上 当行営業エリア内に工場を有するなど、保有 に関する経済合理性を有し、業界内の有力企 業である同社との協力関係の維持・向上を通 じた、当行の中長期的な企業価値向上	有
	2,000,000	2,000,000		有
ロート製薬株式 会社	2,845	3,403	保有に関する経済合理性を有し、業界内の有 力企業である同社との協力関係の維持・向上 を通じた、当行の中長期的な企業価値向上 地域経済との関連性が深く、地域の成長・活 性化に重要な役割を持つ同社との協力関係の 維持・強化等による当行の中長期的な企業価 値向上	無
	1,000,000	1,000,000		無
日本碍子株式会 社	2,842	2,975	地域経済との関連性が深く、地域の成長・活 性化に重要な役割を持つ同社との協力関係の 維持・強化等による当行の中長期的な企業価 値向上	無
	1,391,000	1,391,000		無
三重交通グルー プホールディン グス株式会社	2,236	2,551	地域経済の成長・活性化に重要な役割を担う 地場優良企業との協力関係の維持・強化等 による当行の中長期的な企業価値向上	有
	3,917,000	3,917,000		有
SOMPOホー ルディングス株 式会社	2,201	2,056	業務提携を通じた協力関係の維持・強化等 による当行の中期的な企業価値向上	有
	502,625	502,625		有
N T N株式会社	2,059	2,152	当行営業エリア内に工場を有するなど、保有 に関する経済合理性を有し、業界内の有力企 業である同社との協力関係の維持・向上を通 じた、当行の中長期的な企業価値向上	有
	5,019,000	5,019,000		有
東京海上ホール ディングス株式 会社	1,646	2,228	業務提携を通じた協力関係の維持・強化等 による当行の中期的な企業価値向上	有
	304,700	304,700		有
	1,633	1,442		
銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、定量的な保有効果 及び株式数が増加した理由(注) 1	当行の株 式の保有 の有無 (注) 2
	株式数(株)	株式数(株)		
	貸借対照表計上額 (百万円)	貸借対照表計上額 (百万円)		

株式会社パイロットコーポレーション	320,000	320,000	同社子会社が当行営業エリア内に工場を有するなど、保有に関する経済合理性を有し、業界内の有力企業である同社との協力関係の維持・向上を通じた、当行の中長期的な企業価値向上	有
	1,435	1,897		
井村屋グループ株式会社	578,500	578,500	地域経済の成長・活性化に重要な役割を担う地場優良企業との協力関係の維持・強化等による当行の中長期的な企業価値向上	有
	1,405	2,235		
株式会社島津製作所	399,000	399,000	保有に関する経済合理性を有し、業界内の有力企業である同社との協力関係の維持・向上を通じた、当行の中長期的な企業価値向上	無
	1,276	1,193		
朝日インテック株式会社	240,000	240,000	地域経済との関連性が深く、地域の成長・活性化に重要な役割を持つ同社との協力関係の維持・強化等による当行の中長期的な企業価値向上	無
	1,248	1,011		
日本トランスシティ株式会社	2,683,000	2,683,000	地域経済の成長・活性化に重要な役割を担う地場優良企業との協力関係の維持・強化等による当行の中長期的な企業価値向上	有
	1,193	1,261		
本田技研工業株式会社	386,000	386,000	当行営業エリア内に工場を有するなど、地域経済との関連性が深く、地域の成長・活性化に重要な役割を持つ同社との協力関係の維持・強化等による当行の中長期的な企業価値向上	無
	1,156	1,412		
東ソー株式会社	621,500	621,500	当行営業エリア内に工場を有するなど、保有に関する経済合理性を有し、業界内の有力企業である同社との協力関係の維持・向上を通じた、当行の中長期的な企業価値向上	有
	1,069	1,297		
三菱瓦斯化学株式会社	662,500	662,500	当行営業エリア内に工場を有するなど、保有に関する経済合理性を有し、業界内の有力企業である同社との協力関係の維持・向上を通じた、当行の中長期的な企業価値向上	有
	1,046	1,688		
株式会社三菱ケミカルホールディングス	1,279,000	1,279,000	当行営業エリア内に工場を有するなど、保有に関する経済合理性を有し、業界内の有力企業である同社との協力関係の維持・向上を通じた、当行の中長期的な企業価値向上	有
	996	1,318		
横浜ゴム株式会社	469,500	469,500	当行営業エリア内に工場を有するなど、保有に関する経済合理性を有し、業界内の有力企業である同社との協力関係の維持・向上を通じた、当行の中長期的な企業価値向上	有
	965	1,156		
住友電気工業株式会社	657,000	657,000	同社子会社が当行営業エリア内に工場を有するなど、保有に関する経済合理性を有し、業界内の有力企業である同社との協力関係の維持・向上を通じた、当行の中長期的な企業価値向上	無
	964	1,066		
株式会社大和証券グループ本社	1,731,000	1,731,000	金融関連業務における協力関係の維持・向上を通じた、当行の中期的な企業価値向上	有
	933	1,174		
京阪ホールディングス株式会社	200,000	200,000	保有に関する経済合理性を有し、業界内の有力企業である同社との協力関係の維持・向上を通じた、当行の中長期的な企業価値向上	無
	931	656		
マックスバリュ中部株式会社	662,300	662,300	地域経済との関連性が深く、地域の成長・活性化に重要な役割を持つ同社との協力関係の維持・強化等による当行の中長期的な企業価値向上	有
	897	933		
株式会社伊予銀行	1,525,000	1,525,000	金融関連業務における協力関係の維持・向上を通じた、当行の中期的な企業価値向上	有
	893	1,221		
イオンフィナンシャルサービス株式会社	379,500	379,500	保有に関する経済合理性を有し、業界内の有力企業である同社との協力関係の維持・向上を通じた、当行の中長期的な企業価値向上	有
	855	927		
住友金属鉱山株式会社	257,000	257,000	保有に関する経済合理性を有し、業界内の有力企業である同社との協力関係の維持・向上を通じた、当行の中長期的な企業価値向上	有
	840	1,151		
株式会社ケーズホールディングス	756,960	756,960	当行営業エリア内に店舗を有するなど、保有に関する経済合理性を有し、業界内の有力企業である同社との協力関係の維持・向上を通じた、当行の中長期的な企業価値向上	有
	743	1,113		
銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、定量的な保有効果及び株式数が増加した理由(注)1	当行の株式の保有の有無(注)2
	株式数(株)	株式数(株)		
	貸借対照表計上額(百万円)	貸借対照表計上額(百万円)		
太陽化学株式会社	437,800	437,800	地域経済の成長・活性化に重要な役割を担う地場優良企業との協力関係の維持・強化等による当行の中長期的な企業価値向上	有
	682	768		

株式会社岡三証券グループ	1,569,000	1,569,000	金融関連業務における協力関係の維持・向上を通じた、当行の中期的な企業価値向上	有
	644	997		
株式会社柿安本店	273,000	273,000	地域経済の成長・活性化に重要な役割を担う地場優良企業との協力関係の維持・強化等による当行の中長期的な企業価値向上	有
	590	791		
株式会社日立製作所	163,800	819,000	当行システムの一部に同社製品を採用するなど、保有に関する経済合理性を有し、業界内の有力企業である同社との協力関係の維持・向上を通じた、当行の中長期的な企業価値向上 (株式数の減少は株式併合によるもの)	無
	587	631		
岡谷鋼機株式会社	60,000	60,000	地域経済との関連性が深く、地域の成長・活性化に重要な役割を持つ同社との協力関係の維持・強化等による当行の中長期的な企業価値向上	無
	551	720		
オリックス株式会社	344,000	344,000	保有に関する経済合理性を有し、業界内の有力企業である同社との協力関係の維持・向上を通じた、当行の中長期的な企業価値向上	有
	546	645		
三菱商事株式会社	165,500	165,500	保有に関する経済合理性を有し、業界内の有力企業である同社との協力関係の維持・向上を通じた、当行の中長期的な企業価値向上	無
	508	473		
株式会社A Tグループ	250,000	250,000	地域経済との関連性が深く、地域の成長・活性化に重要な役割を持つ同社との協力関係の維持・強化等による当行の中長期的な企業価値向上	有
	507	701		
株式会社滋賀銀行	189,400	947,000	金融関連業務における協力関係の維持・向上を通じた、当行の中期的な企業価値向上 (株式数の減少は株式併合によるもの)	有
	499	507		
株式会社ノリタケカンパニーリミテド	87,400	87,400	地域経済との関連性が深く、地域の成長・活性化に重要な役割を持つ同社との協力関係の維持・強化等による当行の中長期的な企業価値向上	無
	463	402		
株式会社北國銀行	130,000	130,000	金融関連業務における協力関係の維持・向上を通じた、当行の中期的な企業価値向上	有
	451	537		
株式会社九州フィナンシャルグループ	982,350	982,350	金融関連業務における協力関係の維持・向上を通じた、当行の中期的な企業価値向上	有
	442	516		
オーエスジー株式会社	200,000	200,000	地域経済との関連性が深く、地域の成長・活性化に重要な役割を持つ同社との協力関係の維持・強化等による当行の中長期的な企業価値向上	無
	427	488		
キクカワエンタープライズ株式会社	57,700	577,000	地域経済の成長・活性化に重要な役割を担う地場優良企業との協力関係の維持・強化等による当行の中長期的な企業価値向上 (株式数の減少は株式併合によるもの)	有
	421	195		
HO CHI MINH CITY DEVELOPMENT JOINT STOCK COMMERCIAL BANK	2,850,000	2,850,000	当行取引先のベトナムビジネス支援のため、同行内ジャパンデスクに行員を派遣。同行との共同ビジネス展開・協力関係の強化等による当行の中長期的な企業価値向上	無
	410	614		
日本精工株式会社	381,000	381,000	保有に関する経済合理性を有し、業界内の有力企業である同社との協力関係の維持・向上を通じた、当行の中長期的な企業価値向上	無
	395	543		
ジェイエフイーホールディングス株式会社	200,000	200,000	保有に関する経済合理性を有し、業界内の有力企業である同社との協力関係の維持・向上を通じた、当行の中長期的な企業価値向上	無
	375	428		
三菱マテリアル株式会社	128,500	128,500	当行営業エリア内に工場を有するなど、保有に関する経済合理性を有し、業界内の有力企業である同社との協力関係の維持・向上を通じた、当行の中長期的な企業価値向上	無
	375	411		
銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、定量的な保有効果及び株式数が増加した理由(注)1	当行の株式の保有の有無(注)2
	株式数(株)	株式数(株)		
	貸借対照表計上額(百万円)	貸借対照表計上額(百万円)		
株式会社豊田自動織機	66,700	66,700	地域経済との関連性が深く、地域の成長・活性化に重要な役割を持つ同社との協力関係の維持・強化等による当行の中長期的な企業価値向上	無
	370	429		
三菱ロジスネクスト株式会社	300,000	300,000	保有に関する経済合理性を有し、業界内の有力企業である同社との協力関係の維持・向上を通じた、当行の中長期的な企業価値向上	無
	361	268		

株式会社フジクラ	864,000	864,000	当行営業エリア内に工場を有するなど、保有に関する経済合理性を有し、業界内の有力企業である同社との協力関係の維持・向上を通じた、当行の中長期的な企業価値向上	無
	360	623		
住友ベークライト株式会社	85,600	428,000	保有に関する経済合理性を有し、業界内の有力企業である同社との協力関係の維持・向上を通じた、当行の中長期的な企業価値向上 (株式数の減少は株式併合によるもの)	無
	339	401		
株式会社ジェイテクト	245,700	245,700	地域経済との関連性が深く、地域の成長・活性化に重要な役割を持つ同社との協力関係の維持・強化等による当行の中長期的な企業価値向上	無
	334	387		
富士電機株式会社	104,600	523,000	同社子会社が当行営業エリア内に工場を有するなど、保有に関する経済合理性を有し、業界内の有力企業である同社との協力関係の維持・向上を通じた、当行の中長期的な企業価値向上 (株式数の減少は株式併合によるもの)	無
	328	378		
サッポロホールディングス株式会社	128,000	128,000	保有に関する経済合理性を有し、業界内の有力企業である同社との協力関係の維持・向上を通じた、当行の中長期的な企業価値向上	無
	309	396		
富士通株式会社	38,700	387,000	当行システムの一部に同社製品を採用するなど、保有に関する経済合理性を有し、業界内の有力企業である同社との協力関係の維持・向上を通じた、当行の中長期的な企業価値向上 (株式数の減少は株式併合によるもの)	無
	309	253		
株式会社八十二銀行	665,000	665,000	金融関連業務における協力関係の維持・向上を通じた、当行の中期的な企業価値向上	有
	305	379		
電源開発株式会社	100,000	100,000	保有に関する経済合理性を有し、業界内の有力企業である同社との協力関係の維持・向上を通じた、当行の中長期的な企業価値向上	無
	269	268		
株式会社パローホールディングス	100,000	100,000	地域経済との関連性が深く、地域の成長・活性化に重要な役割を持つ同社との協力関係の維持・強化等による当行の中長期的な企業価値向上	無
	268	288		
株式会社岩手銀行	81,500	81,500	金融関連業務における協力関係の維持・向上を通じた、当行の中期的な企業価値向上	有
	266	343		
関西ペイント株式会社	116,000	116,000	保有に関する経済合理性を有し、業界内の有力企業である同社との協力関係の維持・向上を通じた、当行の中長期的な企業価値向上	無
	244	287		
株式会社秋田銀行	108,000	108,000	金融関連業務における協力関係の維持・向上を通じた、当行の中期的な企業価値向上	無
	242	307		
中部日本放送株式会社	355,000	355,000	地域経済との関連性が深く、地域の成長・活性化に重要な役割を持つ同社との協力関係の維持・強化等による当行の中長期的な企業価値向上	無
	239	314		
東海東京フィナンシャル・ホールディングス株式会社	596,000	596,000	金融関連業務における協力関係の維持・向上を通じた、当行の中期的な企業価値向上	無
	238	438		
富士紡ホールディングス株式会社	90,000	90,000	保有に関する経済合理性を有し、業界内の有力企業である同社との協力関係の維持・向上を通じた、当行の中長期的な企業価値向上	有
	237	347		
三菱倉庫株式会社	75,000	75,000	保有に関する経済合理性を有し、業界内の有力企業である同社との協力関係の維持・向上を通じた、当行の中長期的な企業価値向上	有
	231	169		
銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、定量的な保有効果及び株式数が増加した理由(注)1	当行の株式の保有の有無(注)2
	株式数(株)	株式数(株)		
	貸借対照表計上額(百万円)	貸借対照表計上額(百万円)		
東亜合成株式会社	194,000	194,000	当行営業エリア内に工場を有するなど、保有に関する経済合理性を有し、業界内の有力企業である同社との協力関係の維持・向上を通じた、当行の中長期的な企業価値向上	無
	226	243		
株式会社大垣共立銀行	98,500	98,500	金融関連業務における協力関係の維持・向上を通じた、当行の中期的な企業価値向上	有
	226	263		
日立金属株式会社	172,000	172,000	当行営業エリア内に工場を有するなど、保有に関する経済合理性を有し、業界内の有力企業である同社との協力関係の維持・向上を通じた、当行の中長期的な企業価値向上	無
	221	216		

株式会社安永	160,000	160,000	地域経済の成長・活性化に重要な役割を担う 地場優良企業との協力関係の維持・強化等による 当行の中長期的な企業価値向上	有
	220	375		
株式会社第四北 越フィナンシャル グループ (注)3	70,600	70,600	金融関連業務における協力関係の維持・向上 を通じた、当行の中期的な企業価値向上	有
	220	331		
株式会社IHI	79,000	79,000	保有に関する経済合理性を有し、業界内の有力 企業である同社との協力関係の維持・向上 を通じた、当行の中長期的な企業価値向上	無
	210	261		
JSR株式会社	115,000	115,000	当行営業エリア内に工場を有するなど、保有 に関する経済合理性を有し、業界内の有力企 業である同社との協力関係の維持・向上を通 じた、当行の中長期的な企業価値向上	無
	197	275		
シンボ株式会社	150,000	150,000	地域経済との関連性が深く、地域の成長・活 性化に重要な役割を持つ同社との協力関係の 維持・強化等による当行の中長期的な企業価 値向上	有
	193	202		
株式会社カネカ	46,000	230,000	保有に関する経済合理性を有し、業界内の有力 企業である同社との協力関係の維持・向上 を通じた、当行の中長期的な企業価値向上 (株式数の減少は株式併合によるもの)	有
	190	242		
株式会社東祥	60,000	60,000	地域経済との関連性が深く、地域の成長・活 性化に重要な役割を持つ同社との協力関係の 維持・強化等による当行の中長期的な企業価 値向上	無
	184	246		
東洋紡株式会社	130,000	130,000	保有に関する経済合理性を有し、業界内の有力 企業である同社との協力関係の維持・向上 を通じた、当行の中長期的な企業価値向上	無
	183	272		
東洋電機株式会 社	214,000	214,000	地域経済との関連性が深く、地域の成長・活 性化に重要な役割を持つ同社との協力関係の 維持・強化等による当行の中長期的な企業価 値向上	有
	178	214		
リゾートトラ スト株式会社	103,600	103,600	地域経済との関連性が深く、地域の成長・活 性化に重要な役割を持つ同社との協力関係の 維持・強化等による当行の中長期的な企業価 値向上	無
	155	231		
株式会社エイチ ワン	172,000	172,000	当行営業エリア内に工場を有するなど、保有 に関する経済合理性を有し、業界内の有力企 業である同社との協力関係の維持・向上を通 じた、当行の中長期的な企業価値向上	有
	154	238		
J.フロントリ テイリング株式 会社	112,000	112,000	当行営業エリア内に店舗を有するなど、保有 に関する経済合理性を有し、業界内の有力企 業である同社との協力関係の維持・向上を通 じた、当行の中長期的な企業価値向上	無
	147	202		
株式会 社エフ テック	161,600	161,600	当行営業エリア内に工場を有するなど、保有 に関する経済合理性を有し、業界内の有力企 業である同社との協力関係の維持・向上を通 じた、当行の中長期的な企業価値向上	有
	144	213		
株式会社めぶき フィナンシャル グループ	500,000	500,000	金融関連業務における協力関係の維持・向上 を通じた、当行の中期的な企業価値向上	無
	141	204		
上新電機株式会 社	55,000	55,000	当行営業エリア内に店舗を有するなど、保有 に関する経済合理性を有し、業界内の有力企 業である同社との協力関係の維持・向上を通 じた、当行の中長期的な企業価値向上	有
	140	213		

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、定量的な保有効果 及び株式数が増加した理由(注)1	当行の株式の保有の有無 (注)2
	株式数(株)	株式数(株)		
	貸借対照表計上額 (百万円)	貸借対照表計上額 (百万円)		
シャープ株式会社	101,100	101,100	当行営業エリア内に工場を有するなど、保有に関する経済合理性を有し、業界内の有力企業である同社との協力関係の維持・向上を通じた、当行の中長期的な企業価値向上	無
	123	321		
スルガ銀行株式会社	221,000	221,000	金融関連業務における協力関係の維持・向上を通じた、当行の中期的な企業価値向上	有
	113	324		

(注)1 定量的な保有効果については、個別の取引条件にかかる秘密保持の観点から記載しておりません。なお、保有の合理性については、リターンとリスクなどを踏まえた中長期的な経済合理性および資本コスト等を考慮した基準に基づく確認を行うとともに、取締役会において取引関係の構築状況なども踏まえた経済合理性を検証しております。

2 当該銘柄の発行者の子会社等が保有する場合を含めております。

3 株式会社第四銀行は、2018年10月1日付で株式会社北越銀行と経営統合し、株式会社第四北越フィナンシャルグループとなりました。

みなし保有株式

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、定量的な保有効果 及び株式数が増加した理由(注)2	当行の株式の保有の有無
	株式数(株)	株式数(株)		
	貸借対照表計上額 (百万円)	貸借対照表計上額 (百万円)		
トヨタ自動車株式会社	1,920,000	1,920,000	退職給付信託契約に基づく信託財産であり、議決権行使権限は当行が保有しております。	有
	12,455	13,104		
信越化学工業株式会社	300,000	300,000	退職給付信託契約に基づく信託財産であり、議決権行使権限は当行が保有しております。	有
	2,784	3,301		

(注)1 貸借対照表計上額の上位銘柄を選定する段階で、特定投資株式とみなし保有株式は合算しておりません。

2 定量的な保有効果については、個別の取引条件にかかる秘密保持の観点から記載しておりません。なお、保有の合理性については、リターンとリスクなどを踏まえた中長期的な経済合理性および資本コスト等を考慮した基準に基づく確認を行うとともに、取締役会において取引関係の構築状況なども踏まえた経済合理性を検証しております。

保有目的が純投資目的である投資株式

区分	当事業年度		前事業年度	
	銘柄数 (銘柄)	貸借対照表計上額の合計額 (百万円)	銘柄数 (銘柄)	貸借対照表計上額の合計額 (百万円)
非上場株式				
非上場株式以外の株式	31	6,884	38	9,502

区分	当事業年度		
	受取配当金の合計額(百万円)	売却損益の合計額(百万円)	評価損益の合計額(百万円)
非上場株式			
非上場株式以外の株式	173	186	590

第5 【経理の状況】

- 1 当行の連結財務諸表は、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」(1976年大蔵省令第28号)に基づいて作成しておりますが、資産及び負債の分類並びに収益及び費用の分類は、「銀行法施行規則」(1982年大蔵省令第10号)に準拠しております。
- 2 当行の財務諸表は、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」(1963年大蔵省令第59号)に基づいて作成しておりますが、資産及び負債の分類並びに収益及び費用の分類は、「銀行法施行規則」(1982年大蔵省令第10号)に準拠しております。
- 3 当行は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、連結会計年度(自2018年4月1日 至2019年3月31日)の連結財務諸表及び事業年度(自2018年4月1日 至2019年3月31日)の財務諸表について、有限責任あずさ監査法人の監査証明を受けております。
- 4 当行は、連結財務諸表等の適正性を確保するため、以下のような特段の取組みを行っております。
会計基準等の内容を適切に把握できる体制を整備するため、公益財団法人財務会計基準機構へ加入するとともに、同機構や監査法人等の主催する研修等に参加しております。

1 【連結財務諸表等】

(1) 【連結財務諸表】

【連結貸借対照表】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
資産の部		
現金預け金	8 611,452	8 904,975
コールローン及び買入手形	81,366	20,429
買入金銭債権	10,939	12,804
商品有価証券	18	23
金銭の信託	2,000	1,997
有価証券	1,2,8,13 1,778,737	1,2,8,13 1,731,418
貸出金	3,4,5,6,7,9 3,095,211	3,4,5,6,7,9 3,431,337
外国為替	7 1,731	7 2,484
リース債権及びリース投資資産	3,4,5,6 18,813	3,4,5,6 21,023
その他資産	1,3,4,5,6,8 68,196	1,3,4,5,6,8 64,903
有形固定資産	11,12 46,730	11,12 46,756
建物	22,126	21,669
土地	10 19,866	10 19,913
リース資産	0	-
建設仮勘定	156	235
その他の有形固定資産	10 4,580	10 4,938
無形固定資産	5,293	5,111
ソフトウェア	5,142	4,935
その他の無形固定資産	151	175
退職給付に係る資産	15,371	14,675
繰延税金資産	722	688
支払承諾見返	20,904	22,090
貸倒引当金	15,725	15,446
資産の部合計	5,741,767	6,265,275
負債の部		
預金	8 4,716,096	8 4,876,589
譲渡性預金	181,500	176,185
コールマネー及び売渡手形	100,000	240,000
債券貸借取引受入担保金	8 75,514	8 188,696
借入金	8 197,427	8 316,314
外国為替	32	263
その他負債	43,037	42,416
賞与引当金	222	233
退職給付に係る負債	2,986	3,278
役員退職慰労引当金	105	125
睡眠預金払戻損失引当金	1,405	1,600
ポイント引当金	358	390
偶発損失引当金	498	455
特別法上の引当金	0	1
繰延税金負債	41,748	38,239
再評価に係る繰延税金負債	10 2,535	10 2,534
支払承諾	20,904	22,090
負債の部合計	5,384,375	5,909,416

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
純資産の部		
資本金	20,000	20,000
資本剰余金	10,381	10,381
利益剰余金	223,649	232,337
自己株式	146	146
株主資本合計	253,885	262,572
その他有価証券評価差額金	102,182	94,072
繰延ヘッジ損益	4,466	4,979
土地再評価差額金	¹⁰ 4,170	¹⁰ 4,168
退職給付に係る調整累計額	1,467	149
その他の包括利益累計額合計	103,353	93,112
新株予約権	153	174
純資産の部合計	357,391	355,859
負債及び純資産の部合計	5,741,767	6,265,275

【連結損益計算書及び連結包括利益計算書】

【連結損益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2017年 4月 1日 至 2018年 3月 31日)	当連結会計年度 (自 2018年 4月 1日 至 2019年 3月 31日)
経常収益	90,612	85,847
資金運用収益	52,928	53,381
貸出金利息	31,954	34,097
有価証券利息配当金	19,821	18,119
コールローン利息及び買入手形利息	861	874
預け金利息	212	209
その他の受入利息	79	80
役務取引等収益	15,041	16,180
その他業務収益	15,443	12,347
その他経常収益	7,198	3,937
貸倒引当金戻入益	1,300	-
償却債権取立益	0	0
その他の経常収益	¹ 5,897	¹ 3,937
経常費用	73,837	70,364
資金調達費用	5,080	4,686
預金利息	1,136	998
譲渡性預金利息	30	30
コールマネー利息及び売渡手形利息	19	90
債券貸借取引支払利息	1,366	1,153
借入金利息	215	306
その他の支払利息	2,351	2,288
役務取引等費用	3,705	4,137
その他業務費用	18,752	14,232
営業経費	² 45,013	² 44,376
その他経常費用	1,285	2,932
貸倒引当金繰入額	-	363
その他の経常費用	³ 1,285	³ 2,569
経常利益	16,775	15,482
特別利益	14	-
固定資産処分益	14	-
特別損失	169	177
固定資産処分損	103	68
減損損失	66	108
金融商品取引責任準備金繰入額	0	0
税金等調整前当期純利益	16,619	15,304
法人税、住民税及び事業税	4,023	3,953
法人税等調整額	905	507
法人税等合計	4,929	4,461
当期純利益	11,690	10,843
親会社株主に帰属する当期純利益	11,690	10,843

【連結包括利益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2017年 4月 1日 至 2018年 3月 31日)	当連結会計年度 (自 2018年 4月 1日 至 2019年 3月 31日)
当期純利益	11,690	10,843
その他の包括利益	1 9,250	1 10,239
その他有価証券評価差額金	6,933	8,109
繰延ヘッジ損益	370	512
退職給付に係る調整額	1,946	1,617
包括利益	20,940	603
(内訳)		
親会社株主に係る包括利益	20,940	603

【連結株主資本等変動計算書】

前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

(単位：百万円)

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	20,000	10,220	213,945	151	244,014
当期変動額					
剰余金の配当			2,029		2,029
親会社株主に帰属する当期純利益			11,690		11,690
自己株式の取得				2	2
自己株式の処分			0	7	7
土地再評価差額金の取崩			43		43
非支配株主との取引に係る親会社の持分変動		161			161
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)					
当期変動額合計		161	9,704	5	9,870
当期末残高	20,000	10,381	223,649	146	253,885

	その他の包括利益累計額					新株予約権	非支配株主持分	純資産合計
	その他有価証券評価差額金	繰延ヘッジ損益	土地再評価差額金	退職給付に係る調整累計額	その他の包括利益累計額合計			
当期首残高	95,248	4,836	4,213	478	94,146	133	4,466	342,761
当期変動額								
剰余金の配当								2,029
親会社株主に帰属する当期純利益								11,690
自己株式の取得								2
自己株式の処分								7
土地再評価差額金の取崩								43
非支配株主との取引に係る親会社の持分変動								161
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)	6,933	370	43	1,946	9,206	19	4,466	4,759
当期変動額合計	6,933	370	43	1,946	9,206	19	4,466	14,630
当期末残高	102,182	4,466	4,170	1,467	103,353	153		357,391

当連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

(単位：百万円)

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	20,000	10,381	223,649	146	253,885
当期変動額					
剰余金の配当			2,156		2,156
親会社株主に帰属する当期純利益			10,843		10,843
自己株式の取得				0	0
自己株式の処分		0		0	0
土地再評価差額金の取崩			1		1
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)					
当期変動額合計		0	8,687	0	8,687
当期末残高	20,000	10,381	232,337	146	262,572

	その他の包括利益累計額					新株予約権	純資産合計
	その他有価証券評価差額金	繰延ヘッジ損益	土地再評価差額金	退職給付に係る調整累計額	その他の包括利益累計額合計		
当期首残高	102,182	4,466	4,170	1,467	103,353	153	357,391
当期変動額							
剰余金の配当							2,156
親会社株主に帰属する当期純利益							10,843
自己株式の取得							0
自己株式の処分							0
土地再評価差額金の取崩							1
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)	8,109	512	1	1,617	10,240	21	10,219
当期変動額合計	8,109	512	1	1,617	10,240	21	1,532
当期末残高	94,072	4,979	4,168	149	93,112	174	355,859

【連結キャッシュ・フロー計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2017年 4月 1日 至 2018年 3月 31日)	当連結会計年度 (自 2018年 4月 1日 至 2019年 3月 31日)
営業活動によるキャッシュ・フロー		
税金等調整前当期純利益	16,619	15,304
減価償却費	3,225	3,520
減損損失	66	108
貸倒引当金の増減()	3,539	279
賞与引当金の増減額(は減少)	6	11
退職給付に係る資産の増減額(は増加)	1,076	1,103
退職給付に係る負債の増減額(は減少)	241	318
役員退職慰労引当金の増減額(は減少)	5	19
睡眠預金払戻損失引当金の増減()	198	195
ポイント引当金の増減額(は減少)	27	32
偶発損失引当金の増減()	46	42
資金運用収益	52,928	53,381
資金調達費用	5,080	4,686
有価証券関係損益()	1,532	1,736
金銭の信託の運用損益(は運用益)	44	26
為替差損益(は益)	6	5
固定資産処分損益(は益)	88	68
貸出金の純増()減	159,344	336,125
預金の純増減()	170,327	160,493
譲渡性預金の純増減()	8,165	5,315
借入金(劣後特約付借入金を除く)の純増減()	114,723	118,886
預け金(日銀預け金を除く)の純増()減	174	197
コールローン等の純増()減	4,409	57,787
コールマネー等の純増減()	100,000	140,000
債券貸借取引受入担保金の純増減()	199,197	113,181
外国為替(資産)の純増()減	27	753
外国為替(負債)の純増減()	8	231
リース債権及びリース投資資産の純増()減	2,631	2,209
資金運用による収入	55,794	54,902
資金調達による支出	5,833	4,753
その他	35,533	3,044
小計	16,629	266,676
法人税等の支払額	3,733	4,239
営業活動によるキャッシュ・フロー	12,895	262,437

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2017年 4月 1日 至 2018年 3月 31日)	当連結会計年度 (自 2018年 4月 1日 至 2019年 3月 31日)
投資活動によるキャッシュ・フロー		
有価証券の取得による支出	823,864	482,952
有価証券の売却による収入	938,617	293,189
有価証券の償還による収入	164,114	226,734
金銭の信託の増加による支出	-	24
金銭の信託の減少による収入	61	0
有形固定資産の取得による支出	2,438	2,584
有形固定資産の売却による収入	55	37
無形固定資産の取得による支出	2,205	964
その他	119	-
投資活動によるキャッシュ・フロー	274,220	33,436
財務活動によるキャッシュ・フロー		
配当金の支払額	2,029	2,157
非支配株主への配当金の支払額	2	-
自己株式の取得による支出	2	0
自己株式の売却による収入	-	0
連結の範囲の変更を伴わない子会社株式の取得による支出	4,303	-
その他	0	-
財務活動によるキャッシュ・フロー	6,337	2,158
現金及び現金同等物に係る換算差額	6	5
現金及び現金同等物の増減額（は減少）	280,772	293,721
現金及び現金同等物の期首残高	328,084	608,857
現金及び現金同等物の期末残高	¹ 608,857	¹ 902,578

【注記事項】

(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項)

1 連結の範囲に関する事項

(1) 連結子会社 10社

主要な連結子会社名は、「第1 企業の概況 4 関係会社の状況」に記載しているため省略しております。

(2) 非連結子会社 3社

会社名

一般社団法人フロンティア・アセット・ホールディングス

有限会社フロンティア・アセット・コーポレーション

百五6次産業化投資事業有限責任組合

非連結子会社は、その資産、経常収益、当期純損益(持分に見合う額)、利益剰余金(持分に見合う額)及びその他の包括利益累計額(持分に見合う額)等からみて、連結の範囲から除いても企業集団の財政状態及び経営成績に関する合理的な判断を妨げない程度に重要性が乏しいため、連結の範囲から除外しております。

2 持分法の適用に関する事項

(1) 持分法適用の非連結子会社 社

(2) 持分法適用の関連会社 社

(3) 持分法非適用の非連結子会社 3社

会社名

一般社団法人フロンティア・アセット・ホールディングス

有限会社フロンティア・アセット・コーポレーション

百五6次産業化投資事業有限責任組合

持分法非適用の非連結子会社は、当期純損益(持分に見合う額)、利益剰余金(持分に見合う額)及びその他の包括利益累計額(持分に見合う額)等からみて、持分法の対象から除いても連結財務諸表に重要な影響を与えないため、持分法の対象から除いております。

(4) 持分法非適用の関連会社 社

3 連結子会社の事業年度等に関する事項

連結子会社の決算日は連結決算日と一致しております。

4 開示対象特別目的会社に関する事項

該当事項はありません。

5 会計方針に関する事項

(1) 商品有価証券の評価基準及び評価方法

商品有価証券の評価は、時価法(売却原価は主として移動平均法により算定)により行っております。

(2) 有価証券の評価基準及び評価方法

有価証券の評価は、満期保有目的の債券については移動平均法による償却原価法(定額法)、その他有価証券については原則として連結決算日の市場価格等に基づく時価法(売却原価は主として移動平均法により算定)、ただし時価を把握することが極めて困難と認められるものについては移動平均法による原価法により行っております。

なお、その他有価証券の評価差額については、全部純資産直入法により処理しております。

有価証券運用を主目的とする単独運用の金銭の信託において信託財産として運用されている有価証券の評価は、時価法により行っております。

(3) デリバティブ取引の評価基準及び評価方法

デリバティブ取引の評価は、時価法により行っております。

(4) 固定資産の減価償却の方法

有形固定資産(リース資産を除く)

有形固定資産は、定額法を採用しております。また、主な耐用年数は次のとおりであります。

建物 15年~50年

その他 4年~15年

無形固定資産(リース資産を除く)

無形固定資産は、定額法により償却しております。なお、自社利用のソフトウェアについては、当行及び連結子会社で定める利用可能期間(5年)に基づいて償却しております。

リース資産

所有権移転外ファイナンス・リース取引に係るリース資産は、リース期間を耐用年数とした定額法により償却しております。なお、残存価額については、リース契約上に残価保証の取決めがあるものは当該残価保証額とし、それ以外のものは零としております。

(5) 貸倒引当金の計上基準

当行の貸倒引当金は、予め制定した償却・引当基準により、次のとおり計上しております。

破産、特別清算等法的に経営破綻の事実が発生している債務者（以下「破綻先」という。）に係る債権及びそれと同等の状況にある債務者（以下「実質破綻先」という。）に係る債権については、債権額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額を計上しております。また、現在は経営破綻の状況にないが、今後経営破綻に陥る可能性が大きいと認められる債務者（以下「破綻懸念先」という。）に係る債権については、債権額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額のうち、債務者の支払能力を総合的に判断し必要と認める額を計上しております。

上記以外の債権については、過去の一定期間における貸倒実績から算出した貸倒実績率等に基づき計上しております。

すべての債権は、資産の自己査定基準に基づき、営業関連部署が資産査定を実施し、当該部署から独立した資産監査部署が査定結果を監査しております。

連結子会社の貸倒引当金は、予め制定した償却・引当基準により、当行と同じ方法により計上しております。

(6) 賞与引当金の計上基準

連結子会社の賞与引当金は、従業員への賞与の支払いに備えるため、従業員に対する賞与の支給見込額のうち、当連結会計年度に帰属する額を計上しております。

(7) 役員退職慰労引当金の計上基準

連結子会社の役員退職慰労引当金は、役員への退職慰労金の支払いに備えるため、役員に対する退職慰労金の支給見込額のうち、当連結会計年度末までに発生していると認められる額を計上しております。

(8) 睡眠預金払戻損失引当金の計上基準

睡眠預金払戻損失引当金は、利益計上した睡眠預金について預金者への払戻損失に備えるため、過去の払戻実績に基づく将来の払戻損失見込額を計上しております。

(9) ポイント引当金の計上基準

ポイント引当金は、クレジットカード会員に付与したポイントが将来使用された場合の負担に備え、将来使用される見込額を合理的に見積り、必要と認められる額を計上しております。

(10) 偶発損失引当金の計上基準

偶発損失引当金は、他の引当金で引当対象とした事象以外の偶発事象に対し、将来発生する可能性のある損失を見積り、必要と認められる額を計上しております。

(11) 特別法上の引当金の計上基準

特別法上の引当金は、金融商品取引法第46条の5第1項に定める金融商品取引責任準備金であり、証券事故による損失に備えるため、連結子会社が金融商品取引業等に関する内閣府令第175条の規定に定めるところにより算出した額を計上しております。

(12) 退職給付に係る会計処理の方法

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当連結会計年度末までの期間に帰属させる方法については給付算定式基準によっております。また、過去勤務費用及び数理計算上の差異の損益処理方法は次のとおりであります。

過去勤務費用：

その発生時の従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数(3年)による定額法により損益処理

数理計算上の差異：

各連結会計年度の発生時の従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数(10年)による定額法により按分した額を、それぞれ発生翌連結会計年度から損益処理

また、当行の執行役員への退職慰労金の支払いに備えるため、執行役員に対する退職慰労金の支給見込額のうち、当連結会計年度末までに発生していると認められる額を連結貸借対照表上の「退職給付に係る負債」に計上しております。

なお、連結子会社は、退職給付に係る負債及び退職給付費用の計算に、退職給付に係る期末自己都合要支給額を退職給付債務とする方法を用いた簡便法を適用しております。

(13) 外貨建の資産及び負債の本邦通貨への換算基準

当行及び連結子会社の外貨建資産・負債は、連結決算日の為替相場による円換算額を付しております。

(14) リース取引の処理方法

(貸手側)

リース取引開始日が「リース取引に関する会計基準」（企業会計基準第13号2007年3月30日）適用初年度開始前の所有権移転外ファイナンス・リース取引については、「リース取引に関する会計基準の適用指針」（企業会計基準適用指針第16号2007年3月30日）第81項に基づき、同会計基準適用初年度の前連結会計年度末における固定資産の適正な帳簿価額（減価償却累計額控除後）をリース投資資産の期首の価額として計上しております。なお、同適用指針第80項を適用した場合の税金等調整前当期純利益と同適用指針第81項を適用した場合の税金等調整前当期純利益との差額は軽微であります。

(15) 収益及び費用の計上基準

ファイナンス・リース取引に係る収益の計上基準

リース料受取時に売上高と売上原価を計上する方法によっております。

(16) 重要なヘッジ会計の方法

金利リスク・ヘッジ

当行の金融資産・負債から生じる金利リスクに対するヘッジ会計の方法は、「銀行業における金融商品会計基準適用に関する会計上及び監査上の取扱い」（日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第24号2002年2月13日）に規定する繰延ヘッジによっております。ヘッジ有効性評価の方法については、相場変動を相殺するヘッジについて、ヘッジ対象となる預金・貸出金等とヘッジ手段である金利スワップ取引等を一定の残存期間毎にグルーピングのうえ特定し評価しております。また、キャッシュ・フローを固定するヘッジについては、ヘッジ対象とヘッジ手段の金利変動要素の相関関係の検証により有効性の評価をしております。

また、一部の資産・負債については、包括ヘッジ、あるいは金利スワップの特例処理を行っております。

連結子会社のヘッジ会計の方法は、当行に準じた方法により行っております。

為替変動リスク・ヘッジ

当行の外貨建金融資産・負債から生じる為替変動リスクに対するヘッジ会計の方法は、「銀行業における外貨建取引等の会計処理に関する会計上及び監査上の取扱い」（日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第25号2002年7月29日）に規定する繰延ヘッジによっております。ヘッジ有効性評価の方法については、外貨建金銭債権債務等の為替変動リスクを減殺する目的で行う通貨スワップ取引及び為替スワップ取引等をヘッジ手段とし、ヘッジ対象である外貨建金銭債権債務等に見合うヘッジ手段の外貨ポジション相当額が存在することを確認することによりヘッジの有効性を評価しております。

(17) 連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲

連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲は、連結貸借対照表上の「現金預け金」のうち現金及び日本銀行への預け金であります。

(18) 消費税等の会計処理

当行及び連結子会社の消費税及び地方消費税（以下「消費税等」という。）の会計処理は、税抜方式によっております。

ただし、有形固定資産等に係る控除対象外消費税等は当連結会計年度の費用に計上しております。

(未適用の会計基準等)

- ・「収益認識に関する会計基準」（企業会計基準第29号2018年3月30日）
- ・「収益認識に関する会計基準の適用指針」（企業会計基準適用指針第30号2018年3月30日）

(1) 概要

収益認識に関する包括的な会計基準であります。収益は、次の5つのステップを適用し認識されます。

ステップ1：顧客との契約を識別する。

ステップ2：契約における履行義務を識別する。

ステップ3：取引価格を算定する。

ステップ4：契約における履行義務に取引価格を配分する。

ステップ5：履行義務を充足した時に又は充足するにつれて収益を認識する。

(2) 適用予定日

2022年3月期の期首より適用予定であります。

(3) 当該会計基準等の適用による影響

影響額は、当連結財務諸表の作成時において評価中であります。

(表示方法の変更)

(連結損益計算書関係)

従来、当行が契約する団体信用生命保険等の受取配当金は、主として「その他の経常収益」に計上してまいりましたが、保険料の支払及び配当金の受取に係る契約の変更が生じたこと、並びに受取配当金の額が増加傾向にあることを契機に計上方法の見直し検討を行いました。支払保険料と受取配当金の関係を調査した結果、支払保険料から受取配当金を控除した額を費用として計上することが、本来負担すべき保険料を表示するという観点からは、より適切であると判断し、当連結会計年度より、主要な受取配当金を「役務取引等費用」及び「営業経費」に計上してまいります。

この表示方法の変更を反映させるため、前連結会計年度の連結財務諸表の組替えを行っております。この結果、前連結会計年度の連結損益計算書に表示してまいりました「その他の経常収益」6,708百万円、「役務取引等費用」4,487百万円及び「営業経費」45,041百万円は、「その他の経常収益」5,897百万円、「役務取引等費用」3,705百万円及び「営業経費」45,013百万円と表示してまいります。

(連結貸借対照表関係)

1 非連結子会社の出資金の総額

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
出資金	31百万円	31百万円

2 無担保の消費貸借契約(債券貸借取引)により貸し付けている有価証券が、「有価証券」中の国債に含まれておりますが、その金額は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
	62,661百万円	73,068百万円

使用貸借又は賃貸借契約により貸し付けている有価証券は該当ありません。

3 貸出金等のうち破綻先債権額及び延滞債権額は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
破綻先債権額	807百万円	2,162百万円
延滞債権額	45,403百万円	43,649百万円

なお、破綻先債権とは、元本又は利息の支払の遅延が相当期間継続していることその他の事由により元本又は利息の取立て又は弁済の見込みがないものとして未収利息を計上しなかった貸出金等(貸倒償却を行った部分を除く。以下「未収利息不計上貸出金等」という。)のうち、法人税法施行令(1965年政令第97号)第96条第1項第3号イからホまでに掲げる事由又は同項第4号に規定する事由が生じている貸出金等であります。

また、延滞債権とは、未収利息不計上貸出金等であって、破綻先債権及び債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として利息の支払を猶予した貸出金等以外の貸出金等であります。

4 貸出金等のうち3カ月以上延滞債権額は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
3カ月以上延滞債権額	13百万円	140百万円

なお、3カ月以上延滞債権とは、元本又は利息の支払が、約定支払日の翌日から3月以上遅延している貸出金等で破綻先債権及び延滞債権に該当しないものであります。

5 貸出金等のうち貸出条件緩和債権額は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
貸出条件緩和債権額	6,710百万円	6,741百万円

なお、貸出条件緩和債権とは、債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として、金利の減免、利息の支払猶予、元本の返済猶予、債権放棄その他の債務者に有利となる取決めを行った貸出金等で破綻先債権、延滞債権及び3カ月以上延滞債権に該当しないものであります。

6 破綻先債権額、延滞債権額、3カ月以上延滞債権額及び貸出条件緩和債権額の合計額は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
合計額	52,934百万円	52,694百万円

なお、上記3から6に掲げた債権額は、貸倒引当金控除前の金額であります。

7 手形割引は、「銀行業における金融商品会計基準適用に関する会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第24号2002年2月13日)に基づき金融取引として処理しております。これにより受け入れた商業手形及び買入外国為替等は、売却又は(再)担保という方法で自由に処分できる権利を有しておりますが、その額面金額は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
	7,454百万円	8,267百万円

8 担保に供している資産は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
担保に供している資産		
有価証券	342,016百万円	516,213百万円
担保資産に対応する債務		
預金	20,739百万円	22,614百万円
債券貸借取引受入担保金	75,514百万円	188,696百万円
借入金	176,143百万円	296,109百万円

上記のほか、為替決済等の取引の担保等として、次のものを差し入れております。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
有価証券	4,945百万円	1,034百万円
現金預け金	200百万円	200百万円

また、その他資産には、保証金、中央清算機関差入証拠金及び金融商品等差入担保金が含まれておりますが、その金額は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
保証金	1,259百万円	1,388百万円
中央清算機関差入証拠金	24,400百万円	25,000百万円
金融商品等差入担保金	7,222百万円	5,809百万円

9 当座貸越契約及び貸付金に係るコミットメントライン契約は、顧客からの融資実行の申し出を受けた場合に、契約上規定された条件について違反がない限り、一定の限度額まで資金を貸し付けることを約する契約であります。これらの契約に係る融資未実行残高は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
融資未実行残高	1,216,915百万円	1,257,328百万円
うち原契約期間が1年以内のもの又は 任意の時期に無条件で取消可能なもの	1,178,944百万円	1,210,396百万円

なお、これらの契約の多くは、融資実行されずに終了するものであるため、融資未実行残高そのものが必ずしも当行及び連結子会社の将来のキャッシュ・フローに影響を与えるものではありません。これらの契約の多くには、金融情勢の変化、債権の保全及びその他相当の事由があるときは、当行及び連結子会社が実行申し込みを受けた融資の拒絶又は契約極度額の減額をすることができる旨の条項が付けられております。また、契約時において必要に応じて預金・不動産・有価証券等の担保を徴求するほか、契約後も定期的に予め定めている行内手続きに基づき顧客の業況等を把握し、必要に応じて契約の見直し、与信保全上の措置等を講じております。

- 10 土地の再評価に関する法律(1998年3月31日公布法律第34号)に基づき、当行の事業用の土地の再評価を行い、評価差額については、当該評価差額に係る税金相当額を「再評価に係る繰延税金負債」として負債の部に計上し、これを控除した金額を「土地再評価差額金」として純資産の部に計上しております。

再評価を行った年月日

1998年3月31日

同法律第3条第3項に定める再評価の方法

土地の再評価に関する法律施行令(1998年3月31日公布政令第119号)第2条第4号に定める地価税法(1991年法律第69号)第16条に規定する地価税の課税価格の計算の基礎となる土地の価額を算定するために国税庁長官が定めて公表した方法により算定した価額に基づいて、奥行価格補正、不整形地補正等の合理的な調整を行って算出しております。

同法律第10条に定める再評価を行った事業用の土地の連結会計年度末における時価の合計額と当該事業用の土地の再評価後の帳簿価額の合計額との差額

前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
5,388百万円	4,839百万円

- 11 有形固定資産の減価償却累計額

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
減価償却累計額	34,138百万円	35,670百万円

- 12 有形固定資産の圧縮記帳額

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
圧縮記帳額	3,924百万円	3,940百万円
(当該連結会計年度の圧縮記帳額)	(0百万円)	(15百万円)

- 13 「有価証券」中の社債のうち、有価証券の私募(金融商品取引法第2条第3項)による社債に対する保証債務の額

前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
9,281百万円	10,963百万円

(連結損益計算書関係)

1 「その他の経常収益」には、次のものを含んでおります。

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
株式等売却益	4,977百万円	3,273百万円

2 「営業経費」には、次のものを含んでおります。

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
給料・手当	21,080百万円	21,116百万円

3 「その他の経常費用」には、次のものを含んでおります。

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
株式等売却損	655百万円	1,224百万円
株式等償却	3百万円	383百万円

(連結包括利益計算書関係)

1 その他の包括利益に係る組替調整額及び税効果額

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
その他有価証券評価差額金		
当期発生額	13,116	7,769
組替調整額	3,159	3,401
税効果調整前	9,957	11,171
税効果額	3,023	3,061
その他有価証券評価差額金	6,933	8,109
繰延ヘッジ損益		
当期発生額	1,817	3,018
組替調整額	2,347	2,284
税効果調整前	530	734
税効果額	160	221
繰延ヘッジ損益	370	512
退職給付に係る調整額		
当期発生額	1,633	2,408
組替調整額	1,155	92
税効果調整前	2,788	2,316
税効果額	841	699
退職給付に係る調整額	1,946	1,617
その他の包括利益合計	9,250	10,239

(連結株主資本等変動計算書関係)

前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

1 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

(単位：千株)

	当連結会計年度 期首株式数	当連結会計年度 増加株式数	当連結会計年度 減少株式数	当連結会計年度末 株式数	摘要
発行済株式					
普通株式	254,119			254,119	
合計	254,119			254,119	
自己株式					
普通株式	402	5	20	386	(注) 1, 2
合計	402	5	20	386	

(注) 1 普通株式の自己株式の株式数の増加5千株は、単元未満株式の買取りによる増加であります。
2 普通株式の自己株式の株式数の減少20千株は、ストック・オプションの権利行使による減少であります。

2 新株予約権及び自己新株予約権に関する事項

区分	新株予約権の 内訳	新株予約権の 目的となる株 式の種類	新株予約権の目的となる株式の数(株)			当連結会計 年度末残高 (百万円)	摘要
			当連結会計 年度期首	当連結会計年度 増加	当連結会計 年度末 減少		
当行	ストック・オブ ションとしての 新株予約権					153	
合計						153	

3 配当に関する事項

(1) 当連結会計年度中の配当金支払額

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり配当額 (円)	基準日	効力発生日
2017年6月23日 定時株主総会	普通株式	1,014	4.00	2017年3月31日	2017年6月26日
2017年11月10日 取締役会	普通株式	1,014	4.00	2017年9月30日	2017年12月8日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が当連結会計年度の末日後となるもの

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	配当の原資	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
2018年6月21日 定時株主総会	普通株式	1,014	その他 利益剰余金	4.00	2018年3月31日	2018年6月22日

当連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

1 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

(単位：千株)

	当連結会計年度 期首株式数	当連結会計年度 増加株式数	当連結会計年度 減少株式数	当連結会計年度末 株式数	摘要
発行済株式					
普通株式	254,119			254,119	
合計	254,119			254,119	
自己株式					
普通株式	386	1	0	387	(注)1, 2
合計	386	1	0	387	

(注)1 普通株式の自己株式の株式数の増加1千株は、単元未満株式の買取りによる増加であります。

2 普通株式の自己株式の株式数の減少0千株は、単元未満株式の買増請求による減少であります。

2 新株予約権及び自己新株予約権に関する事項

区分	新株予約権の 内訳	新株予約権の 目的となる株 式の種類	新株予約権の目的となる株式の数(株)			当連結会計 年度末残高 (百万円)	摘要
			当連結会計 年度期首	当連結会計年度			
				増加	減少		
当行	ストック・オブ ションとしての 新株予約権					174	
合計						174	

3 配当に関する事項

(1) 当連結会計年度中の配当金支払額

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり配当額 (円)	基準日	効力発生日
2018年6月21日 定時株主総会	普通株式	1,014	4.00	2018年3月31日	2018年6月22日
2018年11月9日 取締役会	普通株式	1,141	4.50	2018年9月30日	2018年12月10日

(注) 2018年11月9日取締役会決議の1株当たり配当額のうち50銭は創立140周年記念配当であります。

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が当連結会計年度の末日後となるもの

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	配当の原資	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
2019年6月21日 定時株主総会	普通株式	1,141	その他 利益剰余金	4.50	2019年3月31日	2019年6月24日

(連結キャッシュ・フロー計算書関係)

1 現金及び現金同等物の期末残高と連結貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
現金預け金勘定	611,452百万円	904,975百万円
日銀預け金を除く預け金	2,595百万円	2,397百万円
現金及び現金同等物	608,857百万円	902,578百万円

(リース取引関係)

(借手側)

オペレーティング・リース取引

オペレーティング・リース取引のうち解約不能のものに係る未経過リース料

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
1年内	301	462
1年超	1,063	996
合計	1,365	1,458

(貸手側)

1 ファイナンス・リース取引

(1) リース投資資産の内訳

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
リース料債権部分	14,783	16,759
見積残存価額部分	382	508
受取利息相当額()	1,066	1,218
合計	14,099	16,049

(2) リース債権及びリース投資資産に係るリース料債権部分の回収予定額

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2018年3月31日)		当連結会計年度 (2019年3月31日)	
	リース債権	リース投資資産	リース債権	リース投資資産
1年以内	1,153	4,344	1,145	4,716
1年超2年以内	861	3,529	1,434	3,903
2年超3年以内	1,153	2,713	757	3,001
3年超4年以内	474	1,833	564	2,282
4年超5年以内	291	1,147	267	1,552
5年超	1,028	1,213	1,006	1,303
合計	4,963	14,783	5,176	16,759

2 オペレーティング・リース取引

オペレーティング・リース取引のうち解約不能のものに係る未経過リース料

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
1年内	520	575
1年超	688	899
合計	1,208	1,475

3 転リース取引

利息相当額控除前の金額で連結貸借対照表に計上している金額

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
リース投資資産	49	40
リース債務	49	40

(金融商品関係)

1 金融商品の状況に関する事項

(1) 金融商品に対する取組方針

当行グループは、銀行業務を中心として金融サービスに係る事業を行っております。当行は、主に利息収入による収益獲得を目的として貸出金、有価証券及び買入金銭債権等による運用を行っているほか、一定の限度を設け、価格変動による収益獲得を目的として有価証券及び金銭の信託等による運用を行っております。また、資産の流動性を高めるため、現金預け金を保有し、コールローン等の短期市場における資金運用等を行っております。これらの運用原資は、そのほとんどを預金及び譲渡性預金により調達しておりますが、A L M（資産・負債の総合管理）の観点から、必要に応じてコールマネー及び借入金等の調達手段も利用しております。

また、当行は、顧客のリスク回避（ヘッジ）ニーズに応えるため、あるいは当行自身のA L Mに活用するためにデリバティブ取引を利用しております。その他、一定の限度を設け、売買等による収益獲得を目的としてデリバティブ取引を利用しております。

なお、当行の連結子会社には、金融商品取引業務を行っている子会社、クレジットカード業務を行っている子会社及びリース業務を行っている子会社があり、各社の業務内容に応じてリース債権及びリース投資資産、割賦債権、会員未収金、現金預け金等の金融資産を保有しており、また一部の連結子会社では借入金による調達を行っております。

(2) 金融商品の内容及びそのリスク

当行グループが保有する金融資産は、主として当行営業地域内の法人及び個人顧客等に対する貸出金、国内外の債券及び株式等の有価証券等であります。債券については、国債、地方債のほか、政府関係機関債、信用力が高い金融機関、事業法人及び外国政府等が発行する各種債券、金銭債権・不動産等を裏付資産とする証券化商品等を保有しております。また、買入金銭債権として、有価証券に準じる信託受益権、一括ファクタリングシステムに係る業務に伴い顧客から買取った金銭債権等を保有しております。これらに加え、日本銀行等に対する預け金、金融機関に対するコールローン等、連結子会社の事業に伴うリース債権及びリース投資資産等を保有しております。これらは貸出先又は発行体等の信用リスクに晒されており、またそのうち固定金利のものは金利変動により実質価値が変動するリスクに、市場価格がある有価証券等は市場価格の変動リスクに晒されております。

金融負債の大半を占める預金及び譲渡性預金は、そのほとんどが当行営業地域内の顧客から受け入れたものであり、満期の定めのない流動性預金及び残存期間1年以内の固定性預金等、期間が短いものが高い割合を占めております。コールマネー等の短期調達手段は、主に円貨及び外貨の資金ポジションの調整等を目的としたものであります。

金融資産及び金融負債を総合的に捉えたときに、資産と負債の間に金利更改期間、資金決済期間又は取引通貨等に差異があることに起因し、金利あるいは為替相場等の変動により、資産・負債の実質価値又は資金利鞘に変動が生じ、損失を被るリスクがあります。また、資産の流動性が短期的に著しく損なわれる事態が発生した場合には、これを補うために費用負担を伴う追加資金調達あるいは意図せざる価格での資産売却等を余儀なくされるリスクがあります。

デリバティブ取引については、金利関連では主に金利スワップ取引、通貨関連では主に通貨スワップ取引及び為替予約取引を利用しております。これらは主に当行自身が市場リスクを回避（ヘッジ）する目的で、あるいは対顧客取引及びそのカバー取引等として利用しており、デリバティブ取引全体の大半を占めております。その他に、株式先物取引、債券先物取引、債券店頭オプション取引及びクレジットデリバティブ取引等について、売買等による収益獲得又はリスクのヘッジを目的として利用しております。取引に伴うリスクについては、大部分がヘッジ目的の取引又はカバー付の取引であること、契約の相手方はいずれも信用力の高い金融機関及び事業法人等であることから、市場リスク及び信用リスクはともに限定されております。なお、当行ではレバレッジ効果の著しい取引（対象物の価格変動に対して時価の変動率が大きい特殊な取引）は行っておりません。

当連結会計年度にヘッジ会計を適用したヘッジ対象は債券、貸出金、コールローン及び借入金であり、ヘッジ手段は金利スワップ取引、通貨スワップ取引及び為替スワップ取引であります。ヘッジ方針については、当行では内部規定に基づきヘッジ対象、ヘッジ手段、ヘッジ比率を半期ごとに決定のうえ毎月見直しの必要性を判断しており、連結子会社でもその都度決定しております。ヘッジの有効性評価については、「金融商品会計に関する実務指針」（日本公認会計士協会会計制度委員会報告第14号）等に定められた方法により確認しております。

(3) 金融商品に係るリスク管理体制

信用リスクの管理

当行グループは、信用リスクの顕在化に伴う多額の損失を回避し、信用リスクを自己資本対比で許容可能な範囲内にコントロールすることにより当行グループ全体の資産の健全性を維持することを基本方針として、諸規定及び組織体制を整備し、信用リスクを管理しております。

当行では、信用リスクを含めた各種リスクの状況は、「ALMリスク管理委員会」において、毎月、総合的に把握・評価・監視し、リスク管理に関する方針や対応策を検討する体制としております。また、「統合リスク管理」の枠組みのもと、自己資本比率の算定に含まれない「与信集中リスク」を含め、信用リスクをVaR (Value at Risk: 予想最大損失額) により計量化しており、リスク量を限度枠に照らして管理すること等を通じて、適正なリスクテイクと安定的な収益の確保に努めております。

信用リスクの管理にあたっては、貸出金については営業推進部門から独立した貸出審査部門が厳正に審査・管理を行い、市場取引については市場リスク管理部署（ミドルオフィス）が日々管理を行う体制としております。また、他部門から独立したリスク管理部門に信用リスク管理部署を設置し、相互牽制機能を確保しております。

また、貸出先や個別案件の信用リスクを統一的な尺度により評価する信用格付制度を整備し、信用度を勘案した融資取組方針の策定や貸出金利の設定に活用しております。与信ポートフォリオの運営にあたっては、融資の基本方針を「百五銀行クレジットポリシー」に定め、特定の企業や企業グループに貸出が集中しないよう管理するとともに、業種別・地域別・信用格付別・与信額階層別などの分布状況を把握し、与信の分散に努めております。

なお、業況が悪化するなどの問題先に対しては、経営状況等を適切に把握・管理し、必要に応じて再建計画の策定の指導や整理・回収を行っております。

連結子会社についても、諸規定を整備して各社において信用リスクを管理しているほか、当行の信用リスク管理部署においてグループ全体の信用リスクを管理しております。また、各社に設置した「リスク管理委員会」の運営を通じ、信用リスクを含めた各種リスクの状況を総合的に把握・評価・監視しております。

市場リスクの管理

当行グループは、市場変動が経営に与える影響を的確に把握・評価するとともに、適切なポートフォリオ運営を行い、経営体力に照らして適正な水準にリスクを制御しつつ、収益を安定的に確保することを基本方針として、諸規定及び組織体制を整備し、市場リスクを管理しております。

当行では、市場リスクを含めた各種リスクの状況は、「ALMリスク管理委員会」において、毎月、総合的に把握・評価・監視し、リスク管理に関する方針や対応策を検討する体制としております。また、「統合リスク管理」の枠組みのもと、自己資本比率の算定に含まれない「銀行勘定の金利リスク」を含め、各種の市場リスクをVaR等により計量化しており、リスク量をそれぞれのリスクに設定した限度枠に照らして管理すること等を通じて、適正なリスクテイクと安定的な収益の確保に努めております。

市場取引に係る市場リスクについては、市場取引部署（フロントオフィス）と市場事務管理部署（バックオフィス）を明確に分離しているほか、他部門から独立したリスク管理部門に市場リスク管理部署（ミドルオフィス）を設置し、相互牽制機能を確保しております。また、取引の状況、時価及びリスク量等を日次で計測・管理しているほか、市場情報や価格変動等を監視し、状況に応じて適時に管理態勢を強化するなど、不測の損失を被るリスクの低減を図っております。これに加え、売買等による収益獲得を目的とした取引については、ポジション限度枠、ロスカットルール及び損失累計限度額等を設けるなど、投資対象の特性に応じた管理態勢を整備し、そのもとで厳格な管理を行うことを通じ、損失を被るリスクを限定しております。

また、預貸金等を含めた当行全体の金融資産及び金融負債に関する市場リスクについて、ALMの観点から管理しております。なお、外貨建外債等による運用、外貨預金等による調達等の外貨建商品に係る為替相場の変動リスクは、コールマネー等による調達のほか、通貨関連のデリバティブ取引等を利用し、通貨ごとの運用額と調達額をほぼ均衡させることにより低減を図っております。

連結子会社についても、諸規定を整備して各社において市場リスクを管理しているほか、当行の市場リスク管理部署においてグループ全体の市場リスクを管理しております。また、各社に設置した「リスク管理委員会」の運営を通じ、市場リスクを含めた各種リスクの状況を総合的に把握・評価・監視しております。

(市場リスクに係る定量的情報)

(ア) 金利リスク

当行グループにおいて、金利リスクの影響を受ける主たる金融商品は、有価証券のうち債券、貸出金、預金、譲渡性預金、借入金、デリバティブ取引のうちの金利スワップ取引であり、これらの金融資産及び金融負債についての金利リスクをヒストリカル・シミュレーション法（保有期間3ヶ月、信頼区間99%、観測期間5年間）で算定したVaRにより管理しております。

2019年3月31日現在で当行の金利リスク量（損失額の推計値）は、全体で8,926百万円（前連結会計年度末は8,821百万円）であります。なお、預金のうち満期のない流動性預金については、内部モデルによりその長期滞留性を考慮して適切に推計した期日を用いてVaRを算定しております。

なお、連結子会社の金利リスクは、影響を受ける金融商品残高が僅少であり重要性が乏しいことから、算定対象外としております。

(イ) 株価リスク

当行グループにおいて、株価リスクの影響を受ける主たる金融商品は、有価証券のうち上場株式であり、これらの金融資産についての株価リスクを、純投資目的の投資株式についてはヒストリカル・シミュレーション法（保有期間3ヶ月、信頼区間99%、観測期間5年間）で算定したVaRにより、純投資目的以外の投資株式についてはその投資目的に鑑み、ヒストリカル・シミュレーション法（保有期間6ヶ月、信頼区間99%、観測期間5年間）で算定したVaR相当の損失発生時に生じる評価損額により、管理しております。

2019年3月31日現在で当行の株価リスク量（損失額の推計値）は、全体で1,767百万円（前連結会計年度末は2,652百万円）であります。

なお、連結子会社の株価リスクは、影響を受ける金融商品残高が僅少であり重要性が乏しいことから、算定対象外としております。

(ウ) その他の価格変動リスク

当行グループにおいて、その他の価格変動リスクの影響を受ける主たる金融商品は、有価証券のうち投資信託であり、これらの金融資産についての価格変動リスクを、ヒストリカル・シミュレーション法（保有期間3ヶ月、信頼区間99%、観測期間5年間）で算定したVaRにより管理しております。

2019年3月31日現在で当行のその他の価格変動リスク量（損失額の推計値）は、全体で22,684百万円（前連結会計年度末は23,630百万円）であります。

(エ) VaRの妥当性について

当行では、モデルが算出するVaRと現在価値の変動を比較するバックテストを実行して実施しております。実施したバックテストの結果、使用する計測モデルは十分な精度により市場リスクを捕捉しているものと考えております。ただし、VaRは過去の相場変動をベースに統計的に算出した一定の発生確率での市場リスク量を計測しており、通常では考えられないほど市場環境が激変する状況下におけるリスクは捕捉できない場合があります。

流動性リスクの管理

当行グループは、運用・調達状況及び市場動向を的確に把握し、安定的な資金繰りを行うとともに、流動性危機にも適切に対応し得る態勢を整備することを基本方針として、諸規定及び組織体制を整備し、流動性リスクを管理しております。

当行では、流動性リスクを含めた各種リスクの状況は、「ALMリスク管理委員会」において、毎月、総合的に把握・評価・監視し、リスク管理に関する方針や対応策を検討する体制としております。

資金繰りについては、円貨・外貨のそれぞれについて日々の状況及びその見通しを適切に把握・管理しております。また、市場からの調達可能額を定期的に把握するとともに、それに基づいた調達上限額を設け適宜見直しを行うなど、不測の事態への対応策をあらかじめ定めることにより、流動性リスクに備えております。

(4) 金融商品の時価等に関する事項についての補足説明

金融商品の時価には、市場価格に基づく価額のほか、市場価格がない場合には合理的に算定された価額が含まれております。当該価額の算定においては一定の前提条件等を採用しているため、異なる前提条件等によった場合、当該価額が異なることもあります。

2 金融商品の時価等に関する事項

連結貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額は、次のとおりであります。なお、時価を把握することが極めて困難と認められる非上場株式等は、次表には含めておりません（（注2）参照）。また、リース債権及びリース投資資産、当座貸越契約及び貸出コミットメント、債務保証契約（支払承諾見返及び支払承諾）については、重要性が乏しいことから、記載を省略しております。

前連結会計年度(2018年3月31日)

(単位：百万円)

	連結貸借対照表 計上額	時価	差額
(1) 現金預け金	611,452	611,452	
(2) コールローン及び買入手形	81,366	81,366	
(3) 買入金銭債権(*1)	10,938	10,938	
(4) 商品有価証券			
売買目的有価証券	18	18	
(5) 金銭の信託	2,000	2,000	
(6) 有価証券			
其他有価証券	1,772,896	1,772,896	
(7) 貸出金	3,095,211		
貸倒引当金(*1)	14,536		
	3,080,674	3,093,398	12,723
(8) 外国為替(*1)	1,731	1,731	
資産計	5,561,080	5,573,803	12,723
(1) 預金	4,716,096	4,715,939	157
(2) 譲渡性預金	181,500	181,500	0
(3) コールマネー及び売渡手形	100,000	100,000	
(4) 債券貸借取引受入担保金	75,514	75,514	
(5) 借入金	197,427	196,926	501
(6) 外国為替	32	32	
負債計	5,270,572	5,269,913	659
デリバティブ取引(*2)			
ヘッジ会計が適用されていないもの	5,624	5,624	
ヘッジ会計が適用されているもの	(5,323)	(5,323)	
デリバティブ取引計	300	300	

(*1) 貸出金に対応する一般貸倒引当金及び個別貸倒引当金を控除しております。なお、買入金銭債権、外国為替に対する貸倒引当金については、重要性が乏しいため、連結貸借対照表計上額から直接減額しております。

(*2) その他資産・負債に計上しているデリバティブ取引を一括して表示しております。

デリバティブ取引によって生じた正味の債権・債務は純額で表示しており、合計で正味の債務となる項目については、()で表示しております。

金利スワップの特例処理を行っているデリバティブ取引の時価は、ヘッジ対象である貸出金の時価に含めて記載しております。

当連結会計年度(2019年3月31日)

(単位：百万円)

	連結貸借対照表 計上額	時価	差額
(1) 現金預け金	904,975	904,975	
(2) コールローン及び買入手形	20,429	20,429	
(3) 買入金銭債権(*1)	12,803	12,803	
(4) 商品有価証券			
売買目的有価証券	23	23	
(5) 金銭の信託	1,997	1,997	
(6) 有価証券			
その他有価証券	1,724,933	1,724,933	
(7) 貸出金	3,431,337		
貸倒引当金(*1)	14,313		
	3,417,023	3,435,552	18,528
(8) 外国為替(*1)	2,484	2,484	
資産計	6,084,672	6,103,201	18,528
(1) 預金	4,876,589	4,876,472	117
(2) 譲渡性預金	176,185	176,185	
(3) コールマネー及び売渡手形	240,000	240,000	
(4) 債券貸借取引受入担保金	188,696	188,696	
(5) 借入金	316,314	316,886	571
(6) 外国為替	263	263	
負債計	5,798,049	5,798,504	454
デリバティブ取引(*2)			
ヘッジ会計が適用されていないもの	3,614	3,614	
ヘッジ会計が適用されているもの	(7,111)	(7,111)	
デリバティブ取引計	(3,496)	(3,496)	

(*1) 貸出金に対応する一般貸倒引当金及び個別貸倒引当金を控除しております。なお、買入金銭債権、外国為替に対する貸倒引当金については、重要性が乏しいため、連結貸借対照表計上額から直接減額しております。

(*2) その他資産・負債に計上しているデリバティブ取引を一括して表示しております。

デリバティブ取引によって生じた正味の債権・債務は純額で表示しており、合計で正味の債務となる項目については、()で表示しております。

金利スワップの特例処理を行っているデリバティブ取引の時価は、ヘッジ対象である貸出金の時価に含めて記載しております。

(注1) 金融商品の時価の算定方法

資 産

(1) 現金預け金

当行が保有する預け金のうち、満期のない預け金については、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。満期のある預け金及び連結子会社が保有する預け金については、金額が僅少であり重要性が乏しいことから、帳簿価額を時価としております。

(2) コールローン及び買入手形

約定期間が短期間（1年以内）であり、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。

(3) 買入金銭債権

買入金銭債権のうち、信託受益権については、取引金融機関から提示された価格によっております。一括ファクタリングシステムに係る業務に伴い顧客から買取った金銭債権については、短期間で決済されるため、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。

(4) 商品有価証券

ディーリング業務のために保有している債券等の有価証券については、取引所の価格又は取引金融機関から提示された価格等によっております。

(5) 金銭の信託

有価証券運用を主目的とする単独運用の金銭の信託において信託財産として運用されている金融商品については、株式は取引所の価格、債券は取引所の価格又は取引金融機関から提示された価格等によっており、コールローン等は帳簿価額を時価としております。

なお、保有目的ごとの金銭の信託に関する注記事項については「(金銭の信託関係)」に記載しております。

(6) 有価証券

株式（時価を把握することが極めて困難と認められる非上場株式を除く）は、取引所の価格によっております。

債券は、取引所の価格又は取引金融機関から提示された価格等によっております。このうち自行保証付私募債等は、事業性貸出に準じて、将来の元利金及び受取保証料の合計額を、同様の新規貸出を行った場合に想定される利率で割り引くことにより時価を算定しております。また、破綻先、実質破綻先及び破綻懸念先が発行したものについても、事業性貸出における取扱と同様に、貸倒見積高に準じて実質価値の減価を見積り、時価に反映しております。

投資信託は、公表されている基準価格によっております。

なお、保有目的ごとの有価証券に関する注記事項については、「(有価証券関係)」に記載しております。

(7) 貸出金

当行の貸出金（クレジットデリバティブを内包する貸出金を除く）のうち、変動金利によるものは、短期間で市場金利を反映するため、貸出先の信用状態が実行後大きく異ならない限り、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。

固定金利によるもののうち、消費者ローン及び地方公共団体等を対象とする貸出商品は、商品の種類及び期間に基づく区分ごとに、将来の元利金の合計額を同様の新規貸出を行った場合に想定される利率で割り引いて時価を算定しております。事業者向け貸出等は、内部格付及び期間に基づく区分ごとに、将来の元利金の合計額を同様の新規貸出を行った場合に想定される利率で割り引いて時価を算定しております。なお、約定期間又は金利満期までの残存期間が短期間（1年以内）のものは、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。

なお、クレジットデリバティブを内包する貸出金の時価は、取引金融機関から提示された価格等によっております。

また、破綻先、実質破綻先及び破綻懸念先に対する債権等については、担保及び保証による回収見込額等に基づいて貸倒見積高を算定しているため、時価は連結決算日における連結貸借対照表上の債権等計上額から貸倒引当金計上額を控除した金額に近似しており、当該価額を時価としております。

なお、連結子会社の貸出金は、重要性が乏しいことから、帳簿価額を時価としております。

(8) 外国為替

外国為替は、他の銀行に対する外貨預け金（外国他店預け）、外国為替関連の短期貸付金（外国他店貸）、輸出手形・旅行小切手等（買入外国為替）、輸入手形による手形貸付等（取立外国為替）であります。これらは、満期のない預け金、又は約定期間が短期間（1年以内）であり、それぞれ時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。

負債

(1) 預金、及び (2) 譲渡性預金

要求払預金については、連結決算日に要求された場合の支払額（帳簿価額）を時価とみなしております。また、定期預金の時価は、一定の期間ごとに区分して、将来の元利金の合計額を割り引いて現在価値を算定しております。その割引率は、新規に預金を受け入れる際に使用する利率を用いております。なお、預入期間又は金利満期までの残存期間が短期間（１年以内）のものは、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。

(3) コールマネー及び売渡手形、及び (4) 債券貸借取引受入担保金

これらは、約定期間が短期間（１年以内）であり、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。

(5) 借入金

借入金は、一定の期間ごとに区分して、将来の元利金の合計額を割り引いて現在価値を算定しております。その割引率は、同様の新規借入を市場で行った場合に想定される利率を用いております。なお、約定期間が短期間（１年以内）のものは、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。連結子会社の借入金は、重要性が乏しいことから、帳簿価額を時価としております。

(6) 外国為替

外国為替は、他の銀行から受け入れた外貨預り金及び非居住者円預り金（外国他店預り）、外国為替関連の短期借入金（外国他店借）、顧客に売り渡した外国為替に係る未払債務（売渡外国為替）並びに顧客に仕向けられた外国為替に係る未払債務（未払外国為替）であります。これらは、満期のない預り金又は約定期間が短期間（１年以内）であり、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。

デリバティブ取引

デリバティブ取引については、「(デリバティブ取引関係)」に記載しております。

(注2) 時価を把握することが極めて困難と認められる金融商品の連結貸借対照表計上額は次のとおりであり、金融商品の時価情報の「資産(6) 有価証券」には含まれておりません。

(単位：百万円)

区分	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
非上場株式(*1)(*2)	2,232	2,229
組合出資金(*3)	3,608	4,255
合計	5,841	6,485

(*1) 非上場株式については、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから時価開示の対象とはしていません。

(*2) 前連結会計年度において、非上場株式について3百万円減損処理を行っております。
当連結会計年度において、非上場株式について42百万円減損処理を行っております。

(*3) 組合出資金のうち、組合財産が非上場株式など時価を把握することが極めて困難と認められるもので構成されているものについては、時価開示の対象とはしていません。

(注3) 金銭債権及び満期のある有価証券の連結決算日後の償還予定額
前連結会計年度(2018年3月31日)

(単位：百万円)

	1年以内	1年超 3年以内	3年超 5年以内	5年超 7年以内	7年超 10年以内	10年超
預け金	551,633					
コールローン及び買入手形	81,366					
買入金銭債権	8,525	259	747	1,127	163	116
有価証券	225,057	598,041	330,505	88,277	177,587	61,646
その他有価証券のうち 満期があるもの	225,057	598,041	330,505	88,277	177,587	61,646
うち国債	48,000	303,400	176,500	14,500		30,000
地方債	72,799	61,314	87,138	46,791	117,765	
社債	88,523	195,217	47,277	12,185	22,446	30,639
貸出金(*)	748,236	573,856	388,195	262,064	275,772	780,832
合計	1,614,818	1,172,157	719,448	351,469	453,523	842,595

(*) 貸出金のうち、期間の定めのないもの66,254百万円は含めておりません。

当連結会計年度(2019年3月31日)

(単位：百万円)

	1年以内	1年超 3年以内	3年超 5年以内	5年超 7年以内	7年超 10年以内	10年超
預け金	841,495					
コールローン及び買入手形	20,429					
買入金銭債権	7,672	2,379	2,478	43	232	
有価証券	264,609	505,450	263,682	167,326	132,110	102,306
その他有価証券のうち 満期があるもの	264,609	505,450	263,682	167,326	132,110	102,306
うち国債	83,400	330,000	65,500	6,000		39,000
地方債	24,916	70,940	77,911	109,246	76,829	
社債	138,282	81,312	37,403	19,390	8,200	48,334
貸出金(*)	744,645	561,915	451,272	318,534	333,383	968,959
合計	1,878,853	1,069,745	717,433	485,904	465,726	1,071,266

(*) 貸出金のうち、期間の定めのないもの52,626百万円は含めておりません。

(注4) 借入金及びその他の有利子負債の連結決算日後の返済予定額
前連結会計年度(2018年3月31日)

(単位:百万円)

	1年以内	1年超 3年以内	3年超 5年以内	5年超 7年以内	7年超 10年以内	10年超
預金(*)	4,284,275	364,006	67,814			
譲渡性預金	181,350	150				
コールマネー及び売渡手形	100,000					
債券貸借取引受入担保金	75,514					
借入金	20,159	15,628	161,639			
合計	4,661,300	379,785	229,453			

(*) 預金のうち、要求払預金については、「1年以内」に含めて開示しております。

当連結会計年度(2019年3月31日)

(単位:百万円)

	1年以内	1年超 3年以内	3年超 5年以内	5年超 7年以内	7年超 10年以内	10年超
預金(*)	4,502,953	316,973	56,662			
譲渡性預金	176,185					
コールマネー及び売渡手形	240,000					
債券貸借取引受入担保金	188,696					
借入金	15,316	31,121	269,876			
合計	5,123,151	348,095	326,538			

(*) 預金のうち、要求払預金については、「1年以内」に含めて開示しております。

(有価証券関係)

- 1 連結貸借対照表の「有価証券」のほか、「商品有価証券」及び「買入金銭債権」中の信託受益権も含めて記載しております。
- 2 「子会社株式及び関連会社株式」については、財務諸表における注記事項として記載しております。

1 売買目的有価証券

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
連結会計年度の損益に含まれた評価差額 (百万円)	0	0

2 満期保有目的の債券

該当事項はありません。

3 その他有価証券

前連結会計年度(2018年3月31日)

	種類	連結貸借対照表計上額 (百万円)	取得原価 (百万円)	差額 (百万円)
連結貸借対照表 計上額が取得原 価を超えるもの	株式	173,387	56,544	116,843
	債券	1,261,939	1,237,717	24,221
	国債	594,830	578,068	16,762
	地方債	317,607	312,969	4,637
	短期社債			
	社債	349,501	346,679	2,821
	その他	90,619	82,658	7,960
	小計	1,525,946	1,376,921	149,025
連結貸借対照表 計上額が取得原 価を超えないもの	株式	7,694	8,370	676
	債券	123,689	124,130	440
	国債			
	地方債	72,587	72,929	342
	短期社債			
	社債	51,101	51,200	98
	その他	117,980	120,480	2,499
	小計	249,364	252,981	3,616
合計	1,775,311	1,629,902	145,408	

当連結会計年度(2019年3月31日)

	種類	連結貸借対照表計上額 (百万円)	取得原価 (百万円)	差額 (百万円)
連結貸借対照表 計上額が取得原 価を超えるもの	株式	162,328	52,998	109,329
	債券	1,221,566	1,199,225	22,341
	国債	541,697	527,472	14,225
	地方債	358,087	352,663	5,423
	短期社債			
	社債	321,782	319,089	2,692
	その他	189,562	181,928	7,633
	小計	1,573,457	1,434,152	139,304
連結貸借対照表 計上額が取得原 価を超えないもの	株式	8,039	9,136	1,097
	債券	21,713	21,755	42
	国債			
	地方債	7,231	7,236	5
	短期社債			
	社債	14,481	14,518	36
	その他	127,350	131,201	3,850
	小計	157,103	162,093	4,990
合計	1,730,560	1,596,246	134,314	

4 当連結会計年度中に売却した満期保有目的の債券

該当事項はありません。

5 当連結会計年度中に売却したその他有価証券

前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

種類	売却額(百万円)	売却益の合計額(百万円)	売却損の合計額(百万円)
株式	22,749	1,874	480
債券	42,946	18	559
国債	39,894	16	559
地方債	50	0	
短期社債			
社債	3,001	1	
その他	832,119	8,024	7,060
合計	897,815	9,917	8,099

当連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

種類	売却額(百万円)	売却益の合計額(百万円)	売却損の合計額(百万円)
株式	12,362	856	826
債券	58,810	91	65
国債	25,896	89	
地方債	31,215	0	60
短期社債			
社債	1,697	0	5
その他	179,707	3,691	1,194
合計	250,879	4,639	2,086

6 保有目的を変更した有価証券

該当事項はありません。

7 減損処理を行った有価証券

売買目的有価証券以外の有価証券(時価を把握することが極めて困難なものを除く)のうち、当該有価証券の時価が取得原価に比べて著しく下落しており、時価が取得原価まで回復する見込みがあると認められないものについては、当該時価をもって連結貸借対照表計上額とするとともに、評価差額を当連結会計年度の損失として処理(以下「減損処理」という。)しております。

前連結会計年度における減損処理はありません。

当連結会計年度における減損処理額は、340百万円(うち、株式340百万円)であります。

なお、有価証券の減損処理にあたっては、連結会計年度末日における時価が取得原価に比べて30%以上下落している場合は原則として実施しておりますが、株式及び投資信託については、連結会計年度末日における時価が30%以上50%未満下落している場合、一定期間の時価の推移や発行会社の財務内容等によって時価の回復可能性を判断する基準を設け、時価の回復可能性があると認められないものについて実施しております。

(金銭の信託関係)

1 運用目的の金銭の信託

前連結会計年度(2018年3月31日)

	連結貸借対照表計上額(百万円)	連結会計年度の損益に含まれた評価差額(百万円)
運用目的の金銭の信託	2,000	0

当連結会計年度(2019年3月31日)

	連結貸借対照表計上額(百万円)	連結会計年度の損益に含まれた評価差額(百万円)
運用目的の金銭の信託	1,997	2

- 2 満期保有目的の金銭の信託
該当事項はありません。
- 3 その他の金銭の信託(運用目的及び満期保有目的以外)
該当事項はありません。

(その他有価証券評価差額金)

連結貸借対照表に計上されているその他有価証券評価差額金の内訳は、次のとおりであります。

前連結会計年度(2018年3月31日)

	金額(百万円)
評価差額	145,502
その他有価証券	145,502
その他の金銭の信託	
()繰延税金負債	43,239
その他有価証券評価差額金(持分相当額調整前)	102,262
()非支配株主持分相当額	80
(+)持分法適用会社が所有するその他有価証券に係る 評価差額金のうち親会社持分相当額	
その他有価証券評価差額金	102,182

(注) 評価差額には、組合等の構成資産であるその他有価証券に係る評価差額93百万円(益)を含めております。

当連結会計年度(2019年3月31日)

	金額(百万円)
評価差額	134,331
その他有価証券	134,331
その他の金銭の信託	
()繰延税金負債	40,177
その他有価証券評価差額金(持分相当額調整前)	94,153
()非支配株主持分相当額	80
(+)持分法適用会社が所有するその他有価証券に係る 評価差額金のうち親会社持分相当額	
その他有価証券評価差額金	94,072

(注) 評価差額には、組合等の構成資産であるその他有価証券に係る評価差額17百万円(益)を含めております。

(デリバティブ取引関係)

1 ヘッジ会計が適用されていないデリバティブ取引

ヘッジ会計が適用されていないデリバティブ取引について、取引の対象物の種類ごとの連結決算日における契約額又は契約において定められた元本相当額、時価及び評価損益並びに当該時価の算定方法は、次のとおりであります。なお、契約額等については、その金額自体がデリバティブ取引に係る市場リスクを示すものではありません。

(1) 金利関連取引

前連結会計年度(2018年3月31日)

区分	種類	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超のもの (百万円)	時価 (百万円)	評価損益 (百万円)
金融商品 取引所	金利先物				
	売建				
	買建				
	金利オプション				
	売建				
	買建				
店頭	金利先渡契約				
	売建				
	買建				
	金利スワップ	17,215	17,215	101	101
	受取固定・支払変動	8,607	8,607	350	350
	受取変動・支払固定	8,607	8,607	248	248
	金利オプション				
	売建				
	買建				
	その他				
	売建				
	買建				
合 計				101	101

(注) 1 上記取引については時価評価を行い、評価損益を連結損益計算書に計上しております。

2 時価の算定

金融商品取引所取引については、東京金融取引所等における最終の価格によっております。店頭取引については、割引現在価値等により算定しております。

当連結会計年度(2019年3月31日)

区分	種類	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超のもの (百万円)	時価 (百万円)	評価損益 (百万円)
金融商品 取引所	金利先物				
	売建				
	買建				
	金利オプション				
	売建				
	買建				
店頭	金利先渡契約				
	売建				
	買建				
	金利スワップ	15,600	15,600	86	86
	受取固定・支払変動	7,800	7,800	375	375
	受取変動・支払固定	7,800	7,800	288	288
	受取変動・支払変動				
	金利オプション				
	売建				
	買建				
	その他				
	売建				
	買建				
合 計				86	86

(注) 1 上記取引については時価評価を行い、評価損益を連結損益計算書に計上しております。

2 時価の算定

金融商品取引所取引については、東京金融取引所等における最終の価格によっております。店頭取引については、割引現在価値等により算定しております。

(2) 通貨関連取引

前連結会計年度(2018年3月31日)

区分	種類	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超のもの (百万円)	時価 (百万円)	評価損益 (百万円)
金融商品 取引所	通貨先物				
	売建				
	買建				
	通貨オプション				
	売建 買建				
店頭	通貨スワップ	186,057	172,735	4,534	4,534
	為替予約	113,323		988	988
	売建	105,280		1,016	1,016
	買建	8,042		28	28
	通貨オプション	861			1
	売建	430		2	2
	買建	430		2	1
	その他				
	売建				
	買建				
合 計				5,522	5,524

(注) 1 上記取引については時価評価を行い、評価損益を連結損益計算書に計上しております。

- 2 時価の算定
割引現在価値等により算定しております。

当連結会計年度(2019年3月31日)

区分	種類	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超のもの (百万円)	時価 (百万円)	評価損益 (百万円)
金融商品 取引所	通貨先物				
	売建				
	買建				
	通貨オプション				
	売建 買建				
店頭	通貨スワップ	215,871	189,751	3,109	3,109
	為替予約	123,288		418	418
	売建	120,584		416	416
	買建	2,703		2	2
	通貨オプション	1,497		0	0
	売建	748		4	2
	買建	748		4	1
	その他				
	売建				
	買建				
合 計				3,528	3,529

(注) 1 上記取引については時価評価を行い、評価損益を連結損益計算書に計上しております。

2 時価の算定

割引現在価値等により算定しております。

(3) 株式関連取引

該当事項はありません。

(4) 債券関連取引

該当事項はありません。

(5) 商品関連取引

該当事項はありません。

(6) クレジット・デリバティブ取引

該当事項はありません。

(7) その他

前連結会計年度(2018年3月31日)

該当事項はありません。

当連結会計年度(2019年3月31日)

区分	種類	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超のもの (百万円)	時価 (百万円)	評価損益 (百万円)
店頭	地震デリバティブ	4,160		0	
	売建	2,080		41	
	買建	2,080		41	
合 計				0	

(注) 上記取引については公正な評価額を算定することが極めて困難と認められるため、取得価額をもって時価としております。

2 ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引

ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引について、取引の対象物の種類ごと、ヘッジ会計の方法別の連結決算日における契約額又は契約において定められた元本相当額及び時価並びに当該時価の算定方法は、次のとおりであります。なお、契約額等については、その金額自体がデリバティブ取引に係る市場リスクを示すものではありません。

(1) 金利関連取引

前連結会計年度(2018年3月31日)

ヘッジ会計の方法	種類	主なヘッジ対象	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超のもの (百万円)	時価 (百万円)
原則的処理 方法	金利スワップ	有価証券、貸出金	139,611	126,394	6,350
	受取固定・支払変動		139,611	126,394	6,350
	受取変動・支払固定				
	金利先物				
	金利オプション				
その他					
金利スワップ の特例処理	金利スワップ	貸出金	9,006	6,550	(注) 3
	受取固定・支払変動		9,006	6,550	
	受取変動・支払固定				
合計					6,350

(注) 1 主として「銀行業における金融商品会計基準適用に関する会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第24号2002年2月13日)に基づき、繰延ヘッジによっております。

2 時価の算定

金融商品取引所取引については、東京金融取引所等における最終の価格によっております。店頭取引については、割引現在価値等により算定しております。

3 金利スワップの特例処理によるものは、ヘッジ対象とされている貸出金と一体として処理されているため、その時価は「(金融商品関係)」の当該貸出金の時価に含めて記載してあります。

当連結会計年度(2019年3月31日)

ヘッジ会計の方法	種類	主なヘッジ対象	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超のもの (百万円)	時価 (百万円)
原則的処理 方法	金利スワップ	有価証券、貸出金	124,224	123,961	7,073
	受取固定・支払変動		124,224	123,961	7,073
	受取変動・支払固定				
	金利先物				
	金利オプション				
その他					
金利スワップ の特例処理	金利スワップ	貸出金	4,479	3,303	(注) 3
	受取固定・支払変動		4,479	3,303	
	受取変動・支払固定				
合計					7,073

(注) 1 主として「銀行業における金融商品会計基準適用に関する会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第24号2002年2月13日)に基づき、繰延ヘッジによっております。

2 時価の算定

金融商品取引所取引については、東京金融取引所等における最終の価格によっております。店頭取引については、割引現在価値等により算定してあります。

3 金利スワップの特例処理によるものは、ヘッジ対象とされている貸出金と一体として処理されているため、その時価は「(金融商品関係)」の当該貸出金の時価に含めて記載してあります。

(2) 通貨関連取引

前連結会計年度(2018年3月31日)

ヘッジ会計の方法	種類	主なヘッジ対象	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超のもの (百万円)	時価 (百万円)
原則的処理 方法	通貨スワップ	コールローン、貸 出金、借入金	15,936	15,936	78
	為替予約		41,128		948
	その他				
為替予約等の 振当処理	通貨スワップ 為替予約				
合 計					1,026

(注) 1 主として「銀行業における外貨建取引等の会計処理に関する会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第25号2002年7月29日)に基づき、繰延ヘッジによっております。

2 時価の算定

割引現在価値等により算定しております。

当連結会計年度(2019年3月31日)

ヘッジ会計の方法	種類	主なヘッジ対象	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超のもの (百万円)	時価 (百万円)
原則的処理 方法	通貨スワップ	コールローン、貸 出金、借入金	22,198	11,099	58
	為替予約		12,638		21
	その他				
為替予約等の 振当処理	通貨スワップ 為替予約				
合 計					37

(注) 1 主として「銀行業における外貨建取引等の会計処理に関する会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第25号2002年7月29日)に基づき、繰延ヘッジによっております。

2 時価の算定

割引現在価値等により算定しております。

(3) 株式関連取引

該当事項はありません。

(4) 債券関連取引

該当事項はありません。

(退職給付関係)

1 採用している退職給付制度の概要

当行は、確定給付型の制度として企業年金基金制度、退職一時金制度、確定拠出型の制度として確定拠出年金制度を設けております。連結子会社は、確定給付型の制度として退職一時金制度を設けております。また、当行において退職給付信託を設定しております。

なお、連結子会社が有する退職一時金制度は、簡便法により退職給付に係る負債及び退職給付費用を計算しております。

2 確定給付制度

(1) 退職給付債務の期首残高と期末残高の調整表

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
退職給付債務の期首残高	45,030	45,066
勤務費用	1,650	1,687
利息費用	140	139
数理計算上の差異の発生額	849	209
退職給付の支払額	2,604	2,732
過去勤務費用の発生額		
その他	0	0
退職給付債務の期末残高	45,066	44,371

(2) 年金資産の期首残高と期末残高の調整表

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
年金資産の期首残高	54,464	57,451
期待運用収益	1,669	1,696
数理計算上の差異の発生額	2,482	2,199
事業主からの拠出額	475	473
退職給付の支払額	1,640	1,654
その他	0	0
年金資産の期末残高	57,451	55,768

(3) 退職給付債務及び年金資産の期末残高と連結貸借対照表に計上された退職給付に係る負債及び退職給付に係る資産の調整表

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
積立型制度の退職給付債務	44,671	43,927
年金資産	57,451	55,768
非積立型制度の退職給付債務	12,780	11,840
	395	443
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	12,385	11,397
退職給付に係る負債	2,986	3,278
退職給付に係る資産	15,371	14,675
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	12,385	11,397

(4) 退職給付費用及びその内訳項目の金額

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
勤務費用	1,650	1,687
利息費用	140	139
期待運用収益	1,669	1,696
数理計算上の差異の損益処理額	1,155	92
過去勤務費用の損益処理額		
その他		
確定給付制度に係る退職給付費用	1,276	223

(注) 簡便法を採用している連結子会社の退職給付費用は、一括して「勤務費用」に含めて計上しております。

(5) 退職給付に係る調整額

退職給付に係る調整額に計上した項目（税効果控除前）の内訳は次のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
過去勤務費用		
数理計算上の差異	2,788	2,316
その他		
合計	2,788	2,316

(6) 退職給付に係る調整累計額

退職給付に係る調整累計額に計上した項目（税効果控除前）の内訳は次のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
未認識過去勤務費用		
未認識数理計算上の差異	2,102	213
その他		
合計	2,102	213

(7) 年金資産に関する事項

年金資産合計に対する主な分類ごとの比率は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
債券	5%	4%
株式	51%	51%
現金及び預金	0%	0%
一般勘定	19%	20%
その他	25%	25%
合計	100%	100%

(注) 年金資産合計には、退職一時金制度及び企業年金基金制度に対して設定した退職給付信託が前連結会計年度34%、当連結会計年度34%含まれております。

長期期待運用収益率の設定方法

年金資産の長期期待運用収益率を決定するため、現在及び予想される年金資産の配分と、年金資産を構成する多様な資産からの現在及び将来期待される長期の収益率を考慮しております。

(8) 数理計算上の計算基礎に関する事項

主要な数理計算上の計算基礎

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
割引率	企業年金基金制度 0.4% 退職一時金制度 0.0%	企業年金基金制度 0.4% 退職一時金制度 0.0%
長期期待運用収益率	主として3.5%	主として3.5%

(注) 退職給付債務の計算は、給付算定式基準により将来付与されるポイントを織り込まない方法を採用していることから、予想昇給率の適用は行っておりません。

3 確定拠出制度

当行の確定拠出制度への要拠出額は、前連結会計年度105百万円、当連結会計年度104百万円であります。

(ストック・オプション等関係)

1 スtock・オプションにかかる費用計上額及び科目名

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
営業経費	27百万円	21百万円

2 スtock・オプションの内容、規模及びその変動状況

(1) スtock・オプションの内容

	2011年 ストック・オプション	2012年 ストック・オプション	2013年 ストック・オプション
付与対象者の区分及び人数	当行の取締役 13名	当行の取締役 13名	当行の取締役 (社外取締役を除く) 13名
株式の種類別のストック・オプションの数(注)	当行普通株式 91,600株	当行普通株式 94,000株	当行普通株式 71,700株
付与日	2011年7月25日	2012年7月26日	2013年7月24日
権利確定条件	権利確定条件は 定めていない	権利確定条件は 定めていない	権利確定条件は 定めていない
対象勤務期間	対象勤務期間は 定めていない	対象勤務期間は 定めていない	対象勤務期間は 定めていない
権利行使期間	2011年7月26日～ 2041年7月25日	2012年7月27日～ 2042年7月26日	2013年7月25日～ 2043年7月24日

	2014年 ストック・オプション	2015年 ストック・オプション	2016年 ストック・オプション
付与対象者の区分及び人数	当行の取締役 (社外取締役を除く) 13名	当行の取締役 (社外取締役を除く) 12名	当行の取締役 (社外取締役を除く) 12名
株式の種類別のストック・オプションの数(注)	当行普通株式 71,200株	当行普通株式 48,100株	当行普通株式 71,400株
付与日	2014年7月31日	2015年7月30日	2016年7月27日
権利確定条件	権利確定条件は 定めていない	権利確定条件は 定めていない	権利確定条件は 定めていない
対象勤務期間	対象勤務期間は 定めていない	対象勤務期間は 定めていない	対象勤務期間は 定めていない
権利行使期間	2014年8月1日～ 2044年7月31日	2015年7月31日～ 2045年7月30日	2016年7月28日～ 2046年7月27日

	2017年 ストック・オプション	2018年 ストック・オプション
付与対象者の区分及び人数	当行の取締役 (社外取締役を除く) 12名	当行の取締役 (社外取締役を除く) 6名
株式の種類別のストック・オプションの数(注)	当行普通株式 62,800株	当行普通株式 43,800株
付与日	2017年7月27日	2018年7月30日
権利確定条件	権利確定条件は 定めていない	権利確定条件は 定めていない
対象勤務期間	対象勤務期間は 定めていない	対象勤務期間は 定めていない
権利行使期間	2017年7月28日～ 2047年7月27日	2018年7月31日～ 2048年7月30日

(注) 株式数に換算して記載しております。

(2) スtock・オプションの規模及びその変動状況

当連結会計年度(2019年3月期)において存在したストック・オプションを対象とし、ストック・オプションの数については、株式数に換算して記載しております。

ストック・オプションの数

	2011年 ストック・ オプション	2012年 ストック・ オプション	2013年 ストック・ オプション	2014年 ストック・ オプション
権利確定前				
前連結会計年度末				
付与				
失効				
権利確定				
未確定残				
権利確定後				
前連結会計年度末	49,200株	51,500株	51,600株	56,700株
権利確定				
権利行使				
失効				
未行使残	49,200株	51,500株	51,600株	56,700株

	2015年 ストック・ オプション	2016年 ストック・ オプション	2017年 ストック・ オプション	2018年 ストック・ オプション
権利確定前				
前連結会計年度末				
付与				43,800株
失効				
権利確定				43,800株
未確定残				
権利確定後				
前連結会計年度末	45,900株	68,100株	62,800株	
権利確定				43,800株
権利行使				
失効				
未行使残	45,900株	68,100株	62,800株	43,800株

単価情報

	2011年 ストック・ オプション	2012年 ストック・ オプション	2013年 ストック・ オプション	2014年 ストック・ オプション
権利行使価格	1円	1円	1円	1円
行使時平均株価				
付与日における公正な評価単価	302円	300円	404円	396円

	2015年 ストック・ オプション	2016年 ストック・ オプション	2017年 ストック・ オプション	2018年 ストック・ オプション
権利行使価格	1円	1円	1円	1円
行使時平均株価				
付与日における公正な評価単価	578円	377円	433円	480円

3 スtock・オプションの公正な評価単価の見積方法

当連結会計年度において付与された2018年ストック・オプションについての公正な評価単価の見積方法は以下のとおりであります。

- (1) 使用した評価技法 ブラック・ショールズ式
- (2) 主な基礎数値及び見積方法

	2018年ストック・オプション
株価変動性(注1)	23.27%
予想残存期間(注2)	0.92年
予想配当(注3)	8円/株
無リスク利率(注4)	0.12%

(注) 1 予想残存期間に対応する期間(2017年8月から2018年7月まで)の株価実績に基づき算定しております。

2 予想残存期間は、過去10年間に退任した役付取締役及び執行役員兼務取締役の退任時年齢の平均と、現在の在任取締役の現在年齢との差異の平均値としております。なお、当該差異がストック・オプション割当日から次の改選時期までの期間を下回る場合は、次の改選時期までの期間を差異とみなして計算しております。

3 2018年3月期の配当実績であります。

4 予想残存期間に対応する国債の利回りであります。

4 スtock・オプションの権利確定数の見積方法

基本的には、将来の失効数の合理的な見積りは困難であるため、実績の失効数のみ反映させる方法を採用しております。

(税効果会計関係)

1 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
繰延税金資産		
貸倒引当金	4,441百万円	4,228百万円
繰延ヘッジ損失	1,934	2,156
有価証券償却	1,145	1,160
その他	3,115	3,148
繰延税金資産小計	10,637	10,693
評価性引当額	1,525	1,572
繰延税金資産合計	9,111	9,121
繰延税金負債		
その他有価証券評価差額金	43,239	40,177
退職給付関係	6,738	6,333
繰延ヘッジ利益	2	3
その他	156	158
繰延税金負債合計	50,137	46,673
繰延税金資産(負債)の純額	41,025百万円	37,551百万円

(注) 繰延税金資産(負債)の純額は、連結貸借対照表の以下の項目に含まれております。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
資産の部 - 繰延税金資産	722百万円	688百万円
負債の部 - 繰延税金負債	41,748百万円	38,239百万円

2 連結財務諸表提出会社の法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主な項目別の内訳

前連結会計年度及び当連結会計年度における法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との差異が、法定実効税率の100分の5以下であるため注記を省略しております。

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

1 報告セグメントの概要

当行グループの報告セグメントは、当行グループの構成単位のうち分離された財務情報が入手可能であり、取締役会が経営資源の配分の決定及び業績を評価するために、定期的に検討を行う対象となっているものであります。

当行グループは、銀行業務を中心に、リース業務などの金融サービスに係る事業を行っております。

したがって、当行グループは、金融サービスに係る事業内容を基礎とした業務区分別のセグメントから構成されており、「銀行業」及び「リース業」の2つを報告セグメントとしています。

「銀行業」は、預金・貸出業務等を行っております。「リース業」は、リース業務等を行っております。

2 報告セグメントごとの経常収益、利益又は損失、資産その他の項目の金額の算定方法

報告されている事業セグメントの会計処理方法は、「連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項」における記載と同一であり、報告セグメントの利益は経常利益をベースとした数値であります。

また、セグメント間の内部経常収益は市場実勢価格に基づいております。

なお、(表示方法の変更)に記載のとおり、従来、当行が契約する団体信用生命保険等の受取配当金は、主として「その他の経常収益」に計上しておりましたが、当連結会計年度より、主要な受取配当金を「役員取引等費用」及び「営業経費」に計上しております。

この表示方法の変更を反映させるため、前連結会計年度のセグメント情報の組替えを行っております。

3 報告セグメントごとの経常収益、利益又は損失、資産その他の項目の金額に関する情報

前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

(単位：百万円)

	報告セグメント			その他	合計	調整額	連結財務諸表計上額
	銀行業	リース業	計				
経常収益							
外部顧客に対する経常収益	77,771	9,146	86,917	3,695	90,612		90,612
セグメント間の内部経常収益	261	444	706	1,305	2,011	2,011	
計	78,033	9,590	87,623	5,000	92,624	2,011	90,612
セグメント利益	15,500	417	15,918	870	16,789	13	16,775
セグメント資産	5,723,378	29,310	5,752,688	19,933	5,772,622	30,854	5,741,767
その他の項目							
減価償却費	2,865	319	3,184	40	3,225		3,225
資金運用収益	52,909	12	52,922	52	52,974	45	52,928
資金調達費用	5,045	67	5,112		5,112	32	5,080
特別利益	14		14		14		14
(固定資産処分益)	14		14		14		14
特別損失	168		168	1	169		169
(固定資産処分損)	102		102	0	103		103
(減損損失)	66		66		66		66
(金融商品取引責任準備金繰入額)				0	0		0
税金費用	4,499	144	4,643	286	4,929		4,929
有形固定資産及び無形固定資産の増加額	3,858	712	4,570	84	4,654		4,654

- (注) 1 一般企業の売上高に代えて、経常収益を記載しております。また、差異調整につきましては、経常収益と連結損益計算書の経常収益計上額との差異について記載しております。
- 2 「その他」の区分は報告セグメントに含まれていない事業セグメントであり、クレジットカード業務及び金融商品取引業務等を含んでおります。
- 3 調整額は次のとおりであります。
- (1) セグメント利益の調整額 13百万円は、セグメント間取引消去であります。
- (2) セグメント資産の調整額 30,854百万円は、セグメント間取引消去であります。
- (3) 資金運用収益の調整額 45百万円は、セグメント間取引消去であります。
- (4) 資金調達費用の調整額 32百万円は、セグメント間取引消去であります。
- 4 セグメント利益は、連結損益計算書の経常利益と調整を行っております。

当連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

(単位：百万円)

	報告セグメント			その他	合計	調整額	連結財務諸表計上額
	銀行業	リース業	計				
経常収益							
外部顧客に対する経常収益	72,271	9,770	82,041	3,806	85,847		85,847
セグメント間の内部経常収益	769	454	1,224	1,267	2,492	2,492	
計	73,040	10,224	83,265	5,074	88,339	2,492	85,847
セグメント利益	14,960	406	15,366	796	16,163	680	15,482
セグメント資産	6,248,299	31,247	6,279,546	19,650	6,299,197	33,921	6,265,275
その他の項目							
減価償却費	3,053	410	3,464	56	3,520		3,520
資金運用収益	53,901	61	53,962	134	54,097	715	53,381
資金調達費用	4,657	64	4,721		4,721	35	4,686
特別利益							
特別損失	177		177	0	177		177
(固定資産処分損)	68		68	0	68		68
(減損損失)	108		108		108		108
(金融商品取引責任準備金繰入額)				0	0		0
税金費用	4,109	122	4,231	230	4,461		4,461
有形固定資産及び無形固定資産の増加額	2,665	757	3,423	126	3,550		3,550

- (注) 1 一般企業の売上高に代えて、経常収益を記載しております。また、差異調整につきましては、経常収益と連結損益計算書の経常収益計上額との差異について記載しております。
- 2 「その他」の区分は報告セグメントに含まれていない事業セグメントであり、クレジットカード業務及び金融商品取引業務等を含んでおります。
- 3 調整額は次のとおりであります。
- (1) セグメント利益の調整額 680百万円は、セグメント間取引消去であります。
- (2) セグメント資産の調整額 33,921百万円は、セグメント間取引消去であります。
- (3) 資金運用収益の調整額 715百万円は、セグメント間取引消去であります。
- (4) 資金調達費用の調整額 35百万円は、セグメント間取引消去であります。
- 4 セグメント利益は、連結損益計算書の経常利益と調整を行っております。

【関連情報】

前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

1 サービスごとの情報

(単位：百万円)

	貸出業務	有価証券 投資業務	リース業務	その他	合計
外部顧客に対する経常収益	35,407	30,843	9,146	15,214	90,612

(注) 一般企業の売上高に代えて、経常収益を記載しております。

2 地域ごとの情報

(1) 経常収益

当行グループは、本邦の外部顧客に対する経常収益に区分した金額が連結損益計算書の経常収益の90%を超えるため、記載を省略しております。

(2) 有形固定資産

当行グループは、本邦に所在している有形固定資産の金額が連結貸借対照表の有形固定資産の金額の90%を超えるため、記載を省略しております。

3 主要な顧客ごとの情報

特定の顧客に対する経常収益で連結損益計算書の経常収益の10%以上を占めるものがないため、記載を省略しております。

当連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

1 サービスごとの情報

(単位：百万円)

	貸出業務	有価証券 投資業務	リース業務	その他	合計
外部顧客に対する経常収益	37,268	23,845	9,770	14,963	85,847

(注) 一般企業の売上高に代えて、経常収益を記載しております。

2 地域ごとの情報

(1) 経常収益

当行グループは、本邦の外部顧客に対する経常収益に区分した金額が連結損益計算書の経常収益の90%を超えるため、記載を省略しております。

(2) 有形固定資産

当行グループは、本邦に所在している有形固定資産の金額が連結貸借対照表の有形固定資産の金額の90%を超えるため、記載を省略しております。

3 主要な顧客ごとの情報

特定の顧客に対する経常収益で連結損益計算書の経常収益の10%以上を占めるものがないため、記載を省略しております。

【報告セグメントごとの固定資産の減損損失に関する情報】

前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

(単位:百万円)

	報告セグメント			その他	合計
	銀行業	リース業	計		
減損損失	66		66		66

当連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

(単位:百万円)

	報告セグメント			その他	合計
	銀行業	リース業	計		
減損損失	108		108		108

【報告セグメントごとののれんの償却額及び未償却残高に関する情報】

該当事項はありません。

【報告セグメントごとの負ののれん発生益に関する情報】

該当事項はありません。

【関連当事者情報】

1 関連当事者との取引

連結財務諸表提出会社と関連当事者との取引

連結財務諸表提出会社の役員及び主要株主(個人の場合に限る。)等

前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

種類	会社等の名称 又は氏名	所在地	資本金 (百万円)	事業の内容 又は職業	議決権等 の所有 (被所有) 割合(%)	関連当事者 との関係	取引の内容	取引金額 (百万円)	科目	期末残高 (百万円)
役員 の 近親者 が議決 権の過 半数を 所有し ている 会社等	伊勢乾物 株式会社	三重県 伊勢市	30	乾物卸売業			資金の貸付	平均残高 159 貸出金利息 ³	貸出金	146

(注) 1 伊勢乾物株式会社は、監査役笠井貞男の近親者が議決権の過半数を所有する会社であります。

- 2 取引条件及び取引条件の決定方針等
当行の定める取引基準に基づいて取引を行っております。
取引条件の決定方針は一般取引と同様であります。

当連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

種類	会社等の名称 又は氏名	所在地	資本金 (百万円)	事業の内容 又は職業	議決権等 の所有 (被所有) 割合(%)	関連当事者 との関係	取引の内容	取引金額 (百万円)	科目	期末残高 (百万円)
役員 の 近親者 が議決 権の過 半数を 所有し ている 会社等	伊勢乾物 株式会社	三重県 伊勢市	30	乾物卸売業			資金の貸付	平均残高 120 貸出金利息 ²	貸出金	133

(注) 1 伊勢乾物株式会社は、監査役笠井貞男の近親者が議決権の過半数を所有する会社であります。

- 2 取引条件及び取引条件の決定方針等
当行の定める取引基準に基づいて取引を行っております。
取引条件の決定方針は一般取引と同様であります。

2 親会社又は重要な関連会社に関する注記

該当事項はありません。

(1株当たり情報)

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
1株当たり純資産額	1,407円93銭	1,401円81銭
1株当たり当期純利益	46円07銭	42円73銭
潜在株式調整後 1株当たり当期純利益	46円00銭	42円66銭

(注) 1 1株当たり純資産額の算定上の基礎は、次のとおりであります。

		前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
純資産の部の合計額	百万円	357,391	355,859
純資産の部の合計額から控除する金額	百万円	153	174
うち新株予約権	百万円	153	174
普通株式に係る期末の純資産額	百万円	357,238	355,685
1株当たり純資産額の算定に用いられた 期末の普通株式の数	千株	253,732	253,731

2 1株当たり当期純利益及び潜在株式調整後1株当たり当期純利益の算定上の基礎は、次のとおりであります。

		前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
1株当たり当期純利益			
親会社株主に帰属する当期純利益	百万円	11,690	10,843
普通株主に帰属しない金額	百万円		
普通株式に係る親会社株主に帰属する 当期純利益	百万円	11,690	10,843
普通株式の期中平均株式数	千株	253,730	253,731
潜在株式調整後1株当たり当期純利益			
親会社株主に帰属する当期純利益調整額	百万円		
普通株式増加数	千株	374	417
うち新株予約権	千株	374	417
希薄化効果を有しないため、潜在株式調整後1株当たり当期純利益の算定に含め なかった潜在株式の概要			

(重要な後発事象)

当行は、2019年4月1日に確定給付企業年金制度を一部変更するとともに、確定給付企業年金制度の一部を確定拠出年金制度へ移行しております。

また、連結子会社の一部は、2019年4月1日に退職一時金制度の一部について確定拠出年金制度へ移行しております。

これらに伴い、「退職給付制度間の移行等に関する会計処理」(企業会計基準適用指針第1号2016年12月16日)及び「退職給付制度間の移行等の会計処理に関する実務上の取扱い」(実務対応報告第2号2007年2月7日)を適用し、その影響額を特別利益として2,356百万円計上する予定です。

【連結附属明細表】

【借入金等明細表】

区分	当期首残高 (百万円)	当期末残高 (百万円)	平均利率 (%)	返済期限
借入金	197,427	316,314	0.09	
再割引手形				
借入金	197,427	316,314	0.09	2019年4月～ 2024年3月
リース債務	49	40		2022年10月～ 2025年9月

- (注) 1 「平均利率」は、期末日現在の「利率」及び「当期末残高」により算出(加重平均)しております。
 2 リース債務の「平均利率」は、リース料総額に含まれる利息相当額を控除する前の金額でリース債務を連結貸借対照表に計上しているため、記載しておりません。
 3 借入金及びリース債務の連結決算日後5年以内における返済額は次のとおりであります。

	1年以内	1年超2年以内	2年超3年以内	3年超4年以内	4年超5年以内
借入金(百万円)	15,316	2,690	28,431	269,602	273
リース債務(百万円)	9	9	9	8	3

銀行業は、預金の受入れ、コール・手形市場からの資金の調達・運用等を営業活動として行っているため、借入金等明細表については連結貸借対照表中「負債の部」の「借入金」の内訳及び「その他負債」中のリース債務を記載しております。

(参考) コマーシャル・ペーパーによる資金調達は行っておりません。

【資産除去債務明細表】

当連結会計年度期首及び当連結会計年度末における資産除去債務の金額が当連結会計年度期首及び当連結会計年度末における負債及び純資産の合計額の100分の1以下であるため、記載を省略しております。

(2) 【その他】

当連結会計年度における四半期情報

(累計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	当連結会計年度
経常収益(百万円)	20,293	42,325	62,572	85,847
税金等調整前四半期(当期)純利益 (百万円)	3,464	8,784	10,577	15,304
親会社株主に帰属する 四半期(当期)純利益(百万円)	2,584	6,342	7,698	10,843
1株当たり四半期(当期)純利益(円)	10.18	24.99	30.34	42.73

(注) 一般企業の売上高に代えて、経常収益を記載しております。

(会計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	第4四半期
1株当たり四半期純利益(円)	10.18	14.81	5.34	12.39

2 【財務諸表等】

(1) 【財務諸表】

【貸借対照表】

(単位：百万円)

	前事業年度 (2018年3月31日)		当事業年度 (2019年3月31日)	
資産の部				
現金預け金		609,098		902,902
現金		59,818		63,478
預け金		549,280		839,423
コールローン		81,366		20,429
買入金銭債権		10,939		12,804
商品有価証券		18		23
商品国債		3		-
商品地方債		15		23
金銭の信託		2,000		1,997
有価証券	2,8	1,788,672	2,8	1,741,466
国債		594,830		541,697
地方債		390,194		365,318
社債	11	400,603	11	336,264
株式	1	193,250	1	182,645
その他の証券	1	209,793	1	315,541
貸出金	3,4,5,6,9,12	3,102,047	3,4,5,6,9,12	3,441,753
割引手形	7	7,370	7	8,263
手形貸付		93,045		93,938
証書貸付		2,656,468		3,008,548
当座貸越		345,163		331,003
外国為替		1,731		2,484
外国他店預け		1,188		2,209
買入外国為替	7	84	7	4
取立外国為替		458		271
その他資産		56,247		52,827
前払費用		117		114
未収収益		7,404		7,857
金融派生商品		9,421		5,239
金融商品等差入担保金		7,222		5,809
その他の資産	1,8	32,081	1,8	33,806
有形固定資産	10	44,500	10	44,185
建物		21,900		21,453
土地		19,646		19,693
リース資産		527		317
建設仮勘定		156		235
その他の有形固定資産		2,268		2,485
無形固定資産		5,114		4,910
ソフトウェア		4,959		4,735
リース資産		19		14
その他の無形固定資産		135		160
前払年金費用		14,858		15,712
支払承諾見返		20,904		22,090
貸倒引当金		14,056		13,907
資産の部合計		5,723,446		6,249,680

(単位：百万円)

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
負債の部		
預金	8 4,722,896	8 4,882,986
当座預金	144,199	156,822
普通預金	2,406,426	2,539,362
貯蓄預金	39,827	38,584
通知預金	23,742	24,071
定期預金	2,057,184	2,065,096
その他の預金	51,515	59,048
譲渡性預金	187,500	182,115
コールマネー	100,000	240,000
債券貸借取引受入担保金	8 75,514	8 188,696
借入金	8 187,438	8 307,869
借入金	187,438	307,869
外国為替	32	263
売渡外国為替	16	6
未払外国為替	16	256
その他負債	33,036	32,527
未払法人税等	1,406	1,393
未払費用	3,435	3,373
前受収益	675	649
金融派生商品	9,121	8,736
金融商品等受入担保金	1,693	1,470
リース債務	589	358
資産除去債務	139	161
その他の負債	15,975	16,385
退職給付引当金	4,214	3,694
睡眠預金払戻損失引当金	1,405	1,600
ポイント引当金	278	300
偶発損失引当金	375	392
繰延税金負債	41,046	38,259
再評価に係る繰延税金負債	2,535	2,534
支払承諾	20,904	22,090
負債の部合計	5,377,179	5,903,330

(単位：百万円)

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
純資産の部		
資本金	20,000	20,000
資本剰余金	7,557	7,557
資本準備金	7,557	7,557
その他資本剰余金	-	0
利益剰余金	216,988	225,599
利益準備金	17,377	17,377
その他利益剰余金	199,610	208,221
別途積立金	187,114	196,114
繰越利益剰余金	12,496	12,107
自己株式	146	146
株主資本合計	244,399	253,010
その他有価証券評価差額金	102,011	93,976
繰延ヘッジ損益	4,466	4,979
土地再評価差額金	4,170	4,168
評価・換算差額等合計	101,714	93,165
新株予約権	153	174
純資産の部合計	346,267	346,349
負債及び純資産の部合計	5,723,446	6,249,680

【損益計算書】

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 2017年 4月 1日 至 2018年 3月31日)	当事業年度 (自 2018年 4月 1日 至 2019年 3月31日)
経常収益	78,319	73,225
資金運用収益	53,153	54,044
貸出金利息	31,938	34,089
有価証券利息配当金	20,061	18,791
コールローン利息	861	874
預け金利息	211	209
その他の受入利息	79	80
役務取引等収益	12,714	13,816
受入為替手数料	3,386	3,482
その他の役務収益	9,327	10,334
その他業務収益	4,941	1,367
商品有価証券売買益	1	0
国債等債券売却益	4,939	1,366
その他の業務収益	0	0
その他経常収益	7,510	3,996
貸倒引当金戻入益	1,526	-
株式等売却益	4,977	3,273
金銭の信託運用益	44	0
その他の経常収益	962	723
経常費用	62,787	58,202
資金調達費用	5,045	4,657
預金利息	1,137	999
譲渡性預金利息	30	30
コールマネー利息	19	90
債券貸借取引支払利息	1,366	1,153
借入金利息	179	276
金利スワップ支払利息	1,576	1,573
その他の支払利息	775	714
役務取引等費用	4,085	4,516
支払為替手数料	631	613
その他の役務費用	3,453	3,902
その他業務費用	9,924	4,923
外国為替売買損	1,289	2,296
国債等債券売却損	7,443	862
国債等債券償還損	281	433
金融派生商品費用	782	1,330
その他の業務費用	127	-
営業経費	42,486	41,190
その他経常費用	1,245	2,914
貸倒引当金繰入額	-	368
株式等売却損	655	1,224
株式等償却	3	383
金銭の信託運用損	-	26
その他の経常費用	586	911
経常利益	15,531	15,023

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 2017年 4月 1日 至 2018年 3月 31日)	当事業年度 (自 2018年 4月 1日 至 2019年 3月 31日)
特別利益	14	-
固定資産処分益	14	-
特別損失	168	177
固定資産処分損	102	68
減損損失	66	108
税引前当期純利益	15,377	14,845
法人税、住民税及び事業税	3,440	3,622
法人税等調整額	981	457
法人税等合計	4,421	4,079
当期純利益	10,956	10,766

【株主資本等変動計算書】

前事業年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

(単位：百万円)

	株主資本						
	資本金	資本剰余金		利益準備金	利益剰余金		利益剰余金 合計
		資本準備金	資本剰余金 合計		その他利益剰余金	繰越利益 剰余金	
				別途積立金			
当期首残高	20,000	7,557	7,557	17,377	180,614	10,026	208,018
当期変動額							
剰余金の配当						2,029	2,029
当期純利益						10,956	10,956
別途積立金の積立					6,500	6,500	
自己株式の取得							
自己株式の処分						0	0
土地再評価差額金の 取崩						43	43
株主資本以外の項目 の当期変動額(純 額)							
当期変動額合計					6,500	2,470	8,970
当期末残高	20,000	7,557	7,557	17,377	187,114	12,496	216,988

	株主資本		評価・換算差額等				新株予約権	純資産合計
	自己株式	株主資本合計	その他 有価証券 評価差額金	繰延ヘッジ 損益	土地再評価 差額金	評価・換算 差額等合計		
当期首残高	151	235,424	95,180	4,836	4,213	94,557	133	330,115
当期変動額								
剰余金の配当		2,029						2,029
当期純利益		10,956						10,956
別途積立金の積立								
自己株式の取得	2	2						2
自己株式の処分	7	7						7
土地再評価差額金の 取崩		43						43
株主資本以外の項目 の当期変動額(純 額)			6,831	370	43	7,157	19	7,176
当期変動額合計	5	8,975	6,831	370	43	7,157	19	16,152
当期末残高	146	244,399	102,011	4,466	4,170	101,714	153	346,267

当事業年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

(単位：百万円)

	株主資本							
	資本金	資本剰余金			利益剰余金			
		資本準備金	その他 資本剰余金	資本剰余金 合計	利益準備金	その他利益剰余金		利益剰余金 合計
					別途積立金	繰越利益 剰余金		
当期首残高	20,000	7,557		7,557	17,377	187,114	12,496	216,988
当期変動額								
剰余金の配当							2,156	2,156
当期純利益							10,766	10,766
別途積立金の積立						9,000	9,000	
自己株式の取得								
自己株式の処分			0	0				
土地再評価差額金の 取崩							1	1
株主資本以外の項目 の当期変動額(純 額)								
当期変動額合計			0	0		9,000	389	8,610
当期末残高	20,000	7,557	0	7,557	17,377	196,114	12,107	225,599

	株主資本		評価・換算差額等				新株予約権	純資産合計
	自己株式	株主資本合計	その他 有価証券 評価差額金	繰延ヘッジ 損益	土地再評価 差額金	評価・換算 差額等合計		
当期首残高	146	244,399	102,011	4,466	4,170	101,714	153	346,267
当期変動額								
剰余金の配当		2,156						2,156
当期純利益		10,766						10,766
別途積立金の積立								
自己株式の取得	0	0						0
自己株式の処分	0	0						0
土地再評価差額金の 取崩		1						1
株主資本以外の項目 の当期変動額(純 額)			8,034	512	1	8,549	21	8,528
当期変動額合計	0	8,610	8,034	512	1	8,549	21	82
当期末残高	146	253,010	93,976	4,979	4,168	93,165	174	346,349

【注記事項】

(重要な会計方針)

- 1 商品有価証券の評価基準及び評価方法
商品有価証券の評価は、時価法(売却原価は主として移動平均法により算定)により行っております。
- 2 有価証券の評価基準及び評価方法
 - (1) 有価証券の評価は、満期保有目的の債券については移動平均法による償却原価法(定額法)、子会社株式については移動平均法による原価法、その他有価証券については原則として決算日の市場価格等に基づく時価法(売却原価は主として移動平均法により算定)、ただし時価を把握することが極めて困難と認められるものについては移動平均法による原価法により行っております。
なお、その他有価証券の評価差額については、全部純資産直入法により処理しております。
 - (2) 有価証券運用を主目的とする単独運用の金銭の信託において信託財産として運用されている有価証券の評価は、時価法により行っております。
- 3 デリバティブ取引の評価基準及び評価方法
デリバティブ取引の評価は、時価法により行っております。
- 4 固定資産の減価償却の方法
 - (1) 有形固定資産(リース資産を除く)
有形固定資産は、定額法を採用しております。
また、主な耐用年数は次のとおりであります。
建物 : 15年~50年
その他 : 4年~15年
 - (2) 無形固定資産(リース資産を除く)
無形固定資産は、定額法により償却しております。なお、自社利用のソフトウェアについては、行内における利用可能期間(5年)に基づいて償却しております。
 - (3) リース資産
所有権移転外ファイナンス・リース取引に係る「有形固定資産」及び「無形固定資産」中のリース資産は、リース期間を耐用年数とした定額法により償却しております。なお、残存価額については、リース契約上に残価保証の取決めがあるものは当該残価保証額とし、それ以外のものは零としております。
- 5 外貨建の資産及び負債の本邦通貨への換算基準
外貨建資産・負債は、決算日の為替相場による円換算額を付しております。
- 6 引当金の計上基準
 - (1) 貸倒引当金
貸倒引当金は、予め制定した償却・引当基準により、次のとおり計上しております。
破産、特別清算等法的に経営破綻の事実が発生している債務者に係る債権及びそれと同等の状況にある債務者に係る債権については、債権額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額を計上しております。また、現在は経営破綻の状況にないが、今後経営破綻に陥る可能性が大きいと認められる債務者に係る債権については、債権額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額のうち、債務者の支払能力を総合的に判断し必要と認める額を計上しております。
上記以外の債権については、過去の一定期間における貸倒実績から算出した貸倒実績率等に基づき計上しております。
すべての債権は、資産の自己査定基準に基づき、営業関連部署が資産査定を実施し、当該部署から独立した資産監査部署が査定結果を監査しております。
 - (2) 退職給付引当金
退職給付引当金は、従業員の退職給付に備えるため、当事業年度末における退職給付債務及び年金資産の見込額に基づき、必要額を計上しております。また、退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当事業年度末までの期間に帰属させる方法については給付算定式基準によっております。なお、過去勤務費用及び数理計算上の差異の損益処理方法は次のとおりであります。
過去勤務費用：
その発生時の従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数(3年)による定額法により損益処理
数理計算上の差異：
各事業年度の発生時の従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数(10年)による定額法により按分した額を、それぞれ発生翌事業年度から損益処理
また、執行役員への退職慰労金の支払いに備えるため、執行役員に対する退職慰労金の支給見積額のうち、当事業年度末までに発生していると認められる額を計上しております。
 - (3) 睡眠預金払戻損失引当金
睡眠預金払戻損失引当金は、利益計上した睡眠預金について預金者への払戻損失に備えるため、過去の払戻実績に基づく将来の払戻損失見込額を計上しております。

(4) ポイント引当金

ポイント引当金は、クレジットカード会員に付与したポイントが将来使用された場合の負担に備え、将来使用される見込額を合理的に見積り、必要と認められる額を計上しております。

(5) 偶発損失引当金

偶発損失引当金は、他の引当金で引当対象とした事象以外の偶発事象に対し、将来発生する可能性のある損失を見積り、必要と認められる額を計上しております。

7 ヘッジ会計の方法

(1) 金利リスク・ヘッジ

金融資産・負債から生じる金利リスクに対するヘッジ会計の方法は、「銀行業における金融商品会計基準適用に関する会計上及び監査上の取扱い」（日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第24号2002年2月13日）に規定する繰延ヘッジによっております。ヘッジ有効性評価の方法については、相場変動を相殺するヘッジについて、ヘッジ対象となる預金・貸出金等とヘッジ手段である金利スワップ取引等を一定の残存期間毎にグルーピングのうえ特定し評価しております。また、キャッシュ・フローを固定するヘッジについては、ヘッジ対象とヘッジ手段の金利変動要素の相関関係の検証により有効性の評価をしております。

また、一部の資産・負債については、包括ヘッジ、あるいは金利スワップの特例処理を行っております。

(2) 為替変動リスク・ヘッジ

外貨建金融資産・負債から生じる為替変動リスクに対するヘッジ会計の方法は、「銀行業における外貨建取引等の会計処理に関する会計上及び監査上の取扱い」（日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第25号2002年7月29日）に規定する繰延ヘッジによっております。ヘッジ有効性評価の方法については、外貨建金銭債権債務等の為替変動リスクを減殺する目的で行う通貨スワップ取引及び為替スワップ取引等をヘッジ手段とし、ヘッジ対象である外貨建金銭債権債務等に見合うヘッジ手段の外貨ポジション相当額が存在することを確認することによりヘッジの有効性を評価しております。

8 その他財務諸表作成のための基本となる重要な事項

(1) 退職給付に係る会計処理

退職給付に係る未認識数理計算上の差異及び未認識過去勤務費用の会計処理の方法は、連結財務諸表におけるこれらの会計処理の方法と異なっております。

(2) 消費税等の会計処理

消費税及び地方消費税（以下「消費税等」という。）の会計処理は、税抜方式によっております。

ただし、有形固定資産等に係る控除対象外消費税等は当事業年度の費用に計上しております。

(表示方法の変更)

(損益計算書関係)

従来、当行が契約する団体信用生命保険等の受取配当金は、主として「その他の経常収益」に計上してまいりましたが、保険料の支払及び配当金の受取に係る契約の変更が生じたこと、並びに受取配当金の額が増加傾向にあることを契機に計上方法の見直し検討を行いました。支払保険料と受取配当金の関係を調査した結果、支払保険料から受取配当金を控除した額を費用として計上することが、本来負担すべき保険料を表示するという観点からは、より適切であると判断し、当事業年度より、主要な受取配当金を「その他の役務費用」及び「営業経費」に計上しております。

この表示方法の変更を反映させるため、前事業年度の財務諸表の組替えを行っております。この結果、前事業年度の損益計算書に表示してまいりました「その他の経常収益」1,773百万円、「その他の役務費用」4,236百万円及び「営業経費」42,515百万円は、「その他の経常収益」962百万円、「その他の役務費用」3,453百万円及び「営業経費」42,486百万円と表示しております。

(貸借対照表関係)

1 関係会社の株式又は出資金の総額

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
株式	10,463百万円	10,463百万円
出資金	30百万円	30百万円

2 無担保の消費貸借契約(債券貸借取引)により貸し付けている有価証券が、国債に含まれておりますが、その金額は次のとおりであります。

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
	62,661百万円	73,068百万円

使用貸借又は賃貸借契約により貸し付けている有価証券は該当ありません。

3 貸出金のうち破綻先債権額及び延滞債権額は次のとおりであります。

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
破綻先債権額	624百万円	2,027百万円
延滞債権額	44,534百万円	42,798百万円

なお、破綻先債権とは、元本又は利息の支払の遅延が相当期間継続していることその他の事由により元本又は利息の取立て又は弁済の見込みがないものとして未収利息を計上しなかった貸出金(貸倒償却を行った部分を除く。以下「未収利息不計上貸出金」という。)のうち、法人税法施行令(1965年政令第97号)第96条第1項第3号イからホまでに掲げる事由又は同項第4号に規定する事由が生じている貸出金であります。

また、延滞債権とは、未収利息不計上貸出金であって、破綻先債権及び債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として利息の支払を猶予した貸出金以外の貸出金であります。

4 貸出金のうち3カ月以上延滞債権額は次のとおりであります。

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
3カ月以上延滞債権額	13百万円	140百万円

なお、3カ月以上延滞債権とは、元本又は利息の支払が、約定支払日の翌日から3月以上遅延している貸出金で破綻先債権及び延滞債権に該当しないものであります。

5 貸出金のうち貸出条件緩和債権額は次のとおりであります。

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
貸出条件緩和債権額	6,710百万円	6,741百万円

なお、貸出条件緩和債権とは、債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として、金利の減免、利息の支払猶予、元本の返済猶予、債権放棄その他の債務者に有利となる取決めを行った貸出金で破綻先債権、延滞債権及び3カ月以上延滞債権に該当しないものであります。

6 破綻先債権額、延滞債権額、3カ月以上延滞債権額及び貸出条件緩和債権額の合計額は次のとおりであります。

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
合計額	51,882百万円	51,709百万円

なお、上記3から6に掲げた債権額は、貸倒引当金控除前の金額であります。

7 手形割引は、「銀行業における金融商品会計基準適用に関する会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第24号2002年2月13日)に基づき金融取引として処理しております。これにより受け入れた商業手形及び買入外国為替等は、売却又は(再)担保という方法で自由に処分できる権利を有しておりますが、その額面金額は次のとおりであります。

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
	7,454百万円	8,267百万円

8 担保に供している資産は次のとおりであります。

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
担保に供している資産		
有価証券	342,016百万円	516,213百万円
担保資産に対応する債務		
預金	20,739百万円	22,614百万円
債券貸借取引受入担保金	75,514百万円	188,696百万円
借入金	176,143百万円	296,109百万円

上記のほか、為替決済等の取引の担保等として、次のものを差し入れております。

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
有価証券	4,945百万円	1,034百万円

また、その他の資産には、保証金及び中央清算機関差入証拠金が含まれておりますが、その金額は次のとおりであります。

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
保証金	1,247百万円	1,378百万円
中央清算機関差入証拠金	24,400百万円	25,000百万円

9 当座貸越契約及び貸付金に係るコミットメントライン契約は、顧客からの融資実行の申し出を受けた場合に、契約上規定された条件について違反がない限り、一定の限度額まで資金を貸し付けることを約する契約であります。これらの契約に係る融資未実行残高は次のとおりであります。

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
融資未実行残高	1,219,729百万円	1,260,172百万円
うち原契約期間が1年以内のもの又は 任意の時期に無条件で取消可能なもの	1,181,757百万円	1,213,240百万円

なお、これらの契約の多くは、融資実行されずに終了するものであるため、融資未実行残高そのものが必ずしも当行の将来のキャッシュ・フローに影響を与えるものではありません。これらの契約の多くには、金融情勢の変化、債権の保全及びその他相当の事由があるときは、当行が実行申し込みを受けた融資の拒絶又は契約極度額の減額をすることができる旨の条項が付けられております。また、契約時において必要に応じて預金・不動産・有価証券等の担保を徴求するほか、契約後も定期的に予め定めている行内手続に基づき顧客の業況等を把握し、必要に応じて契約の見直し、与信保全上の措置等を講じております。

10 有形固定資産の圧縮記帳額

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
圧縮記帳額	3,814百万円	3,814百万円
(当該事業年度の圧縮記帳額)	(百万円)	(百万円)

11 「有価証券」中の社債のうち、有価証券の私募（金融商品取引法第2条第3項）による社債に対する保証債務の額

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
	9,281百万円	10,963百万円

12 取締役及び監査役との間の取引による取締役及び監査役に対する金銭債権総額

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
	21百万円	19百万円

(有価証券関係)

子会社株式及び関連会社株式

前事業年度(2018年3月31日)

	貸借対照表計上額 (百万円)	時価 (百万円)	差額 (百万円)
子会社株式			
関連会社株式			
合計			

当事業年度(2019年3月31日)

	貸借対照表計上額 (百万円)	時価 (百万円)	差額 (百万円)
子会社株式			
関連会社株式			
合計			

(注) 時価を把握することが極めて困難と認められる子会社株式及び関連会社株式等の貸借対照表計上額

(単位：百万円)

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
子会社株式及び出資金	10,487	10,487
関連会社株式及び出資金		
合計	10,487	10,487

これらについては、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、「子会社株式及び関連会社株式」には含めておりません。

(税効果会計関係)

1 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
繰延税金資産		
貸倒引当金	3,914百万円	3,753百万円
繰延ヘッジ損失	1,934	2,156
有価証券償却	1,144	1,158
その他	2,696	2,725
繰延税金資産小計	9,689	9,794
評価性引当額	1,515	1,561
繰延税金資産合計	8,174	8,232
繰延税金負債		
その他有価証券評価差額金	43,114	40,090
退職給付関係	6,103	6,398
繰延ヘッジ利益	2	3
繰延税金負債合計	49,220	46,491
繰延税金資産(負債)の純額	41,046百万円	38,259百万円

2 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主な項目別の内訳

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
法定実効税率	30.42%	30.19%
(調整)		
交際費等永久に損金に算入されない項目	0.57	0.52
受取配当金等永久に益金に算入されない項目	2.44	3.65
住民税均等割等	0.32	0.34
評価性引当額の増減	0.10	0.31
その他	0.22	0.24
税効果会計適用後の法人税等の負担率	28.75%	27.47%

(重要な後発事象)

当行は、2019年4月1日に確定給付企業年金制度を一部変更するとともに、確定給付企業年金制度の一部を確定拠出年金制度へ移行しております。

これらに伴い、「退職給付制度間の移行等に関する会計処理」(企業会計基準適用指針第1号2016年12月16日)及び「退職給付制度間の移行等の会計処理に関する実務上の取扱い」(実務対応報告第2号2007年2月7日)を適用し、その影響額を特別利益として2,355百万円計上する予定です。

【附属明細表】

【有形固定資産等明細表】

資産の種類	当期首残高 (百万円)	当期増加額 (百万円)	当期減少額 (百万円)	当期末残高 (百万円)	当期末減価 償却累計額 又は 償却累計額 (百万円)	当期償却額 (百万円)	差引 当期末残高 (百万円)
有形固定資産							
建物	45,087	757	176	45,669	24,215	1,180	21,453
土地	19,646 [6,702]	150	103 [2] (103)	19,693 [6,700]			19,693
リース資産	1,510		253	1,256	939	210	317
建設仮勘定	156	542	464	235			235
その他の有形固定資産	9,200 [3]	758	268	9,690 [3]	7,205	524	2,485
有形固定資産計	75,602 [6,706]	2,208	1,266 [2] (108)	76,544 [6,703]	32,359	1,916	44,185
無形固定資産							
ソフトウェア	13,324	846	1,203	12,968	8,233	1,071	4,735
リース資産	24			24	9	4	14
その他の無形固定資産	167	25		193	32	1	160
無形固定資産計	13,516	872	1,203	13,186	8,275	1,077	4,910
その他							

(注) 1 当期首残高、当期減少額及び当期末残高欄における〔 〕内は、土地の再評価に関する法律（1998年3月31日公布法律第34号）に基づく土地の再評価実施前の帳簿価額との差額（内書き）であります。

2 当期減少額欄における（ ）内は、減損損失の計上額（内書き）であります。

【引当金明細表】

区分	当期首残高 (百万円)	当期増加額 (百万円)	当期減少額 (目的使用) (百万円)	当期減少額 (その他) (百万円)	当期末残高 (百万円)
貸倒引当金	14,056	13,907	516	13,539	13,907
一般貸倒引当金	3,579	3,005		3,579	3,005
個別貸倒引当金	10,476	10,902	516	9,959	10,902
うち非居住者向け 債権分					
特定海外債権引当勘定					
睡眠預金払戻損失引当金	1,405	460	264		1,600
ポイント引当金	278	154	131		300
偶発損失引当金	375	392		375	392
計	16,114	14,915	913	13,914	16,202

(注) 当期減少額（その他）欄に記載の減少額はそれぞれ次の理由によるものであります。

一般貸倒引当金・・・・・・洗替による取崩額

個別貸倒引当金・・・・・・主として洗替による取崩額

偶発損失引当金・・・・・・洗替による取崩額

未払法人税等

区分	当期首残高 (百万円)	当期増加額 (百万円)	当期減少額 (目的使用) (百万円)	当期減少額 (その他) (百万円)	当期末残高 (百万円)
未払法人税等	1,406	4,116	4,128		1,393
未払法人税等	958	3,205	3,223		940
未払事業税	447	911	904		453

(2) 【主な資産及び負債の内容】

連結財務諸表を作成しているため、記載を省略しております。

(3) 【その他】

該当事項はありません。

第6 【提出会社の株式事務の概要】

事業年度	4月1日から3月31日まで
定時株主総会	6月中
基準日	3月31日
剰余金の配当の基準日	9月30日 3月31日
1単元の株式数	100株
単元未満株式の 買取り・買増し	(注)1,2
取扱場所	東京都千代田区丸の内一丁目4番5号 三菱UFJ信託銀行株式会社 証券代行部
株主名簿管理人	東京都千代田区丸の内一丁目4番5号 三菱UFJ信託銀行株式会社
取次所	
買取・買増手数料	株式の売買の委託に係る手数料相当額として、別途定める金額
公告掲載方法	電子公告によるものとし、当行のホームページに掲載する方法により行っております。(ホームページアドレス https://www.hyakugo.co.jp/) ただし、事故その他やむを得ない事由によって電子公告による公告をすることができない場合は、東京都において発行する日本経済新聞および津市において発行する伊勢新聞に掲載する方法により行います。
株主に対する特典	毎年3月末の株主名簿に記載された株主を対象に、地元三重県ゆかりの名産品を掲載した専用カタログから、保有株式数に応じてお好みの名産品をお選びいただける株主優待制度を行っております。 1,000株以上5,000株未満 3,000円相当 5,000株以上 5,000円相当

(注)1 当行の株主は、その有する単元未満株式について、次に掲げる権利以外の権利を行使することができない旨を定款に定めております。

- (1) 会社法第189条第2項各号に掲げる権利
 - (2) 会社法第166条第1項の規定による請求をする権利
 - (3) 株主の有する株式数に応じて募集株式の割当て及び募集新株予約権の割当てを受ける権利
 - (4) 株主の有する単元未満株式の数と併せて単元株式数となる数の株式を売り渡すことを請求する権利
- 2 特別口座に記録されている株式については、特別口座の口座管理機関である三菱UFJ信託銀行株式会社が直接取り扱います。

第7 【提出会社の参考情報】

1 【提出会社の親会社等の情報】

当行には、親会社等はありません。

2 【その他の参考情報】

当事業年度の開始日から有価証券報告書提出日までの間に、次の書類を提出しております。

(1) 有価証券報告書及びその添付書類並びに確認書

事業年度（第203期）（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

2018年6月22日 関東財務局長に提出。

(2) 内部統制報告書及びその添付書類

2018年6月22日 関東財務局長に提出。

(3) 四半期報告書及び確認書

第204期第1四半期（自 2018年4月1日 至 2018年6月30日）

2018年8月3日 関東財務局長に提出。

第204期第2四半期（自 2018年7月1日 至 2018年9月30日）

2018年11月20日 関東財務局長に提出。

第204期第3四半期（自 2018年10月1日 至 2018年12月31日）

2019年2月8日 関東財務局長に提出。

(4) 臨時報告書

企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第9号の2（株主総会における議決権行使の結果）に基づく臨時報告書

2019年6月24日 関東財務局長に提出。

第二部 【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項はありません。

独立監査人の監査報告書及び内部統制監査報告書

2019年 6月21日

株式会社百五銀行
取締役会 御中

有限責任 あずさ監査法人

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 鈴木 賢 次

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 山 川 勝

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 山 田 昌 紀

< 財務諸表監査 >

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている株式会社百五銀行の2018年4月1日から2019年3月31日までの連結会計年度の連結財務諸表、すなわち、連結貸借対照表、連結損益計算書、連結包括利益計算書、連結株主資本等変動計算書、連結キャッシュ・フロー計算書、連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項、その他の注記及び連結附属明細表について監査を行った。

連結財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して連結財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない連結財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から連結財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に連結財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、連結財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による連結財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、連結財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての連結財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、上記の連結財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、株式会社百五銀行及び連結子会社の2019年3月31日現在の財政状態並びに同日をもって終了する連結会計年度の経営成績及びキャッシュ・フローの状況をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

< 内部統制監査 >

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第2項の規定に基づく監査証明を行うため、株式会社百五銀行の2019年3月31日現在の内部統制報告書について監査を行った。

内部統制報告書に対する経営者の責任

経営者の責任は、財務報告に係る内部統制を整備及び運用し、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して内部統制報告書を作成し適正に表示することにある。

なお、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性がある。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した内部統制監査に基づいて、独立の立場から内部統制報告書に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に準拠して内部統制監査を行った。財務報告に係る内部統制の監査の基準は、当監査法人に内部統制報告書に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき内部統制監査を実施することを求めている。

内部統制監査においては、内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果について監査証拠を入手するための手続が実施される。内部統制監査の監査手続は、当監査法人の判断により、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性に基づいて選択及び適用される。また、内部統制監査には、財務報告に係る内部統制の評価範囲、評価手続及び評価結果について経営者が行った記載を含め、全体としての内部統制報告書の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、株式会社百五銀行が2019年3月31日現在の財務報告に係る内部統制は有効であると表示した上記の内部統制報告書が、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して、財務報告に係る内部統制の評価結果について、すべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

(注) 1 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当行(有価証券報告書提出会社)が別途保管しております。

2 XBRLデータは監査の対象には含まれていません。

独立監査人の監査報告書

2019年6月21日

株式会社百五銀行
取締役会 御中

有限責任 あずさ監査法人

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 鈴木 賢 次

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 山 川 勝

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 山 田 昌 紀

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている株式会社百五銀行の2018年4月1日から2019年3月31日までの第204期事業年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書、重要な会計方針、その他の注記及び附属明細表について監査を行った。

財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、上記の財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、株式会社百五銀行の2019年3月31日現在の財政状態及び同日をもって終了する事業年度の経営成績をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

(注) 1 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当行(有価証券報告書提出会社)が別途保管しております。

2 XBRLデータは監査の対象には含まれていません。